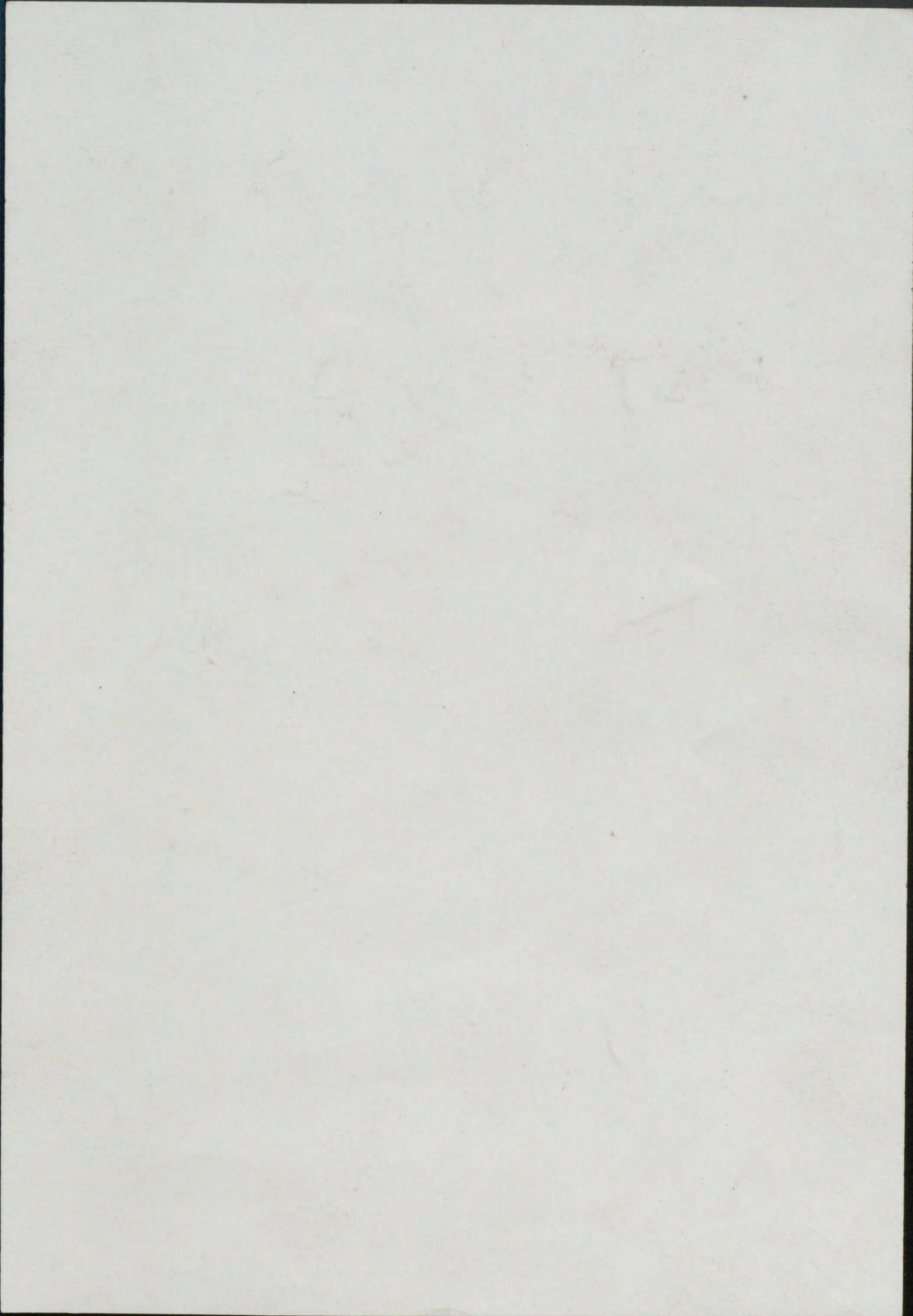


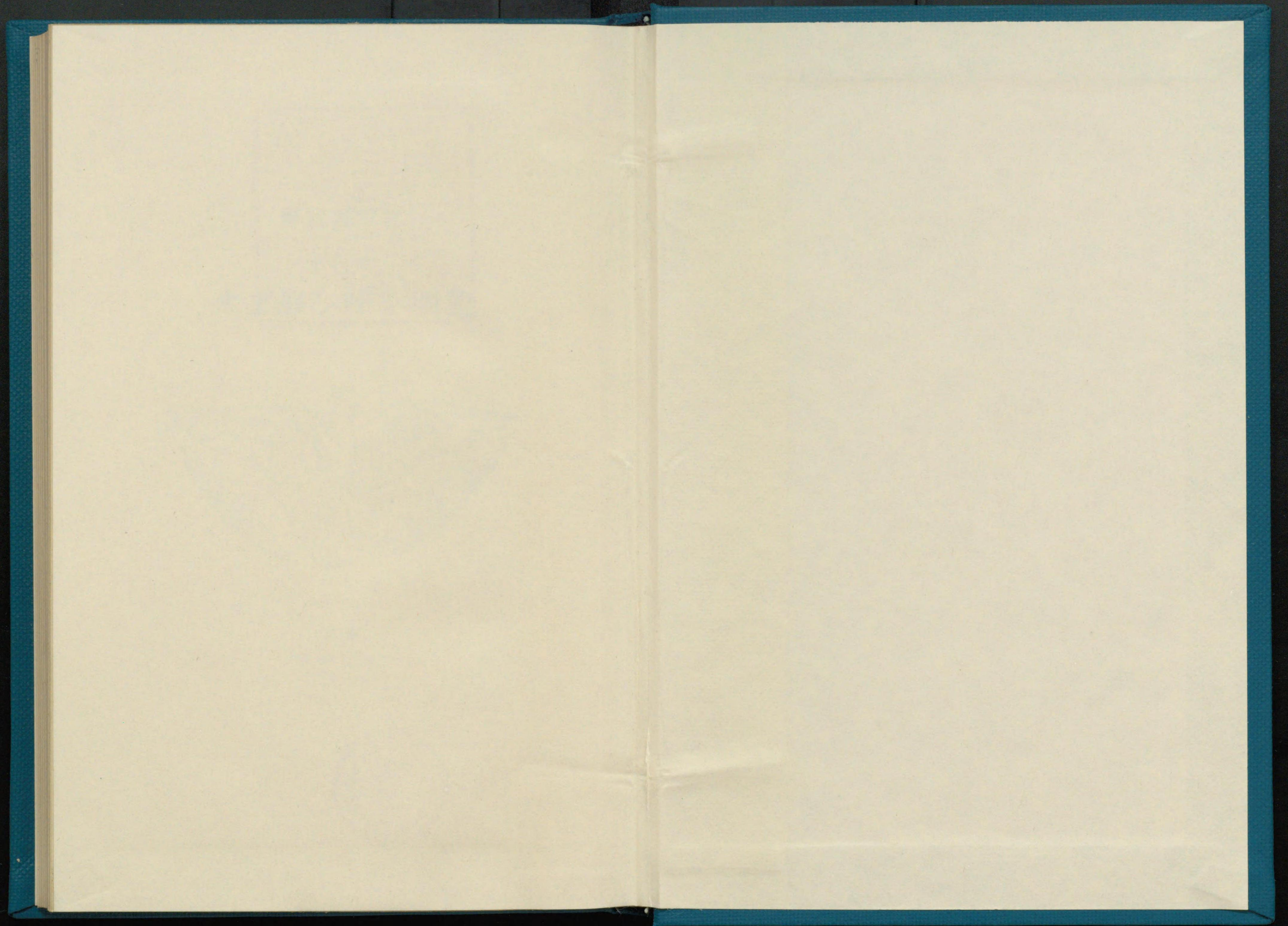
724

724-136



1200501587955

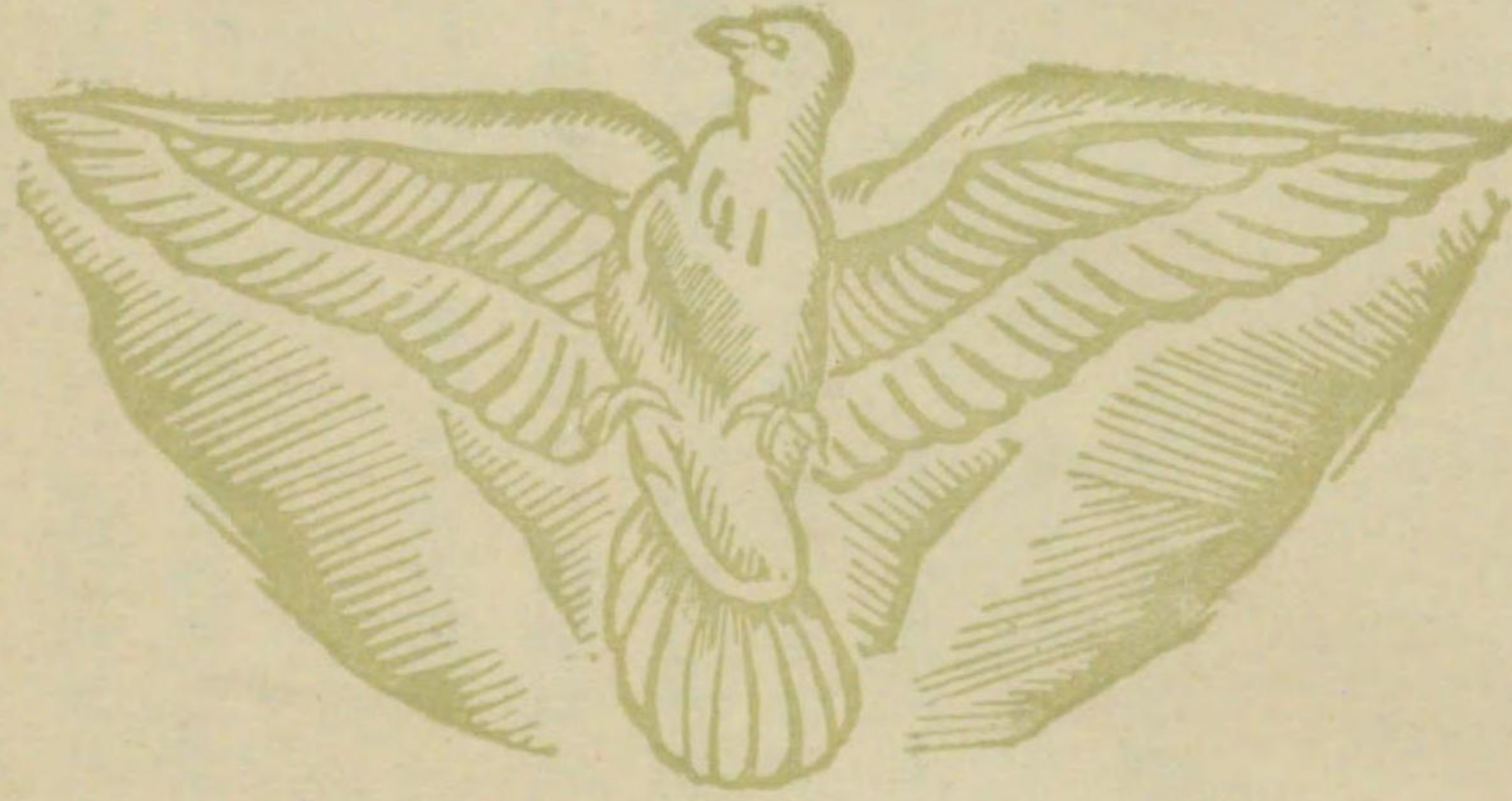




172A-30



黎明を呼び醒ませ



東京
第一書房



序

師走のどす黒い夕雲が、日本の空に懸る。これは、自分の煙突から吐き出した煤煙だ。大阪には年八百萬貫の煤煙が降る。日本は今その煤煙に中毒してゐるのだ。

師走のどす黒い陰鬱が日本の魂を被うてゐる。眞夜中に起きた時、私はこの憂鬱を思つて涙することが屢々だ。娼妓五萬二千、藝妓八萬、女給九萬、そして、闇に咲く醜業婦は猶この外に五萬を數へる。三年前から、大阪、神戸の街頭には、男娼まで進出して來た。師走のどす黒い憂愁が、日本の戸口を覗いてゐる。純潔は失はれ、騷擾は繰り返され、強盗と殺人は激増し、刑務所は増築を急ぐ。おお、東方の君主國！ その名のために私は日本の不義を自ら恥ぢる。

闇は深まり、暴風は加はる。ああ、それは物的の昏迷ではなくて、靈の痴亂だ。櫻が咲いても、菖蒲が開いても、私の憂鬱は少しも晴れはしない。盜賊の忍び入る如く、不義は、愛國心の名を藉りて民族の靈魂の殿堂を脅す。民衆はその假裝を看破して、黎明の近づくのを待つてゐる。

黎明は何時だ。日本の暗黒に代る黎明は何時だ。黒土は嘆き、禿山は泣いてゐるのに、狼はまだ闇を楽しんでゐる。

明星を呼び起し、太陽に覺醒めざめを與へよ。鶏よ、早く鳴け。燕は何時北に歸り、春は何處まで來てゐるのだ。結氷よー 結氷よ！ 日本の靈魂の結氷よ！ お前は氷の下の鯉を窒息させるつもりか？

鶯よ、加勢してくれ。雲雀も春を督促しろ。あまりにも長い日本の結氷を、あらゆる方法で恥ぢるがいい。

三原山は忙しく自殺者を呑み干し、阿片商人は專賣制度の蔭に隠れ、酒精は免許制度の城壁に立籠り、發狂者は十萬人を數へ、出獄人は百萬を越えるに至つた。犬吠岬は悲しみ、伊良子岬は憂ひ、富士山もまた首を傾けてゐる。彼等には、秋津洲あきつしほの現狀に異變まさしの前兆が見えるのだ。嘗ては、聖徳太子を生み、光明の基礎を仁義に即せしむべきを自覺し、それを憲法にまで認め

た日本民族は、密雲に太陽を見上げることさへ無くなつた。弘法は、千百年の昔、「十住」の心論に絶對無障の哲理を指示して、日本の哲學に新しき紀元を開いたが、法界聲無くして、絶對の境地は、弊履の如く捨てられてしまつた。

親鸞の末裔は、愚禿の昔を忘れ、日蓮の亞流は清澄山の體驗より離れ、徳愛は蒸發して、日本は蒙古の沙漠と相連るに至つた。

太古、日本海は沙漠であつた。近代に至つて、その沙漠がまた日本の靈魂に復活した。早魃に私の眼の涙まで蒸發した。おお、沙漠の暗闇に黎明を告ぐる乙女星スピカの昇る日は何時か。私は凍えつつ、沙漠の端に黎明を待つてゐる。鶯よ、雲雀よ、早く新春を督促しろ。沙漠の端の闇の中に、獨り立つてゐる私を憐れんでくれ。

昭和十一年十二月十六日

賀川 豊彦

目次

黎明を呼び醒ませ 一五
東京と大阪 一八

煙製の大阪人と剝製の東京人。寄附金八億圓の道路。二つの日本。「まだら」の女。清姫型と女優型。人造温泉と自然温泉。性の商品化と文藝化。大阪は保存し東京は毀つ。算盤の位取。保守的東京と進歩的大阪。働く大阪と脛噛りの東京。硫酸の雨降る大阪。森の東京、瓦の沙漠の大阪。日本の夜明け前。

永遠の春のために 三四
懺悔僧としての徳富蘆花 三六
最近の愛讀書 四六
摺鉢と遊ぶ 五〇
田園文學に就いて 五三

村から蒸發する女 五七

北氷洋の聖雄グレンフェル 五九

北海の冒險者。漁夫への奉仕。二十呎の船。氷盤上の聖者。貧民の友。

深夜の祈禱 七〇

英雄と唯物史觀 七二

傳記學の出發。感情病理學としての近代小説。個性の可能性の認識。個性としての英雄。神話の眞實性と英雄の眞實性。プルタークの『英雄傳』。人生案内記。

青葉の感化 八六

ジョン・ラスキン 八七

世界の魂を動かす力。失戀から自然研究へ。自然美への指導者。文明の精神的基礎。不幸な結婚。新しき村の失敗。淋しき巨人の死。

靜思斷片 一〇五

民衆藝術に就いて 一〇七

現代人と信仰 一一一

神に孕まれたるもの。物質は神の言葉である。宗教と道德との差。知識と信仰。將棋の駒。

不思議な世界 一一八

『死線を越えて』を書いた動機 一二〇

『良人の自白』の感想 一二三

支那に於ける太平天國運動 一二七

洪秀全の夢。妥協した宗教運動。非倫理的神祕主義の末路。キリスト教の日本化。階級化した信仰。強制と純潔の無視。

新天文學の方向 一三九

無人島の王者 一四〇

海を故郷として 一四二

神と永遠への思慕 一四八

ピラミッドの窓。永遠は果して蹂躪し得るか。永遠性なき偶像の退却。物質の崩壊。ギリシヤ宗教推移の跡。神と永遠の潜伏。不變の道德と不變の良心。私の懺悔。物質革命と精神革命。科學としての宗教。世界苦に打ち勝つ力。社會改造の原動力。フランス流とイギリス流。

勝利の悲哀 一七〇

奮闘の人・繁榮の村 一七一

林檎で救はれた村。牛乳と信用組合で更生。養鶏組合で繁榮した村。最初の組合診療所。穀殻を焼く器具。琵琶湖畔の出來事。

忠犬パピール 一七八

武藏野の魂の記録 一八〇

天文学から見た新天地創造論 一八四

宇宙の突然變異。ただ一度の機會。天地の創造。

西大阪は嘆く 一九〇

東半球の水河中間時代。北太平洋低氣壓地圖。西大阪の津浪。權藏ヶ原の漁夫。船山に登る。三寶村の全滅。西大阪は歎く。經濟的不經濟。

物質に對する新しい考へ方 二〇四

英文『日本宗教史』を読む 二〇六

魂の藝術 二〇九

國家の存亡と國民精神。生活に對する製作的態度。魂の創作と簡潔美。二百デナリの香油と緋色のマント。道德的士氣と内部的工夫。魂の落著きと信仰。透明なる魂。

德富蘆花氏の思ひ出 二一八

默想斷片 二二九

夫婦の苦闘の跡 二三二

母の力 二三七

母スザンナ。リンコルンの繼母。ガフキールドの母。母の偉大。

物質を凝視する瞬間 二四三

眼と精神美 二四四

心理作用と眼。臉と習性の結晶。鬼の様な臉。臉の延長。眼と憂鬱

天の兵車 二四八

放浪民族の運命 二四九

ニューヨーク貧民窟のユダヤ少年。世界戦争とユダヤ人。ローマ舊教とユダヤ人。ロシアに於ける迫害。ユダヤ人迫害の歴史。ユダヤ人の叛逆性。ラチン諸國に於けるユダヤ人と迫害。ユダヤ人の解放。ユダヤ人のシオン運動。ユダヤ人の天才と迫害の理由。

樹木農業の創始者ラッセル・スミス 二六九

科學的互助愛による自力更生 二七二

空地の利用。支那の移民に學べ。科學的相互愛に生きよ。

隠れた善事 二七六

物質の彼方への信號……………二七八
常識による環境の支配……………二七九

知識の限度。昆蟲の本能。絶えざる疑問。知識慾。知識と常識。智慧のな
い女たち。エスキモーの常識。治療の常識。常識は救ふ。非常識船を沈む。
水は火を消す。

キリスト劇について……………二九〇
人種戦争と宗教……………二九三

人種の融和點。良心宗教による奴隸解放。宗教意識の混亂と人種憎惡の復
活。靈魂力の勝利。

神なき經濟革命の悲哀……………二九七
レークスの故郷グロスターを訪ふ……………二九八
中江藤樹とキリスト教……………三〇二
貧民窟の女……………三〇八
愛の常識化……………三一三
小説『富士』……………三一五
聖書の感化力……………三一六

浴槽の聖者。十錢の聖書。神の發見。人殺しの改心。

釋迦と孔子とキリスト……………三二二
魂の藝術家ジョン・バンヤン……………三二四
宇宙精神と日本精神……………三二七
最微者への奉仕……………三二八
宇宙一元……………三三一
認識論に就ての瞑想……………三三三
クリスマス・カロール……………三三六

黎明を呼び醒ませ

黎明を呼び醒ませ

黎明を呼び醒ませ、魂よ。太陽の周囲を一定の軌道に乗つて廻つて来るだけが、新年といふのではない。黎明を呼び醒ませ、魂よ。昨日の藻抜けの殻の生活より、今日新しき第一歩を踏み出せ。水はぬるみ、稍の若芽はふくらむとも、おまへの心の結氷は、内側から溶かすより方法はな
い。おまへに、千萬金の富を積み與へても、おまへはそれで幸福であることは出来ないだらう。
心の幸福は、富や権力や奇蹟で満たされはしない。
私は知つてゐる。魂の結氷を破る唯一つの工夫は、おまへの魂の内側に、愛の温泉の湧くことだ。否、それにもまして愛の太陽がおまへの胸底に昇る日があれば、その時、おまへの涙の寒流の上にぶくぶく浮いてゐる憎悪の氷山が溶けるだらう。

對馬暖流が日本海を温めるやうに、おまへの魂にも暖流がさす必要がある。おまへは知つてゐるだらう。茶碗の水が凍つても、あの寒い樺太西海岸の泊居は零下四十度の寒天に決して結氷することはない。おまへの魂が結氷してゐるとすれば、それはおまへが茶碗の生活を送つてゐるか

らだと氣附かねばなるまい。魂よ、魂よ。おまへの茶碗生活を破棄してしまへ。今も、四國の田舎では、棺桶が母屋から出る時、家人が逝きし人の茶碗を門先にぶち碎く如く、靈魂の門出には、小さい茶碗が邪魔になるのだ。おまへがあまり悲しうにしてゐるのも、さてはまた、おまへが餘りよくよしてゐるのも、それはおまへが茶碗の生活に戀々としてゐるからではないか。

おまへは、まだ飲食に捉はれてゐるのか？ おまへはまだ、パンが靈魂を形作ると考へてゐるのか？ いつまでおまへは唯物史觀に迷ひ、唯物辨證法に惱まされてゐるのだ？ おまへは、茶碗が水を作り、肉體が靈魂を生むと思つてゐるのか？ おまへは、入れ物とその内容をいつまで混同するのだ？

新しい世紀の曙に、物質の世界が宇宙の靈力の表象であることを物理學者が指示してゐるではないか。

見よ、ハイゼンベルグは、光量子の世界をおまへに教へ、物質が光の塊であることを、おまへに告げてゐるではないか。さうだ、おまへは光そのものなのだ。忘れてはいけない。光によつておまへは造られたのだ。おまへは光なのだ。けれど記憶せねばならない。直線に運動するエネルギーの量子は光として現れ、屈折する量子は、曲りくねつて光を失つた物質として現れるのだ。それをアインシュタインが教へる。人間の肉體は、その曲りくねつた光の塊なのだ。忘れてはならない。我々は光源體そのものであるのだ。ただ、その光を眞直ぐに人の方に向けしないで、自分

の方に折り曲げてゐるために、我々は太陽の光芒を失つてゐるのだ。これは資本主義的生活に於いてもさうなのだ。そこで私は、その折れ曲つた小さい圓周の生活を破棄してしまへと主張するのだ。私は再びいふ、おまへの茶碗の生活を粉微塵に破壊してしまへと。くよくよするな、茶碗よ。おまへ自らが光となるためには、その茶碗を勇敢に破砕する必要がある。

信ぜよ 臆すな！ おまへは光を内側に持つてゐる筈だ。ただそれを、おまへは茶碗に伏せてゐる。おまへは、あまりにも表面的なことに捉はれ、屈折の世界に氣をとられてゐる。

物質の彼岸に、法則の智慧が動き、時空の蔭に、目的實現の叡智が覗き込んでゐることを、おまへは忘れてはならない。空間に捉はれるな、小さき戦ける靈よ。幅の世界は、絶對ではない。それは運動の速力に従つて收縮することを、フリッゲラルドとローレンツが證明し、ミリカンが實驗してゐるではないか。魂よ、空間が絶對でないことを忘れるな。そのことを忘れる日に、おまへは茶碗の水に溺れるのだ。

東京と大阪

燻製の大阪人と剝製の東京人

暢氣な點からいへば、大阪が暢氣なやうに思へます。東京はどうも肩が凝つて暮しにくい。然し女の美しい點からいへば、大阪はくらべものになりません。大阪は言葉はきたないし、女の顔は煤けてゐるし、人間がまるで燻製になつてゐます。

東京で美しいのは、丘と、森と、武蔵野です。大阪で美しいのは、海と、川と、山です。大阪の人間は百濟系統で、東京の人間は高麗系統とアイヌの混合種です。江戸つ子は人の慌てやで、宵越しの金さへ使はないといふほど思慮のない市民です。大阪人は太閤さんの時代から貯め込んで、けちん坊なことからいへば日本一でせう。ある旗本の末孫が、幕府が没落したのは江戸つ子氣質が没落させたので、上方が勢力を得たのは、全くその勤儉な貯蓄心からだつたと、尤もらしくいつてゐました。それに違ひありません。

性分からいへば、私はどちらにも嫌ひです。私は自然兒で、田舎育ちの田舎の好きな人間です。それで私は、東京も大阪もあまり好きではありません。然し、そのどちらが好きかといはれたら、私はちよつと當惑します。人間は東京が好きで、生活は大阪が好きなのです。

東京には、學生だけ四十二萬人ゐます。大學校を建てて儲けてゐる學問取次問屋もあります。東京には勳章製造販賣業者もをれば、政黨株式會社も軒を並べて營業してゐます。全くいやなところ。その點になると、大阪の方があつさりして肩がはりませぬ。東京では人間が餘つてをり、大阪では品物が餘つてをります。だから、生活を樂にしようと思へば、大阪に及くはなく、面白い人間を見附けようと思へば、東京に及くはありませぬ。東京では、美人に生れたばかりに、呉服屋の陳列箱にすわる人間さへ出て來てゐるのです。この次は金のために剝製になる人間も出て來ませう。東京は寄合世帯で、市會は年百年中ごたごたしてゐます。大阪は雜魚場大盡が顎の尖で市長を使つてゐたこともあつたくらゐ、まことにやり易いところ。す。

寄附金八億圓の道路

人口からいへば、丁度今のところは同じくらゐでせう。約二百二十萬そこそこといへばいいでせう。ただ東京は、周圍に百八十萬以上もある幾つかの町村がくつついてゐます、これを入れなければ東京とはいへますまい。

東京は日本全國から八億圓の寄附金を貰つて、街を完全に建て直しました。そのために、今では、年八萬餘回道路を掘り返さなければ、世界一の美しい街といつてもいいくらいになりました。實際、街路だけは、ニューヨークに比べても、パリに比べても、ベルリンに比べても負けはしませぬ。私は、東京が新しいだけに——復興した東京は世界で一番新しい町です——何處を歩いても新しい氣持がします。パリのシャンゼリゼか、ブルヴァール・ド・クリツシーのやうな美しい街路が東京全市到る處にあると考へてよい。大阪は最近橋を架けかへたり、淀屋橋筋を擴げたりしてゐますが、十五分間も走れば、もう狭い道路に突き當つて、震災前の東京のやうなところにしてゐますが、私は、東京の街路の讚美者です。品川から千住まで突きぬけてゐる昭和大通り連れ込まれます。私は、東京の街路の讚美者です。品川から千住まで突きぬけてゐる昭和大通りは、自動車で走つて一時間たつぷりかかりませんが、とても氣持のいい道路が出来たものです。ベルリンのウンテルデルリンデンも頗る美しい大通りですが、それにも似たものはこの昭和大通りです。數年前まで私は上海や北京の大通りが美しいと思つてゐましたが、もうとても東京の大通りにはかなひません。しかし、東京の街路の掘り返しには全く閉口です。東洋人は街路の悪いのに馴れてゐますから、昨日アスファルトで舗装した立派な道路を今日はぶち壊して下水をいぢつてゐます。低能といはうか、馬鹿らしいといはうか、開いた口が塞がりませぬ。

二つの日本

どす黒い大阪の空に比べては、東京の空は澄んでゐます。しかし、氣候は大阪の方が好いやうです。東京は九月に毎年十七日雨が降る計算になつてゐます。その時大阪は比較的晴れてゐます。どうも、梅雨が箱根から東にはおよばないで、却つて秋になつて東京は雨が多いやうです。かうした氣候の關係でもあるか、東京の文化と大阪の文化は、全く位取りが違ふやうです。

つまり、日本の中心が二つあるやうです。否、日本が二つあるのかも知れませぬ。第一、家の恰好、疊の寸法、着物の衿、壽司の作り方から味噌の味まで、大阪と東京に差があるのですから、日本に二つ文化の中心があるといつても、あまり大袈裟ではありません。

「ほんとに東京つたら、妙な處だすわ。」

さう大阪人がいへば、江戸つ子は負けぬ氣で、

「何だい、べらんめい、贅六に江戸つ子氣質が解るもんかい。」

といふでせう。言葉も、大阪と東京では、はつきり二つに分れてゐます。大阪語は、濁音が多く、東京語は澄み切つたフランス語のやうです。しかし、嘘をつく商賣人には、大阪語ほど要領を得たものはないでせう。

「さうだつか。ああ、左様か。」

を繰り返す大阪人は、「ノー」といつてゐるのか「イエス」といつてゐるのか、さつぱり見當がつかませぬ。それが大阪辯の大阪辯たるところでせう。

「そんなこと俺に出来るかい。」

江戸つ子は、さう啖呵を切つた以上、「イエス」か「ノー」かはつきりしてゐます。江戸つ子辯は、町奴の氣性を現したプロレタリア生粹の表象であります。それに比べると、大阪辯はブルジョア氣質の結晶であるといひ得られませう。しかし、その東京の町奴もだんだん衰滅して行くやうです。今では東京生れの東京人は少くて、地方生れの東京人が多いのです。つまり東京は、私のやうな田舎生れの東京人で七、八割までは組み立てられてゐるのです。だから、生粹の江戸つ子辯もなかなか聞くことが出来ませぬ。東京には二十一萬人からの中等學校以上の學生がゐますが、その九割までは地方の學生です。それに官吏、軍人、文筆労働者等、地方出身の知識階級と腰辯が大勢群居してゐますから、東京市はもはや東京市民の東京ではなくて、田舎者の東京市のやうな感じがします。おそらく、東京市民に愛市中心の少いのは、こんなところに原因があるでせう。そこへゆくと、大阪人は偉いものです。

靱の肥料問屋の間では、今だに大正時代の當番札を家竝に廻してゐますが、東京にはそんな所は何處にもありません。舊い東京はもう全く滅びてしまひました。東京はほんとに新しい東京です。それだけ落著きもなければ生活の基準もありません。それこそテンポの速い銀座行進曲を唄はねばならない所です。

「まだら」の女

私が東京で「番嫌ひなのは、學校營業者と市役所の建物が數箇所に分れてゐること、電車の遅いこと、失業者の多いこと、待合の多いこと」です。私が大阪で嫌ひなのは、どす黒い空と、百尺以上の煙突が三千本近くもあることと、大阪辯と、女の着物に色彩の調和がないことです。大阪の女ほど下手に着物を着る人種は世界に稀でせう。空の色との關係もあるが、大阪の女はアメリカ人に次いで、濃厚な色彩のついた着物を着る癖に、羽織と着物の調和がなく、長襦袢と上衣に調和がなく、半襟と顔面の皮膚の色に調和がなく、まるで、下手な看板描きが描いた美人像のやうに、色彩だけこてこてならべるばかりで、一目見ただけで嘔吐を催します。さういつたからといつて、私は大阪の女が嫌ひだといふ譯ではありません。氣前としては、大阪の女にもいいところもあるし、東京の女にもいいところがあります。

清姫型と女優型

大阪の女は大體情調が纏綿としてゐます、悪くいへば、たつきます。東京の女はさらさらしてゐます。思ひきりがいい。交際しても面白い。その代り呆氣ないところもある。大阪の女には安珍清姫的なところがあります。そこがまた何ともいへぬところで、つまり世話女房的なのです。

これは全く淨瑠璃文學の感化でせう。

東京の女は、吉原文化が去つて以後、女學生文化となり、最近キネマ・スター文化に移つて来たためか、どうも飽きつばい。戀愛に粘著力がないやうです。勿論、カフェーの女給の戀だけは東京も大阪も同じでせうが、着物や訛で判断出来ないほど、大阪の女にはいいところがあります。斷つて置きますが、私の妻は横須賀の女です。美人は大阪には居りませぬ。大阪へ歸ると、百人の女の中に一人くらゐ美しいのがゐるかと思ふくらゐです。東京に來ると、十人に一人は美人に出會ひます。ところが、秋田の横手へ行くと、十人の中九人まで顔立ちのよい美しい顔をしています。小野小町も秋田の女ですが、あれは人種が違ふためでせう。東京には東北の美しい女が多く出て來てゐるので、十人に一人くらゐ美しい顔が見られるのでせう。

しかし日本の娘の顔も、とんと美しくなりました。榮養もよくなつたのでせうが、文化も進んだのです。あるひは、生物學的に云つて、趨移時代に入つてゐるのかも知れませぬ。秋田縣の美人などは、西洋の女にくらべて、決して見劣りはしません。多少美の標準が違ふかも知れませぬ。しかし、やはり美しいには違ひありません。

最近、婦人雜誌の表紙畫などは、全く大阪の女を描かなくなつて、東京以北の顔が標準になつて來たやうです。つまり、どうやら東北文化が雜誌の表紙で勝利を得て來さうです。勿論大阪でも、もともと河内アイヌであつたものの子孫は、大きな眼をして相當に美しい表情を持つてゐますが、生氣の抜けた蒼い顔色をしてゐるのは何のためでせうか。

人造温泉と自然温泉

大阪人は風呂が好きです。それに比べると、東京には浴場の數が少いやうに考へられます。大阪人には妙な心理があつて、休日といへば郊外の温泉に行つて骨休みの一日をしなければならぬものと思つてゐるらしい。そのあたりは昔のローマ人によく似てゐる。偶像的なローマ人は、浴場と色慾と、娯樂と賭博を一つにして、大きな浴場を経営しましたが、偶像教的な大阪にも確かにこの傾向があります。大阪の何々浴場といふものは、娯樂のデパートメント・ストアです。寶塚温泉、築港の潮湯、生駒温泉、濱寺温泉、天王寺電氣浴場、堺大濱温泉等々、大阪は人造温泉で囲まれてゐます。それが相當にやつて行くから不思議です。勿論最近、甲陽温泉のやうに没落したものも、中にはないではありませんが、借金しながらでもやつて行くのが不思議です。そこへ行くと、東京の近在には、箱根あり、伊香保あり、少し遠いが上諏訪あり、熱海あり、修善寺あり、湯河原ありで、大阪人のやうに人造温泉を設ける必要がないものですから、娯樂設備のある温泉は必要としてゐないやうです。

性の商品化と文藝化

大阪には世界一の松島遊廓といふ不思議な白奴街があります。アメリカにおける眞鑄の「貞操切符」を日本人はいとも珍らしげに笑ひますが、松島遊廓の移轉問題は、元國務大臣箕浦勝人氏まで未決監に放り込んだではありませんか。この方面から見れば、大阪は日本一の公娼制度の發達した處です。その反對に、東京は最も私娼制度の發達した市街といふことが出来るでせう。男子の人口割にして、東京には大阪のやうに公娼は多くないのですが、玉の井や龜戸のやうな、天下御免の私娼窟のある處は、大阪で探し當てる事が出来ませぬ。この點は東京はどうかしてゐます。しかし、なほそれより不思議なのは、東京に遊藝の出来ない藝者の多いことです。藝者屋の數において東京は日本一です。そこに賞勳局總裁天岡某の墮落する原因もあつたでせう。ここにも大阪と東京の差が發見出來ます。大阪の肉慾は商品化し、東京は性慾を文化的に取扱はうとしてゐるのです。こんな方面から見れば、東京の文化が可哀さうになります。

大阪は保存し東京は毀つ

東京が舊いものをぶち壊した割合に、大阪はまだ舊いものを多く保存してゐます。天王寺の金堂、文樂の人形芝居、船場、島之内の箱入娘、徳川時代の徒弟制度と、多くの死んだ迷信を大阪は不思議に保存して行きます。東京の浅草がさびれても、大阪の道頓堀のさびれることはありません。築地の小劇場がつぶれても、文樂座は不思議に續いて行きます。おそらく、大阪語の續く間、淨瑠璃文化がつづき、淨瑠璃文化の續く間、文樂座の人形芝居がつづき、文樂の人形芝居がつづく間、義理人情を中心とする大阪文化はつづいて行くでせう。

算盤の位取

東京の人々は、大阪人がいかにも金にきたないやうにいひます。しかし、どうも私はそれが信じられませぬ。金にきたないのは却つて東京人であつて、大阪人は必要な時には喜んで金を投げ出します。私は、大阪人の道徳が東京人に比べて低いとは決して思ひません。ただ大阪人が東京人に比べて理窟の少ないことだけは事實です。勿論大阪人は算盤をおきます。算盤だけは確かです。しかし、算盤をおいてみて、それが社會のために有効であると思へば、大阪人は決して金を惜しみません。その點からいへば、東京の金の方が筋が悪く、東京の金持は政治を利用して儲けた金が多いから、ある糸筋がその後についてゐます。大阪の金にはそんな糸筋がついてゐません。だから事業をしようと思へば大阪に限ります。大正九年の恐慌時などでも、總解合を完全に實行し得たのは大阪の商賣人でありました。綿布商の如き、億にも近い金額を敢然として解合つたといふのですから、大阪の商人は見上げたところがあります。このために、大阪で大新聞が發達し、大きな紡績會社が成功するのです。神戸や京都などは、財的にいつて全く大阪の奴隷です。いや、大新聞の讀まれてゐるところは、すべて大阪の經濟的勢力が支配してゐるところなのです。大阪

の資本主義は徹底してゐますから、帝國主義化することを警戒しつつ、儲けて行かうといふ氣性が見えます。下手な政治に巻き込まれると、却つて儲けが薄いと思つてゐるのかも知れませぬ。しかし可哀さうに、大阪の商人の多くは時代が變つてゐることに氣付かなかつたやうです。大正九年以後の恐慌に大阪の舊家といふ舊家が九分九厘參つてしまつたことは、ほんとに氣の毒です。

保守的東京と進歩的大阪

東京は進歩的のやうに見えて、頗る保守的です。改造された東京には、未だに古い時代の店飾りをやつてるところがあります。大阪にもそんなところがないではありませんが、大阪は徹底した資本主義の都市ですから、便利なことといへば片つ端から改造して行きます。ここが大阪の面白いところです。

大阪は東洋の商權を支配してゐます。東京の商人は日本だけしか支配してゐませぬ。東京が不景氣になれば、徹底的に困難するのは市場が狭いためです。そこになると、大阪は東洋相手ですから、不景氣だといつても、まだどこかに脈が残つてゐます。東京人は大阪人を馬鹿にしますが、東京の商賣は日本的で、しかも政府のお役人の世話になつてゐるものが多いから、あまり威張るわけにはいきませぬ。その點になると、大阪は、政府のお役人の世話にもならなければ、政黨株式會社の世話にもならないものが多い。

大正七、八年ごろの好景氣時代でも、成金は大阪、神戸に多く、東京、横濱に少かつたのは、東京の商賣人が世界を相手にしてゐないことをよく證明します。一時大阪の綿布商が世界一の市場を形成してゐたことがありましたが、東京にそんな市場のあることを私は聞いたことがありません。鐵工事業でも造船業でも、大阪は世界でも珍しい分業組織で工場を經營して行きます。そんな處は東京の何處を探したつてありませぬ。

大阪は、アメリカニズムの徹底的に發達し得る工業都市です。勳章や地位や名譽が何の效能も持たないところです。能率本位の都會で、凡てがきちんきちんと纏まつて行きます。近世資本主義の發達は、大阪において頂點近くまで來てゐます。手形交換高からいへば、大阪は東京に譲るやうですが、政府筋の手形を除き去れば、東京の商人はほんとにどれだけの手形を廻してゐるでせうか。震災後の東京を救うたのは、關西の力です。そして關西の力の半分までは大阪の力であるといふことが出来るでせう。日本の資本主義が堺港から發達してもう七百年になります。それがそのまま、大阪の船場島之内に引越して來たのですから、大阪には東京に比べて更に古い實業上の訓練があるわけです。東京の商賣は町奴の商賣で、何だか頼りないところがあります。儲けより文化の方が先に立つ傾向があります。尤も、そこがよいところといへばいへます。

働く大阪と脛嚙りの東京

しかし、大阪は爺臭い氣がします。ある青年が私にこんな事を云つたことがあります。

「東京を歩くと、數千の青年に會ふが、大阪に來ると、青年がほとんどゐないので、何だか悲しい氣がする。」

これは當つてゐます。それだけ大阪は働く人間の多いところで、東京は勉強する人間の多いところですから。つまり、大阪は生産都市で、東京は消費都市です。大阪で大學生に出會ふことは實に稀ですが、大阪で労働者に會ふことは珍しくはありません。大阪の労働者は近ごろは市會議員にもなれば代議士にもなりますから、威風堂々たる容貌をしてゐる。このことは、西尾末廣君の顔を見ればよく判ります。時代は變つたものです。江戸が上方の勢力によつて没落したと同じやうに、東京は大阪の金力に屈服する時代が來ました。田中大將は大阪の久原の金で總理大臣になり、大阪の島徳の金で政黨を操縦したのでした。しかし、まだまだこれからです。

大阪は、日本經濟的勢力の中心地です。朝鮮、滿洲、支那、南洋へは大阪の方が便利です。東京は北海道、樺太、それから東北地方しか相手に出來ません。大阪は瀬戸内海といふ實に便利な交通機關を持つてゐます。瀬戸内海の周圍には二十五の都會が並び、それがみな大阪を中心にして發達してゐます。瀬戸内海を除いて大阪はありません。その點からいへば、産業的に雄飛しようとするものは大阪を中心としなければなりません。東京は威張る人間の住む都會です。大阪は働く人間の住む都會です。今に大阪が東京を蹂躪する時代が來るでせう。

硫酸の雨降る大阪

しかし、大阪も随分大きな犠牲を拂つてゐます。世界の都會で大阪ほど乳兒死亡率の高い都會があるでせうか。とにかく、大阪では硫酸の雨が降ります。それに比べると、東京は幸ひです。乳兒死亡率も最近はとんと減退して、出生兒千人に對して百二十人くらゐになりました。大阪では、未だに、出生兒千人に對して百九十くらゐ死んでゐるでせう。その點は大阪人の無頓著にびつくりします。大阪人は儲けさへすれば子供など殺しても平氣でをれると見えます。大阪は地震もなかつたし、街も落ちついてゐる關係もあるでせう。社會事業は相當に整うてゐます。貧民窟らしい處も少く、實業家も社會事業に相當に熱心です。東京は大震災もあつたし、都市もごてごてしてゐる關係上、すべてが遅れて來ました。方面委員でも何でも、すべてが政治化するところが東京らしい。東京はその代り早く理解してくれませぬ。しかし金は少しもくれませぬ。大阪は理解してくれない代りに金だけはくれます。新聞社に寄附金の集まるのは大阪に限ります。東京は、宣傳と新聞紙と雑誌と古本屋の都會です。理窟が先で實行は後です。大阪は理窟をいはないで實行します。だから、これから社會運動でもしようと思ふものは、大阪市を中心しなければ出來つてありません。

東京の無産政黨は年中分裂してゐます。その眞似をして大阪も近ごろは分裂するやうですが、

元來大阪は分裂するところではありません。大阪ほど纏め易いところはないのです。將來産業組合でも大いにやらうと思へば、大阪は日本の中心地です。銀行を纏める點からいへば、東京などは比較的便利でせうが、商賣をしようと思へば、三井でも三菱でも、久原でも鈴木でも、皆大阪、神戸を根據にしてゐます。大阪、神戸を根據にしなければ、日本を支配することが出来ませぬ。この後もさうでせう。日本の無産運動も、大阪、神戸を根據にしなければ、決して日本の將來を支配することが出来ませぬ。私には東京の人間が面白いと共に、大阪の商品が興味をそそります。東京人と大阪の商品がもう少し接近して、もう少し理窟をいはないで、大阪のやうに肩がはらな

森の東京、瓦の沙漠の大阪

大阪で淋しいのは森のないことです。大阪は全く瓦の沙漠です。東京には、山手に行きさへすればどこにでも森があります。その代り、大阪には澄み切つた淀川の水もあり、瀬戸内海の汀もあります。海から近づくと、大阪はとても景氣のいい都です。安治川口の帆檣の美しさは東京では見られませぬ。しかし、それは全く人造的です。私は大阪や東京のやうな大都會を作ることと罪惡の一つにかぞへてゐます。文明が進めば、昔の御城下くらの田園都市を澤山作つて、その間を高速度鐵道や飛行機で聯絡させるといいと思ひます。今にさういふ時代が来るでせう。

日本の夜明け前

東京の學問は進んでゐます。しかし、まだ世界を指導するだけになつてゐませぬ。精神運動からいつても、まだまだです。大阪は更に遅れてゐます。しかし、素直さからいへば、東京に比べて遙かにましです。大阪は未開墾地です。東京は荒されてゐます。文學運動も東京のそれはあまり大したものではありません。プロレタリア文學も、東京だけでは完全なものにはなりません。東京も大阪もまだ未成品です。大きな魂はこれから出て来るでせう。大阪の空が澄み、東京の華族屋敷に茶葉服の青年が出入りするやうになる時、その時、東京や大阪に新しい文化が漲るでせう。それまでが辛抱です。東京、大阪の文化にはまだ倫理的な神祕主義が足りませぬ。それが加味される日まで、東京の刑務所には、大臣が引續き拘引され、大阪の裁判所には實業家の大頭が度々引出されることとせう。

倫理的な神祕主義が、新しい日本の理想として實現される日まで、大阪も東京も永遠に呪はれてゐませう。日本は今、^{オト}的なしに鐵砲を放つてゐます。日本の島々が弓なりに曲つてゐるやうに、日本の理想は歪められてゐます。それが矯正される日まで、大阪も東京も共に片端^{かたわ}です。文化は魂の底から湧き出て來なければなりません。

永遠の春のために

春だ、春だ、若芽の春だ！ 木蓮はとつくの昔に咲き、櫻も、若芽に先んじて咲き揃うた。地球の自轉に伴奏して、大地は奇しき色調のメロディーを奏でる。大空は花曇りにかすみ、雲雀は、春の歡喜を急テンポで歌ひつづけてゐる。春だ、春だ！ 水はぬるみ、萍草は、水底から浮かび上つてきた。青蟲はそろそろ蛹を抜け出し、北の國の農夫は、雪靴を軒の下に放り込んで、甲斐甲斐しく畦道に急いで行く。

ああ、しかし、大地の春に逢うたわれわれの姿の、何といふさもしいことだらう。田園は痩せ衰へ、街頭には、失業者が充ち、貧民窟には、刑餘の前科者が充滿してゐる。ああ、人生に春はないか？ 野良に蕾は綻んだけれども、私たちの魂の蕾の開くのはいつか？ 巷に愛は消え失せ、最微者は罵られ、利慾と暴力が、狼のごとく、人肉に飽く。人間の沙漠に、サフランの花はいつ咲くか？ 友よ、歎をもつて、愛の種子を植ゑ付けよ！ 愛の種子を播かずして、愛の實を求めんとすることは、何といふ愚かなことだらう。今年も、人生の春に愛の花は見なかつた。播けよ、

育てよ、協同愛の精神を。いつの日にか、必ず、人生の春にも花が咲かう。私は春にそむいて大地に祈り、永遠の春のために、涙とともに、十字架の種を播かう。



懺悔僧としての徳富蘆花

一

逝く日が近いと氣づいてゐたが、彼の心を靜かな森の外側に引き出さないために、私はわざと伊香保まで行かなかつた。逝いたことを新聞で知つた私は、蘆花氏の氣持を思うて泣いたのであつた。

蘆花氏は、一生のうちに、何人くらゐの人を愛したか私は知らないが、嚴格なピューリタニズムを持つた彼の良心は、さう多くの人を愛し得なかつた。その中でも私が彼に愛せられた一人であることを知つてゐるので、嘸かし私の顔が見たかつたらうとは考へてゐたものの、森の靜かさ^さに浸つてゐた彼をさう度々攪拌するのは氣の毒であつたので、時々たまにしか會ひに行かなかつた。しかし、蘆花氏は、私の出してゐる個人雜誌『雲の柱』の愛讀者で、隅から隅まで讀んでゐられるのには、私も恐縮した。

危篤の傳へられた夏の初めの或る日のことである。夫人から私に會ひたがつてゐると云ふ言づけがあつたので、私はあの靜かな機林の細道をつたつて柴折戸^{しやせりど}を叩いた。

寢てゐるだらうと思つてゐた私には、元氣よく椅子にもたれて、起き上つてゐる蘆花氏を見ることは、全く不思議であつた。蘆花氏は直ぐ信仰の話をし出した。

「もう神に賭りました。」

さう彼は大きな眼を光らせて私に云つた。

その前の月に、「神の賭博者」といふ題で『雲の柱』の巻頭語を私は書いた。そのことを彼はいつてゐるのだ。彼は私と一緒に祈つた。足が徳利のやうにはれ上つてゐた。蘆花氏は、私が祈つた時に大きな聲で「アーメン」と付け加へた。

『富士』の話が出た。私は、今後病氣が良くなれば、富士の頂上^{きほ}を究めたものは降りて來ねばならぬことを彼に話した。

「さうだ、さうだ。」

と彼は頷いた。彼が逝く前、數年間に彼は贖罪と云ふことを屢々私に繰り返した。彼は色々な形でキリスト教の意味を瞑想してゐたやうである。勿論彼のキリスト教は、一般のキリスト教とは大分距離があつた。彼の純な非妥協的な氣持が、村で酒を賣りながら教會に出席する或る人たちと相容れなかつたことは當然である。彼は、伯母にあたる矢島楯子をさへその點では容赦しなかつた。

つた。彼は、あまりに正直で、あまりに神のための馬鹿者であつた。彼は、彼の五つの時に起つた出来事の爲に、ほとんど常人には解せられない精神的不具者になつてしまつた。それは『新春』の初めを見ればよく解る。恐らく日本で書かれた最も厳格な告白文の一つは『新春』の最初の數十頁であらうが、私はあまり氣の毒で、一々彼の胸のうちを訊き正す勇氣を持たなかつた。彼に嚴肅な神の姿が濃厚になると共に、あの『新春』の告白録に出てゐるやうな影が彼の全身をおほひかくして、彼を死の蔭に追ひやつた。

彼は一生を懺悔僧として送つてしまつた。世間では彼を我儘者と呼び、臆病者と云ひ、あらゆる言葉で彼に悪評を浴びせかけたが、五つの時の出来事を眞面目にとつた彼は、父の死んだ時すら、お葬式に出られなかつたほど悲しみ悶えた。

兄貴に對して、色々不満足な點もあつたらう。しかし、私が見たところによると——少しは間違つてゐるか知れないけれど——彼が最も不満だつたのは彼自らに對してであつた。そしてその次は彼の母に對してであつた。そしてその次に彼の母をさうした間違ひに導き入れた父に對して彼は不満足を感じてゐた。兄貴に對する不満足の様子は、彼の魂にとつては、さう大きな問題ではなかつたらう。彼はそれほど野暮ではなかつた。

彼は一生の求道者であつた。そして、彼の不思議な心理を知るものは、キリストだけであつたらう。彼は地上に於ける最大の罪惡に就いて煩悶した。そのために彼の心は暗くなつた。彼はそ

のために父と母との死ぬのを待つてゐた。まあ何といふ矛盾したいひ方であらう。しかし、彼の五歳の時の出来事が、そんなにまで彼を苦しめたのであつた。そして母が死に父が死んだ後、初めて彼は罪の赦されたことを意識し、復活のキリストを見たのであつた。私は、彼ほど自己に向つて嚴肅だつた懺悔僧を未だ日本に於いて見たことがない。一面からいへば彼はキリストを信じながらも罪の赦しを信じなかつた人間であらう。そこに彼の弱味があつた。けれども一面からいへば、そこに人間としての實に深刻な自己内省が彼を支配してゐた。あれほど内側に深く食ひ入つた峻嚴な道德律を守つてゐた人間を私は多く知らない。彼は實に寂しい人であつた。あまりに寂し過ぎた。彼は自分が作つたトラピストに自分一人であつて籠つた。ああまでしなくてもよさうなものだのと人々は考へたであらうが、魂の扉の内側を知る人にして初めて蘆花氏の煩悶は讀めた。今時のクリスチャンにあれば厳格な人は少い。彼は眞個のトルストイアンであつた。いや、トルストイは贖ひに就いて瞑想しなかつたが、健次郎氏は贖罪に就いて瞑想するまで、人間の誤謬と良心の罅に就いて悩んだのであつた。さうした自己内省の領域を知らない人間にとつては、蘆花氏が『新春』以後に書いたものは少しも面白くならう。しかし、彼ほど正直な嚴格な心理學者はなかつた。彼は自己を隅から隅まで點檢して新生への勇躍に最上の努力を拂つた。私がかういふ書き方をすると、文學的に斯ういつてゐるのだと人は考へるかも知れないが、彼の宗教的氣分をよく知つてゐる私である。それが現實的にさうであつたことを知つて貰ひたい。

私は、彼が情熱的に私を愛してくれてゐることを知つてゐた。何年前のことであつたか私は忘れてしまつたが、日は確か一月十四日の晩であつた。彼が再度の聖地旅行から歸つて来て間もない頃である。彼は愛子夫人と、私が兵庫の湊川教會で説教してゐるところへやつて來た。そしてストーヴの脇の長いベンチに夫婦で腰を下ろした。その頃はまだ日本では婦人があまり洋服を着てゐなかつたから、愛子夫人の洋服姿が眼についた。私はその時まで蘆花氏の顔を十分知らなかつたので、人の好きさうな米國移民の夫婦者が私の話を聞きに這入つて來たのだと考へてゐた。話が濟んで會衆が去つた後、彼は豫言者のやうに私に近づいて來た。そして、

「君は僕の顔を憶えてゐないか。」

かう彼は私に訊いた。勿論私は彼の顔を憶えてゐる道理はない。明治四十年頃、青山學院の講堂で、黒眼鏡をかけた蘆花氏の顔を遠くから見たことがあつたけれども、その輪郭を私は記憶してゐない。

「君は僕の兄貴の處には屢々行くにかかはらず、僕の處には、何故來て呉れぬのだ？」と彼は云つたけれども、私はまだ氣が附かなかつた。そして愛子夫人が「徳富です。」と云はれたので、彼の兄の蘇峰氏とその輪郭に似通つてゐる點のあることを私は發見した。蘇峰氏は私を手引きするやうに一々親切に色々なことを教へてくれる。あの忙しい文筆生活の中で、私の爲には六時間も七時間も色んなことに就いて個人的指導を與へてくれるのであるが、それに引きかへ

て蘆花氏の峻烈なこと、私は初め會つた時には全くど膽を抜かれてしまつた。しかし、私が日本人から歓迎をうけたうちで、蘆花氏の歓迎くらゐ私を歡喜せしめたものは無かつた。彼は私に飛びついて來て、西洋人がするやうに私をかたく抱きしめ、子供に云ふやうに私に感謝の言葉を述べてくれた。彼は私の詰らない詩集『涙の二等分』と共に太平洋を東から西に渡つたことを告げてくれた。そしてその場で私に二つの忠告をしてくれた。第一は貧民窟を出よと云ふことであり、第二はあまり苦しい生活をしないで、少し樂な生活をせよと云ふことであつた。そしてその忠告は、子供が生れることによつて、守らざるを得なくなつた。妙な關係で私は徳富兄弟にこの上なく愛せられるやうになつた。殊に蘆花氏は私を子のやうに思うてくれたので、私は色々と思上ることに就いても議論をした。

彼は眞個の意味に於いての藝術家であつた。そのためであつたか、彼は随分世評を氣にした。私のやうに世間の評判を少しも氣にしない人間にとつてはをかしいくらゐであつた。彼は明治四十年頃の若さを何時も持つてゐた。私が、彼の自然的作品が非常に好きであると云ふと、彼は本當に喜んだ。彼は自分の庭の凡ての木に就いて色々面白いローマンスを私に物語つてくれた。全く子供のやうになつて私を歓迎してくれるのが何時ものことであつた。私は粕谷のこはれかかつ

た萱葺の家を訪問することを何時も恐れた。彼は私に無理に食物を奨める癖があつたからである。ありつたけの果物と、ありつたけの野菜を私にすすめた。あんなにして閉ち籠つてゐたけれども、新聞をよく読んでゐるものだから、世間の事情には實に詳しかつた。作品に對しては實に嚴格で、『富士』などは二年も前に書き上げてゐたにかかはらず、未だにこつこつ書き直してゐた。校正も自分一人でした。それを考へると、私のやうな大ざつばな人間は文筆で飯を食ふ資格が無いと何時も考へる。

彼は何時も支那服に似通つたぼてぼての着物を着てゆつくりした生活に浸つてゐた。家具類に對しては頗る無頓著で、雜然として部屋一面に取り散らしてゐた。或る人は粕谷の小屋を粕谷御殿と呼んだが、そこは御殿でも何でもなく、彼は實に貧乏臭く住んでゐた。生活様式は、疊の上に椅子と寢臺を用ひてゐたやうであつたが、再度の聖地旅行からは百姓もあまりしなかつたやうである。話題は彼の兄蘇峰氏のやうに豊かではなかつた。蘇峰氏はイギリスの政界の事情などは、日本の政界以上に詳しく知つてゐるが、蘆花氏には、そんな知識は勿論無かつた。しかし、日本民族を愛する點に於いて、蘆花氏と蘇峰氏とどちらが強かつたかと云へば、私は弟の方が感情に強かつたやうに思ふ。「太平洋を中心として」の編輯の如きは全く蘆花氏の此の氣持で編輯されたものであつた。私は二三時間もそれに就いて蘆花氏と離れて議論したことがあつた。彼は詩人であつただけに、實に極端な議論を吐いた。それが子供らしくて、私には何時も面白かつた。

議論に疲れると、

「もう已めて置かうね、賀川君、見方の角度が違ふのだからね。」

と云ふのが何時ものことであつた。

三

私は屢々彼を社會に連れ出して『新紀元』時代の若さを彼に與へようと努力してみた。さうすることが、彼の藝術家としての生命に新しい刺戟を與へることもであると考へた爲に。しかし彼はそれを忌み嫌つた。彼は初めて私の『家庭科學大系』に「アダム、エバ論」を書くこと云ふ約束をしてくれた。おそらく、彼自らの氣持としては、私のやうな雜駁な生活をするのが、いかにも氣持悪く考へられたものらしい。彼は、或る創作に専念し出すと、それを完成するまで、他念なくやり遂げる藝術的良心があつたためであらう。私の誘惑に決して耳を貸さなかつた。それで私も敢てそれを繰り返さなかつた。彼は靜かに、彼の家を取り圍む樸林の精に聽き入つて、武藏野の自然に浸つた。彼は自分の庭に生えてゐる一本の雜草すら刈り取ることを忌み嫌つた。それほど彼は自然を好愛した。おそらく、愛子夫人の次に彼を慰めたものは、彼の家を取り卷くあの美しい雜木林と雜草であつたであらう。

蘆花氏の宅を訪れる時、いつも必ず口癖のやうにきくのは、アダム、エバといふ言葉であつた。彼はその言葉を詩的に用ひた。彼は男女二つを合して完全な人間になれることを私に主張した。最初のほど、私はその言葉を軽くうけ取つてゐたが、蘆花氏はそれを復活した人間の姿としてうけとつてゐることに気がついて、いつもその言葉に頷いたものであつた。彼はその長い煩悶と自己批判の後に、靈肉合致の新生命を、眞裸のアダムとエバの中に発見した。彼の云ふアダムとエバは、創世紀のアダムとエバではなくて、復活のキリストを見たアダムとエバであつた。彼の煩悶を知らない人間には、蘆花氏の云つたアダム、エバの言葉の如きは、本當に無意味である。今日の時代があまりに宗教から遠ざかつて行つた爲に、蘆花氏のターミノロジーは如何にも變に聞えるけれども、それは決して彼の哲學ではなくて、彼の體驗がさうした氣持に導いたのであつた。新しきアダム、エバの結論に達した蘆花氏は、彼自らの武藏野のエデンに於いては非常に幸福な生活を送つたやうであつた。彼はうまいものを食ふ工夫も知つてゐたし、さう私のやうに月末の米代にも困るやうなことは無かつた。しかし、女中はあまりに寂しいので困つてゐたらしい。蘆花氏は、『富士』が完成する頃藁小屋を破壊して、洋式の建物を一棟造り、その屋根で星を研究するのだと私に家の設計の話まで語つてゐたが、たうとう家を改築しない前に、彼は彼の云

ふ天の親爺の處に歸つて行つた。

彼が植ゑた檜はもう直徑一尺ばかりになつて居る。「みみずのたはこと」に出てゐる石地藏は相も變らず南向きに据ゑられて、武藏野の春秋を楽しんでゐる。私のために書いてやると云つた「アダム、エバ論」を彼は書かずに死んだ。彼は今靜かに、彼が嘗つて愛した櫟林の間に眠つてゐる。しかし、私は近年著しく發展して行く大東京の勢力がいつまでその櫟林を靜かに美しく保つかを疑ふ。おそらく、ここ數年を出ないで、上高井戸村から千歳村にかけて厭なトタン張りの家が澤山建つて行くことであらう。

その厭なトタン屋根を見る前に、日本の大きな自然詩人は地上を去つた。彼の葬式のある日に私は播州印南郡の村々を馳けずり廻つて、既にくづれ落ちてしまつた農村の美を、もう一度復活させようと聲をからしてゐた。その日、私は日本最初の普選に村の無産黨を支持してゐた。それは彼に對する私の最大の弔意であつた。その日の私の演説は臨監の警官によつて中止を命ぜられ、私たちの同志は、十數名警察に呼び出されて、取り調べをうけた。さうした瞬間に、私は、靜かに眠る蘆花氏の柩が土に埋められることを記念せねばならなかつた。

「賀川君、あまり澤山な仕事をしないで、もう少し樂にやりたまへ。」
さうした熱情の籠つた彼の忠告が、今なほ私の耳の底に残る。おそらく、彼が櫟林の中に眠つても、彼は私の無産運動を土の下から支持してくれてゐるであらう。私はそれを信じてゐる。

最近の愛讀書

一

一生はあまり短いので、私は詰らない書物を讀まないやうにしてゐます。専門の科學に關する外は、有名な書物だけしか讀みません。愛讀の書物は、宗教的のもの、自然に關するもの、哲學に關するもの、藝術に關するものなどが最も多いのですが、毎朝『新約聖書』を讀んでゐます。座右にはいつも『華嚴經』を置いてゐます。私の社會運動の教科書は、トーマス・カーライルの『佛蘭西革命史』です。自己の良心的批判がにぶつて來ると、カーライルを讀み直します。ラスキンは藝術と自然美を見る目を私に與へてくれました。傳記ものの中では、ウエスレーの日記と、フォックスの日記と、ジョン・フレッチャの日記が最も私を感化してくれました。哲學ではヘーゲルの『歴史哲學』と、ロバート・バウンの『形而上學の第一原理』が、私の青年時代を最も刺戟してくれました、プラトンも繰返して讀んでゐます。

自然を見る目はファーブルの『昆蟲記』によつて深く教へられ、あの書物だけは何遍でも讀みたいと思つてゐます。カール・ペアソンの『科學範疇』も良い本だと思ひました。ソデイの『物質とエネルギー』、スコットの『植物の進化』、オスボルの『哺乳動物の進化』と『石器時代の人々』、かうした書物は私に自然科學を小説以上に面白く讀ます癖をつけてくれました。是非多くの青年にも讀んで貰ひたいと思つてゐます。

文學の讀み方は、メービーの『文學入門』、テインの『英文學史』、クロー・フランケの『ドイツ文學の社會的見解』によつて教へられました。

詩集を讀むのは私の道樂で、短歌はあまり讀みませんが、新體詩であればどんなものでも目を通します。どれが一等好きだと云はれると、ちよつと云ひかねますが、『萬葉集』などはいつも引つ繰り返して楽しみにして讀みます。詩だけは、博物館に這入つたつもりで、偏した讀み方をしません。小説に就いても同じことが云へませう。大體理想主義の小説が好きですが、道樂半分に讀むと云ふことがないものですから、小説を讀む時でも、いつも眞劍なものだけを選んでゐます。つまり心理學の教科書をよむやうなつもりで讀むものですから、あまり若い人には、自然主義以後の小説を奨めてゐません。

二

近頃讀んだものの中で、最も面白かつたのは、カイザリングの『成作中の世界』と、デイン・インゲの書いた『英國宗教に於けるプラトン主義の傳統』でした。前者は來るべき世界の新理想主義を暗示し、後者は、一旦理想主義が一國民に這入ると、なかなか抜けのないものだと言ふことを私に教へてくれました。

最近數ヶ月、私は助手と一緒にジョン・ラッセル・スミスの『世界食糧資源論』の翻譯に没頭しましたが、クロボトキンの『パンの略取』と『田園、工場及び仕事場』以上に私をインスパイヤしてくれました。クロボトキンは所論の範圍が狭くて世界的に材料を集めてゐませんが、ラッセル・スミスは世界的に材料を集めて面白い結論に到達してゐました。大勢の助手と、米國軍需省の力を借りたと見えて、なかなか集められないやうな材料を澤山持つてゐるのに、私は感心しました。大の樂天家であるところがクロボトキンによく似てゐます。ただ残念に思つたのは、東洋の方面が少し缺けてゐることです。しかし、ラッセル・スミスのとつたメソッドによつて、ぼつぼつ材料を蒐集すれば、良い結論が得られると私は思つてゐます。

日本の社會科學は理論ばかり喧しくて、事實にはとんと疎いには吃驚されるほどです。もう少し食糧問題などに就いても、根本的研究を、社會科學の連中が自然科學者と協力して研究すべきでないでせうか。

専門の書物となれば、あまり多過ぎるので、一々云ふことは出來ません。しかし教養の爲には専門外の書物も一通りは讀んで貰ひたいやうに思ひます。詰らぬ講談物を読む暇があれば、世界聖典全集や、古典的歴史物をよんで貰つた方が嬉しいやうな氣がします。日本には英語で書かれてゐるやうな世界的に有名な文化史のないことを悲しく思ひます。ブレットステッドの『エジプト宗教史』、ギルバート・モーレーの『ギリシヤ宗教の四大時期』、ヂャストローの『セミチック宗教』、ムータアの『近世繪畫史』、ランゲの『唯物論の歴史』、ファケアの『印度教の研究』のやうなものを、世界各國から集めて、日本語にすればよいと思ひます。日本の讀書界は非常に偏してゐて、視野の狭いことを私は悲しみます。あまり賣れなくとも、大日本文明協會がしたやうに會員組織でも作つて、かうした良書をどしどし日本語にしてくれるとよいがなアといつも考へてゐます。

摺鉢と遊ぶ

私は四國阿波の田舎で育ちました。昔は庄屋をしたこともある大きな屋敷に幼時を過しました。家業は藍を製造してゐたので、澤山な人がゐて、常に百人分くらゐの炊事をしなければなりません。だから摺鉢なども、とても大きなものを使つてゐました。その摺鉢のこはれたのが二つ三つありましたが、これが私の幼い時、唯一の遊び道具、いはばおもちゃといふものでした。

それを裏庭の隅に据ゑ、その上に板をのつけて、石を積み土を盛つて築庭を作り、鉢の中を池にして、その中に鮒や蝦を放してやりました。金魚が欲しかつたのですが、田舎のことだから手に這入らない。私が金魚を初めて見たのは、徳島の町へ行つた時で、實に珍しく、何とかして買ひたかつたが、小學校七年間、遂に村では一度も見られませんでした。ただ一度、誰かが持つて來てくれましたが、それは間もなく死んで、それからもう自分の手には這入らなかつた。

それからまた、藍を溶くために使ふ甕や、美しい植木鉢の不用になつたものを、底の孔を詰めて水を入れ、その中に、摺鉢と同じやうに鮒や蝦を入れておきましたが、長く生きてゐました。

水を折々換へてやる程度で、二年半も三年も生きてゐます。霜がおりても、氷が張つても死ななかつたのです。

私はこれで何年遊んだことでせう。六つくらゐから十一くらゐまで楽しみました。毎日、朝起きるとその傍に行きました。私はこの大きな家に六年間ひとりで育つたものですから、淋しかつたのです。従つてこれが何よりの遊びでありました。

ときには山へ行つて、木を取つて來て接木つぎぎをしてみたりしました。何分農村のことでしたから、おもちやらしいおもちゃはなかつた。お小遣ひは一ヶ月に二錢、おやつは自分の家で作つたへぎ餅（かき餅のこと）ときまつてゐました。その二錢でもつて買つたおもちやといふのは、大體バイ（貝獨樂のこと）とカミメン（メンコのこと）です。そして隣村へ勝負に行くのですが、私が強いものですから、皆が弱つてゐました。

尋常小學校を卒業する頃から幻燈遊びに移つた。私の家の店が神戸にあつた關係で、最初神戸から手に入れて、それから毎年一つくらゐ買ひました。映す繪もガラス板に描いて盛んに拵へました。幻燈の器械をこはして、そのレンズを取つて望遠鏡を作つたりしました。

また阿波の國は有名な人形の國、淨瑠璃の盛んな國であります。私も小學校の時に、納屋に大きな舞臺を作つて、その人形を使つて、人形芝居をやつたものです。自分でも粘土で人形を作りましたが、これは芝居には使へませんでした。しかし、その人形を作つた喜びは今も忘れるこ

とが出来ません。
冬になると、凧揚げをやりました。阿波名産の奴凧といふのがあつて、私は五つくらゐから奴凧を上手に作つてゐました。

田園文學に就いて

十八世紀の末、都會の煙突が建ち始めてから都市文學と田園文學の差が著しくなつた。特に英國では機械文明に反抗する詩人の一派が現れて、文藝のあらゆる方面に自然派なる一派が出現するに至つたが、この一派は十九世紀後半の自然主義とは違つて、大自然により多く接近しようとする努力してゐた。その詩人の間では、ウヰズワース、バアンズの如きが最も偉大なるものであり、畫壇に於いても、タナー一派の世紀印象派は悦んで自然のみを描寫し、この運動に最も大きな貢獻をした、評論家は『近世畫家の構圖』を現したラスキンであつた。彼等は機械文明に反抗してスコットランドのスルツ湖水を讚美した。その中でも、田園文學者として永久に記憶せられる人物は、誰を描いても先づジョン・バインズと言はなければならぬ。『佛蘭西革命史』の著者トマス・カーライルは、『英雄ラープイ論』の末端でジョン・バインズを英雄の中に數へてゐる。バインズは極く簡単なスコット訛で多くの美しい農民生活の悦びを歌つた。
時は丁度煙突機械に反抗した時代であつたから、バインズの詩はスコットランドに深い印象を

與へた。しかし悲しいことには、バーンズ以後英吉利の農村は滅びてしまつた。そしておそらくはキングスレーの農民小説を最後として、英吉利の田園文學は滅びたと言つても差支へないだらう。亞米利加の農村生活は英吉利のそれに比べて、より豊かであり、より愉快なものであるから亞米利加には田園文學が頗る多い。詩人ホイットマンはペンシルバニアの片田舎に隠れて村の生活の美を歌つた。

マークツインは、ミシシッピ河を背景に、ソヤナ開拓時代の農民生活を最も面白い言葉で書き現した。

今日マークツインの言葉はそのまま西部亞米利加の言葉になつてゐると言つて差支へはないと思ふ。「トームファイヤ・グラフィグイット」などは、筧棒に豊富な矛盾だらけの開墾生活を最も快濶な口調で滑稽小説として書いたものである。日本などではあまり農村生活が悲しいから、「トームファイヤ・グラフィグイット」などのやうに、農村生活を面白くをかくしく取扱ふことは出来ない。

一方に於いて、村の生活がどれほど美しいものであつても、地方に小作爭議や村の没落が頻々として起るものだから、中西伊之助氏が書いた「農夫嘉平の死」のやうに、實に、悲慘なものしか書けなくなる。英吉利の農民小説には、ゴルド・スミスが書いた「ウエカフィールドの牧師」のやうな、村の牧師を取り扱つた、如何にも親切な面白い小説が残つてゐるが、日本には村の小學

校の教師を書いた島崎藤村氏の『破戒』のやうな悲しい物語しか残つてゐない。佛蘭西には、ロスタンの『シャンタ・クール』のやうな、大自然そのものの大きな動きを活寫し、自然そのものを語らしめたものがあるが、日本にはまだ自然の精そのものをして語らしめるやうな、土の親しみを書いたものは少い。おそらく今後多くの田園文學が小説の形や詩の形で現れるだらうが、現在のやうにあまりに悲慘な農村生活では、歐米のそれと全然變つた、農村の階級闘争を基調にした多くの作品が現れるであらう。しかし、田園文學の面白さは、さうした悲しみの中にも、なほ忘れられない大自然の抱擁があることである。日本の俳句は最も田園文學に近い情緒を持つてゐる。俳人一茶の多くの俳句は、それを示してゐる。彼が信州野尻湖に近い柏原で歌つた多くの俳句は、村の悲慘な出來事や悦ばしい出來事に大自然の換へ難い慰藉を通して、涙ぐましい靈光となつてわれわれに訴へる。

こんな傾向をおびた日本の文學者の間から、必ず將來大きな田園文學者が現れて來るのではないかと思ふ。

夏目氏の『草枕』などは、確かに此の系統の作品である。田園文學は階級文學で堰するにはあまりに大自然の抱擁が濃厚である。俳句の客觀主義は、人間の憎惡を超越して深い大自然の懷にわれわれを導いてくれる。田園文學の精髓はさうしたところに落ちつくものではなからうかと思ふ。

忌憚なく言はしてくるならば、プロレタリア文學も、もう少し深く大自然を呼吸する必要がある。芭蕉や一茶の氣分を味はつた後でなければ、日本の田園文學をして永久的なものとする事は出来ぬものだと思つてゐる。

醜惡な人間の鬭争のみを見ることは、土の香を深く味ははうとする者に取つて、悲しい題材である。しかし、われわれは其の鬭争より逃れることが出来ないことをも知つてゐる。さらばと言つて、われわれは鬭争が土に勝ち得ないことをも知つてゐる。田園文學の勝利は土の勝利である。土は人間の憎惡を超越し、永久の眞理をわれわれに啓示する。地主も小作人もやがては土に歸つて行くのである。この不思議な大自然をわれわれに力強く教へてくれる人が將來の日本の田園文學者であらう。

近代人はあまりにチカチカした都市文明に疲れてゐる。そこに新鮮な田園文學が期待される。しかし、今日までの二十世紀文學は都會化した田園文學の歴史を持つてゐる。

われわれの要求するものは、都會人を土に轉向せしむるものでなければならぬ。

徳富蘆花は此の點に於いて稍々成功した作者であつた。彼の『みみずのたはこと』の如きは、世界でも珍しい大きなものをつかみ出してゐた。

『土』の作者長塚節氏の如き人がもう少し長く生きてゐてくれたら、日本の田園文學に永久性を與へてゐたかも知れないと思つてゐる。

村から蒸發する女

徳島縣辻町に三好高等女學校といふのがあるが、この女學校の教育の仕方にすつかり感心させられた。この學校の校舎は、前は農學校だつたのだが、それをそのまま使用してゐる。生徒は全部寄宿させることにし、附屬の學校園で毎日二時間の労働が課せられることになつてゐる。

學校園の労働といふのは、十四、五から十七、八の娘たちが、畑で眞黒になつて鍬を振り上げて働くのである。何れもきりッとした労働服で元氣に働いてゐる。實にすがすがしく、快い限りであつた。新しい時代の婦人たるべき學課の教養と共に、この楽しい労働を課せられた學園の乙女たちは、天真爛漫にすくすくと伸びて行く。かうした教育こそ眞の教育といへるのだ。

ところが、この有難い教育に對して、抗議を申し込む父兄がかなりにあるといふことである。土いぢりさせると手が荒れる、それよりもピアノでも教へて下さいなどといふのださうだ。「笑つてゐられぬ認識不足です。」と今は亡き高津（半造）校長が語られてゐたが……。

一箇月の中二十日は旅に出る私が、この頃特に感じることは、日本の女性が如何に勤勉であるかといふ頼もしい事実と、その反對にこの勤勞の美風を忘れさせようとする女子教育が、あまりにも多く行はれてゐるといふ悲しむべき現象である。

何とかして骨を折らぬやうなところへお嫁に行きたい。その爲に女學校へ行く。親も亦それに賛成する。その女學校では勤勞精神を忘れさせようとしてゐる學校が多い。だからこそ、堅實な村の青年との縁組は御免とばかり、都會へ都會へと女は蒸發して、村はさびれにさびれて行くのだ。

勤勞精神の通つてゐない教育こそは正に亡國的教育である。

北氷洋の聖雄グレンフェル

北海の冒険者

たしか今より四十三年前のことであつた。大西洋を小舟で横断しようとして準備してゐる年若い一人の醫者があつた。しかし、大きな汽船で横断するならいざ知らず、二十噸にも足らぬやうな小さい船で、冒険的航海をしようといふのだから、船長になつてくれる人もなければ、運轉士になつてくれる人もなかつた。

彼は一年待つた。そして遂に、六月の第二週に、準備が全く整つた。船は出た。しかし、アイランドの南で暴風に遭ひ、アイランドの最南端にあるクルクリーベンコに避難した。其處で彼等は、天候の回復するのを待ち侘びたが、十二日間、霧の中に閉ざされてゐた。しかし勇敢な彼等は、ただコンパスを頼りに港を出て、西北へ西北へと急いだ。

十七日目に霧は霽れた。そして氣が附いてみると、眼前には、緑に縁取られた陸地が横はつて

ゐた。それは北米カナダの北に當るセント・ジョン港に近い處であつた。どうしたことか、港には火焰が上り、街は同港第三回目の出火で燃えさかつてゐた。その青年醫師の一行が港に這入らうとした時には、火は一層激しくなつてゐた。

一體、彼は何をするために、この夏なほ寒きラブラドルの地に來たのであるか？ 彼は一體何者であるか？

漁夫への奉仕

彼の名はダブリュー・トムソン・グレンフェルといつた。彼は、一八六五年二月二十八日、英國ベীগゲートに生れ、豪族の血を承け繼いでゐた。彼は小さい時から非常に學問が好きで、マルボロ商業學校では優待生であつた。彼は十八歳の時呼吸器を患ひ、一時フランスの南部地方に保養してゐたこともあつた。

彼が十八の時、彼の父は學校の教師を退いて、ロンドン病院の牧師になつた。その時彼は、將來の方針をたてる必要があつたので、或る醫者に相談したところが、醫者になるか、彼の兄貴の行つてゐるオックスフォード大學に這入れと勧められた。それで彼は、醫者になることを決心して、ロンドン大學に學ぶことになつた。

彼が丁度二十歳の時であつた。有名な米國の説教者ムーデーとサンキーがロンドンに來て、天

幕傳道をした。グレンフェルが宗教的確信を握るやうになつたのは、このムーデーの弟子であるステッドの感化によつたものであつた。それは彼が醫科大學の二年生の頃であつた。

神を發見した彼は、すぐ日曜學校の教師となり、貧民街の宿泊所に行つて貧しい人々に接近するやうになつた。そして夏が來れば、海に出て、海洋の自然美を漁りつつ、他日の備へをした。

その年彼は、醫學士の學位をとり、英國皇帝から卿の爵位を與へられた醫學博士アンドリュ・クラーク氏の指導を受けることになつた。

その冬、丁度クリスマスの時であつた。彼の父の兄弟で大砲及び望遠鏡の發明を以て有名なアイムストロング工場長をしてゐた叔父が病氣になつたので、暫くの間叔父の看護に費し、かたはら貧民窟の仕事に専念した。

彼の二十一歳の時、彼は愈々開業醫たるの資格が出來たので、ロンドン大學病院の患者を診ることになつた。そして二十二歳の時、北海に働く漁夫たちに奉仕しようと、一箇月の間、ノース・シー（北海）方面を周遊して來た。それから彼は斷然決心して、漁民たちの病院事業に一生を獻げることにしたのであつた。そして彼は先づヤーマス町の漁民たちに學校を設け、藥局船を毎春スコットランド、アイルランド、フランスの數千の漁民の間に派遣する運動を始めた。彼が二十六歳の時、サウスポール公爵がカナダ及びニューファンドランドの方面から歸つて來て、グレンフェルの決心を促した。で、彼はここに斷然、カナダの北部ラブラドルの淋しい漁民たちに仕へ

ることにしたのであつた。

彼が二十噸そこそこの小さい船で大西洋を横切つたのは、全くそのためであつた。

二十呎の船

北緯六十三度といへば、七月でもまだ、海の氷盤の溶けない處があつた。そこへ鯨、鱈、海豹などを捕獲するために大勢の漁夫が群がつてゐた。しかし、その漁夫のために働く醫師としては一人もなかつた。海岸の絶壁には一面に海鳥が巢を營んでゐた。鯨の一隊は、朝日を受けて静かに潮を吹いてゐた。病院船がドナノランに著くと、患者を筏に乗せて運んで来るものさへあつた。かうして彼等は遂にセントローレンス河口の北端に位するバツル港と、大西洋に面するハミルトン灣の入口にあるインディアン港の二つの島を病院小屋に選んだ。

グレンフェルはそれを根據として貧しい漁夫のバラックを次から次に訪問した。彼は、どんな寒い冬の晩でも、犬籠に乗つて數十哩の雪の上を無料診療に出掛けた。そして歸りが遅くなると、貧しい病人の家で、鶏を飼つてゐる箱の上に寝ることも屢々あつた。

そして早くも二年は経つた。そこで彼は、一生をこのラブラドルの貧しい漁夫のために送ることを決心して募金運動を始めた。やつと、カナダのモントリオールの人でトーマス・ロドデックといふ人が、長さ二十呎のしつかりしたボートを寄附してくれた。これに乗つてグレンフェルは

エスキモーの間にも診療事業を開始しようとした。彼は生れつきの冒険家であつたので、狂風怒濤の吠え猛る北氷洋を、この小さい三間そこそこしかない帆船で、何百哩の旅行をすることを平気で斷行した。

北方の夏は短かつた。彼がスケヤアイランド・ハーバーに來た時は、もう雪が地上に降り出した。しかもそこにゐた十二家族の漁民は不漁続きで、少しの食糧さへ持つてゐなかつた。で、或る夜、村の長老アンクル・ジムの家で村民大會が開かれ、それが宗教的祈禱會と變つた。

ところが、どうだ、奇蹟的にも、暴風のために北に吹きつけられた商船が運好く入港してきた。そして彼等は、意外の食糧をその商船から貰ふことが出來た。この小さい二十呎の船は、また航海を續けた。また或る時は十一日間も氷の間に挟まれたことがあつた。けれども、グレンフェルは小さい海岸の村から村を廻つて、巡回治療をした。そして或る時などは、お産が悪くて死んでしまつた病人を自ら葬り、ただ病者に一通りの治療を行ふだけでなく、喜んで奉仕をした。

この船は後に小さい灣に繋いでおいたところが、氷盤の間に挟まれて、夜のうちに三百哩も南に流れてゆき、やつと人をやつて、それを持つて歸るやうな困難を見たこともあつた。

氷盤上の聖者

丁度グレンフェルが歳三十の時であつた。彼は、海豹狩に出漁する漁夫が、日本の北洋漁業に

出る漁夫の如くほとんど、病氣になつても數十日間醫者にみて貰ふ機會もないやうな状態にあることを知つて、みづから進んでその一行の囑託醫となつた。

ある朝、彼は船中の患者を診た後、午後になつて海豹狩を見るために、單獨で氷盤の上を歩いて、のこのこ沖へ出掛けた。ところが、船を出發して間もなく、氷盤を次第に一箇所に吹き寄せてゐた狂風がびたりとやんでしまつた。そこで氷は元々通り間隙をつくつて、疎らになつてしまつた。そのためにグレンフェルと一緒にゐた十二人の漁民の一團は大きな氷盤の上に乗つたまま沖へ沖へと流され出した。船は遠い。日は暮れてしまつた。止むを得ず、助け船が来るまで彼等は暗闇のなかで、幼稚園の子供がするやうな遊戯を始めた。蛙飛び、繩飛びなどして、體温が冷えないやうに努力した。そして飢ゑをしのぐために砂糖やオートミルに雪を混ぜて食つた。また海豹の脂肪を取り出して、何回も火を點じて合圖をした。それが效を奏して、眞夜中頃グレンフェルの一團十三人は船に救ひ上げられた。

こんな事が後にも起つた。

四十三歳の春(一九〇八年)、四月二十一日、グレンフェルが朝の仕事を終へて病院に歸らうとすると、犬を澤山繋いだ橇が、醫者を呼びに六十哩の南方からやつて來た。それは二週間前、彼に大腿骨の病氣で手術を受けた青年が、局部の化膿のために發熱して困つてゐるといふことを知らせてきたのであつた。で、彼は、八匹の犬にひかせた橇に乗つて出かけた。それは復活祭の

晩であつた。その夜、風は海の方から吹いて、雨と霧を陸地に送つたので、雪が溶け出して旅行は非常に困難であつた。それで、彼はその日二十哩しか走ることが出来なかつた。

その晩泊つた村には、沖から高潮がやつて來た。次の日、彼が出發すると雨が降り出した。その雨は氷を溶かして、旅行することは非常に危険に感ぜられた。岸から三哩の處に小さな島が一つあつた。この島があるために氷の橋が出來てゐた。グレンフェルは、この氷の橋を犬に橇をひかせて、やつとのことで島に著いた。その島から灣の向ひ岸まで約四哩あつた。それを眞直ぐに氷の上を行けば、岸を迂廻するより遙かに近いと思つたので、彼はあんまり危険とも思はないで、犬橇を急がせた。一哩の四分の一くらい行くまでは萬事都合よくいつた。ところがその時、東風が突然やんでしまつた。そしてグレンフェルは犬橇に乗つたまま、氷盤と共に沖へ沖へ流されてゐることが判つた。氷盤は碎けて、直徑十尺くらゐの塊になり始めた。そして、彼の乗つてゐる氷盤が最も小さいものである事がわかつた。で、彼は十間くらゐ向うに流れてゐる大きな氷盤に泳ぎつかうと思つた。彼は疲勞してゐて、眠氣と戦ふのに困つてしまつた。

グレンフェルは、既に上衣も帽子も手袋も何處にやつたか見失つてゐた。幸ひ、スパニエルといふ犬が、小さい氷盤にとりついて向うに泳ぎ著いたので、他の犬もそれに見倣つた。さうする前に彼は二匹の犬に綱を括り付けておいたので、その綱を手繰つて氷盤を引き寄せようとしたが、氷盤はなかなか此方に寄つて來ない。で、彼は、自分の乗つてゐた氷盤の上で走り廻つて勢ひを

つけた。その勢ひで水中に飛び込み、犬の助けをかりて新しい大きい氷盤に上ることが出来た。グレンフェルは凍死を防ぐために、前もつて二匹の犬に縛りつけておいた長靴を切つてジャケットを作り、吹き募る風に對して身を守つた。その日の晝頃、彼は更に島の傍から沖へ沖へと流された。たうとう夜が来てしまつた。そして沖へ約十哩も流された。で、彼は決心して、凍死を免れるために三匹の犬を殺して、その皮を身體に纏うた。足が凍つた。それで犬に括り付けてゐた麻繩を足に捲き付けて暖をとつた。そして彼は一番大きな犬を抱いて、犬の毛皮を被つて睡眠についた。しかし、抱いてゐる手は凍えて切れさうになつた。奇蹟的に風はやんで月が上つた。まだ眠くて仕方がない。彼はまた犬を抱いてうとうとした。こんど眼が醒めた時は、太陽が上つてゐた。彼は殺した犬の骨を麻繩でつないで、その先にシャツを結び付けて旗を作つた。

しかし彼は信仰の人であつた。そんな氷盤の上で二十餘時間も流されてゐた時でも、徹頭徹尾恐怖心を抱かなかつたと書いてゐる。彼は、大聲で讚美歌をうたひ、救助船の來るのを待つた。救助船はたうとう來た。それは、前夜海豹を料理するために半島の上に乗つた漁夫の一人が彼の姿を見附けたが、危険で近附けなかつたため、曉になつて五人の義勇船員が氷盤を物ともせず、彼を救ふために出掛けてきたのであつた。彼は救はれたが、凍傷にかかつた彼の足と手が甚だしく痛んだので、彼は一週間近く病床に横はつた。

貧民の友

かうした苦勞を二十年近く繰り返した後、彼は四十四歳の時、北米シカゴ市で初めて結婚した。彼はかうした困難な事業に献身してくれる婦人がないと思つてゐたのであつた。幸ひシカゴの銀行家でスターリングといふ人の娘が、喜んで彼の一生の友として北米洋に行つてやらうと決心してくれたので、話はすぐ纏まつた。彼は、今三人の子供の父である。

彼はラブラドルの漁民のために働いてゐるうちに、疾病と經濟の關係を考へた。そして豫防醫學の立場から、單に藥をやるだけでは貧しい漁夫の病氣を直すことが出来ないといふことを發見した。彼は先づ生産事業を起すために製材所を創立した。また馴鹿の牧場を起した。

製材所は成功したけれども、千三百頭に殖えた馴鹿の牧場は土民の反對によつて中止せざるを得なくなつた。彼は人の氣のつかない時から養狐事業を起した。しかしこれも途中で放棄することを餘儀なくせられた。

彼は、さうした生産事業のほかに、協同組合の運動を起した。それは漁民を搾取する商人の手を経ずして日用品を買ひ入れる消費組合であつた。猛烈な反對が起つた。それにも拘らず、彼は十箇所以上組合店を創立した。最初は一年間に一割の配當をし、三百弗の積立をした組合が、やつてゐるうちにだんだん損をして二萬五千ドルも借金を作つてしまつた。しかしグレンフェルは

喜んでその責任を負ひ、彼個人の所有であつた帆船等を賣り拂ひなどして、全部その協同組合の負債を整理した。

かうして彼は、一介の醫療宣教師の立場から新大陸の開拓者として精進した。そしていつとは知らず、世間の人も彼の偉大な事業を認識するに到つた。

一九〇八年の春、彼はオックスフォード大學から醫學博士の名譽學位を授與され、數年前には英國皇帝から貴族の位を授けられるに到つた。しかし彼の事業は飽くまでも貧しい漁民たちの間にあつた。彼は宗派を超え、小さい人間の嫉妬心を超えて、如何なる人をも愛した。彼は孤兒を引き取り、子供ホームを作り、學校に恵まれないエスキモーやラブラドルの土人のために教育事業を起した。

彼は今猶健在にして、ラブラドルで働いてゐる。彼は口の人ではない。彼は愛の人である。彼は理論の人ではない。實行の人である。リヴィングストンが無口な愛の實行者として中央アフリカの奴隸解放に努力した如く、グレンフェルは惱める北洋の漁民を醫したのみならず、彼等の全生命を救ふために努力した。

彼は自敘傳にこんなことを書いてゐる。

「——私たちが病氣の豫防のための慈善よりも治療上の慈善を選ぶ時、「愛」は危険なほど感傷に近附いてゐるのである。——そして私は傳道資金の運用から見ても、豫防よりも治療に重き

を置くことは誤れる經濟であると思ふ。産業的傳道、教育的傳道、及び孤兒院の事業は、少くとも病院と提携して行はれてこそ、愛の福音のほんたうの解釋にかなふものである。」

かうした大きな幻を持つ北氷洋の貧しい漁民の慈父グレンフェルが、今日歐米に於ける最も偉大なる愛の人として尊敬を受けてゐることは、あまりにも當然なことである。

まことに彼の超人間的奉仕の生活は、われわれにとつて一大模範であるといふことが出来る。

深夜の祈禱

深夜、床を抜け出て神に祈る。周囲は暗く、伺ひ知りたまふものは、神のみである。萬物は眠つてゐる。鼠さへ物音をたてない。鶏はまだ目醒めず、臬さへ聲を立てることを遠慮してゐる。私はわざと燈火をつけないで、眞暗闇に跪く。

そこは、天地創造前の暗黒の世界である。そこは無機物の形のみが示されてゐる世界であり、私のみが醒めてゐる世界である。ああ、さうだ、私のみが醒めてゐるのだ。誰にも相談出来ない重荷、神のみがとつて下さると信ずる重荷を、私は、眞夜中に起きて、神に持つて行く。

人の前に強く主張する者も、神の前には小さくなつて、彼の聖なる事業の進展するために祈る。みんなは眠つてゐる。そしてみんなは祈ることを知らない。そして、私はひとり暗黒に目醒めて、聽かれる道を知つてゐる。妻も、子も、友人も、誰も知らない神の聖業に對する私の重荷を、私は眞夜中に神に持つてゆく。神は、私を慰め、私を力づけ、必ずそれを聽くべきことを答へ給ふ。私は曙を待つ。

深夜に神に會ふことは、戀人に會ふより嬉しい。暗黒の世界は、光明に變り、酒を飲まざるに聖愛に酔ひ、歡喜は胸に溢れ、至樂の宴は、そこに開かれる。私は、愚かなる者の如く、「いつまでも、かくして居らしめ給へ」と祈りたいやうな氣がする。しかし、考へてみれば、明日の活動が私を待つてゐる。私は昨夜からあまり眠つてゐない。また、私は、誰にも感附かれないやうに、寢床に退却して、明日の運動のために、筋肉を休める。

英雄と唯物史觀

傳記學の出發

米のプラグマチズム哲學の創始者、ウイリアム・ジェームスは、彼の名著『宗教經驗の諸相』の中で、性格心理學の基本として、傳記學といふものを主張してゐる。

この見方は、すぐれた卓見であつて、人間個性を研究する場合、傳記にまさるものはない。今日取扱つてゐる心理學の對象は、あまりにも局部的に分解され過ぎたものであつて、個性としての單位を形造つてはゐない。記憶とか、注意とか、聯想とか、推理とかいふものは、細胞に譬へるなら、細胞壁とか、核とか、核仁とかに當るものであつて、細胞そのものではない。細胞そのものを研究するには、生きてゐるままを研究せねばならない。傳記の研究の必要は、全くかうした點にある。

精神分析學が、解剖學的に發生するとすれば、傳記學は綜合的に、その出發點を持たなければならぬ。

生理學に於いて、細胞がその基本である如く、社會學に於いても、個性がその基本でなければならぬ。しかるに、悲しいかな、今日までの社會研究は、あまりにも個性を無視したものであつた。殊に、最近日本に於ける唯物史觀の流行は、個性といふものの基本單位を全く無視した、社會の機械觀的見解を導き入れた。唯物史觀は、社會機構の決定的方面のみを多く見て、その可能性をあまりにも無視する傾向があつた。

私は、社會の個性に對する決定的勢力を無視するものではない。身體に於いて、筋肉系統が、骨格系統に較べて驚くべき變化を以て細胞に臨んでゐる如く、社會が個性に臨む場合にも、同じやうな制限を置いてゐる事は、否定する必要を認めない。しかし、人間の赤血球などを見ると、それは一つの細胞でありながら、必ずしも初めから決定的な歩み方をしない。それは、神經細胞にもなれば、筋肉細胞にもなる。骨格系統にも同化すれば、消化器系統にも吸収されて行く。即ち、社會生活に於いて、決定的方面と、可能的方面のある事を認めなければならぬ。

最近の物理學が、空間的決定物理學より、時間的可能物理學に移行せんとしてゐる如く、われわれもまた、社會基本をなす個性の研究によつて、社會の決定性ばかりを見ないで、個性の可能性を通して社會の非決定的要素を研究する必要があるにある。

ウイリアム・ジェームスは、傳記學を通して個性の研究をなし、個性の裡に、自己中心の生活

より絶對生活への變移を發見した。彼は、この個性に於ける非決定的要素を轉心と呼び、その轉心を通して個性の生活に著しい變化が起るのみならず、その個性を通して、社會と歴史に一大變化の起ることをわれわれに注意してゐる。

かく考へると、歴史といふものも、一つの帶のやうなものであつて、個性によつて織り成された織物であると考へることが出来る。従つて、その歴史を織りなす個性の變移によつて、歴史そのものが、驚くべき變化を示すことを、否定することは出来ない。トーマス・カーライルの如きは、歴史と個性の關係を、最も深く考へた者の一人である。そして、彼の『英雄崇拜論』は、その個性研究の、露骨な發表の一つである。この點は、ジョン・ラスキンの如きも、同じ傾向を辿つた人と考へてよいだらう。ラスキンの名著『ヴェニス石』の如きは、最も非人格的に取り易い建築史をすら、その時代の道德的背景なくして考へることは出来ないことを證明した。

かくの如く、歴史を個性に關聯して見なほすことも、あまりに唯物史觀に囚はれ過ぎてゐるわれわれにとつて必要である。私をして云はしむれば、經濟そのものが、決して物的なもののみではない。經濟は物の背後に動く生命、勞力、變化、成長、選擇、秩序、目的の七要素が、個人的に、また社會的に活動することによつて營まれるものであつて、此の七要素は、個性の心理的可能性を浸透して、初めて社會的經濟活動となるものである。

かく考へると、傳記學を通してなされる個性の研究は、文明史の基本となるべきものである。

感情病理學としての近代小説

小説は、社會感情の研究または個人感情の研究に缺くべからざる材料を提供する。しかし近代小説は、あまりにも解剖的過ぎて、全人的綜合を缺く傾向を持つてゐる。自然主義文學は、性慾心理の解剖となり、ロマンティック文學は、變化性の心情をより多く取り扱ひ、表徴派は、幻想の心理的解剖となり、官能派の藝術は、あまりにも局部的な誇張に終る傾向が多い。また、左翼の社會小説は、階級分裂の社會病理に、局限される傾向がある。それで、人間個性の研究のためには、擴大鏡をもつて感情を分析した小説の研究も、大いに必要とするけれども、個性の全的綜合は、眞實なる傳統の研究に俟つほか道はない。そこにどうしても傳記學といふものが創始されなければならぬ。

面白いことには、日本の大衆文藝の如きは、その大部分が、傳記的要素を持つてゐる。日本の大衆は、局部的な感情分析より、より人間的な俠客物を選ぶ傾向を持つてゐる。そして、この傳記的個性小説は、病理學的分析性を持つてゐる近代小説より、はるかに大きな感化力を持つてゐる。

個性の可能性の認識

個性を総合的に組み立てると、近代小説がわれわれに與へてくれない知識と、感情と、意思の驚くべき融和點が、發見される。例へば、エジソン傳に於いて發見するロマンティックな物語がそれである。それは近代小説の約束にとらはれた物から見れば、あまりにロマンティック過ぎる。しかし、それは事實である。エジソン一人の出現によつて、社會生活は、驚くべき變化を見た。勿論、或る人は、唯物史觀的社會が、エジソンを生んだといふかも知れない。しかし、いくら社會が壓迫を加へても、エジソンの頭腦を變化して、電燈の發明を強ひるわけにはいかない。電燈の發明は、確かにエジソン自身の個性の發現によつたのに違ひはない。そしてその發明によつて、社會性が呼び醒まされたことは、疑ふべくもない事實である。

勿論社會は、エジソン自らが造つたものではない。しかし、社會のうちに存在するエジソンといふ人を通して、社會全體の可能性が擴大したことは、事實である。

人體に、骨格系統と、循環系統と、神経系統との差がある如く、社會性にもさうした大きな差がある。そしてその差は、個性の持つ意識的可能性の綜合によつて決定せられる。即ち、決定は決定であるけれども、可能性の綜合による決定である。或る社會が、骨格細胞のやうな眠つてゐるものによつて作られてゐるなら、その社會は確かに唯物史觀的決定をもつて動いてゐるものであると考へてよい。しかし早や循環系統になれば、血球それ自身の變化性によつて、唯物史觀的決定を適用することは出来ない。更に、神経系統の如きになれば、それを組織する細胞の一つ一

つが、驚くべき組織を持つてゐるために、精力の不減退説までが考へ出されたのである。おそろしく、神経細胞の一つ一つが、小さい電池作用を持つてゐるために、力學の法則を無視して、距離の自乗に反比例して勢力が衰へて行くといふ原則は、神経系統には應用することが出来ない。神経系統に於いて、十の刺戟を傳へたものが、或る距離に達しても、同じやうに十の刺戟で傳播するといふことは、全く驚くべき事實である。

かくの如く、社會性といふものは、それを組織する個人の可能性によつて、骨ともなり、また神経ともなるものである。これが解つてくれば、われわれは更に、個性研究の基準としての傳記學の完成に努めなければならぬ。

個性としての英雄

一般民衆の個性は、筋肉系統や骨格系統を組織する細胞のやうに、眠り込んでしまふ傾向を持つてゐる。そこが即ちマルクスなどのいふ唯物史觀の強みである。マルクスは、この本能化した個性のみを對象として歴史を考へてゐる。それで、個性の研究には、かうした眠つた細胞を取り扱ふことは出来ない。やはり、十分目醒めてゐる赤血球のやうなもの、或は更に神経細胞のやうなものを、對象として取扱はなければならぬ。

十分目醒めた個性として與へられた、可能性の局限を持つものは、普通世間にいふ英雄といは

れるものである。英雄の個性をよく研究すれば、社會を組織する一般大衆の個性が、よくわかつて来る。發生學者が、鶏の卵を基本として研究する如く、英雄の個性を研究すれば、人間の個性的可能性の極大性を見ることが出来る。宗教が何時も教祖の人格を神佛の示現として鑽仰するのは、全くかうしたところに理由が伏在してゐるのである。

神話の眞實性と英雄の眞實性

個人の可能を綜合して出来上つた社會性は、古き時代に於いて、神話といふものを作つた。この神話は、或る意味に於いて、歴史そのものよりも眞實である。文字を用ひない時代の民族は、可能性を信じた經驗の傳説を神話として後代に相續して來た。ギリシヤ民族は、ギリシヤ神話的可能性を後代への遺産とし、ヘブライ民族は、『舊約聖書』の神話にあるやうな可能性を後代に傳へた。これは、『古事記』が日本民族の可能性を記載し、ニーベルンゲンリードが、ドイツ民族の可能性を神話として約束してゐるのに等しい。こんな風に神話の精神分析を行ふと、神話の眞實性がよく了解出来よう。多くの神話に於いて、主人公を個人として取扱つてゐても、それは民族を個人化しただけの事であつて、民族の可能性なくして、一つの神話も現れるものではない。そして、個人以上に大きな可能性を、民族的に見た場合に、その可能性に神々の名を與へた理由もよくわかる。それで、神話は、民族經驗の表徴的記録として、文明の曙に先驅するものである。

しかし、民族が段々個性を分化し、祭司と王族とが分離し武士と農民とが、分業的地位を保つやうになると、時代は段々神話から遠ざかる。そしてそこに、英雄の時代が出現する。先にも述べた通り、英雄は神話に近い存在である。それは、民族の可能性をはなれて、決して存在するものではない。しかし、それは民族だけの可能性を意味しないで、醒めた個性として、民族を引つぱる可能性を暗示してゐる。

私は、英雄が社會から離れて存立しない事を主張する。宗教的英雄にしても、軍國的英雄にしても、彼の屬する社會が生んだ事に於いては、間違ひはない。例へば、イエス・キリストにしても、ユダヤ民族の歴史的背景なくしては、決して生れ出る人物ではない。釋迦にしても、マホメットにしても、同じ事が云へる。況んやギリシヤの教養なくして、アレキサンダー大王が生れ出たとは考へられない。アレキサンダー大王の謹嚴、克己、訓練、努力は、ギリシヤ民族の哲學的教養の賜であるといふことが出来よう。ジュリアス・シーザーの場合に於いても、同じ事が云へる。ローマ共和國の教養なくして、果してジュリアス・シーザーがあつた英雄になれたかは、問題である。民族及び社會が動いてゐる時代に、動く個性が生れるのである。鎖國時代の日本に英雄なく、エスキモーに、英雄の出現しないのは、全くこの理由によるのである。生理的にオリピックのやうな大きな動きがあり、心理的にアテネの藝術があり、道徳的にストイックの克己主義があり、哲學的にソクラテスやプラトーンやアリストテレスの教養があつたればこそ、ア

レキササンダー大王は生れ出たのだ。ジュリアス・シーザーの動きも、民族的動きの繼承であると云ひ得る。イエス・キリストは預言者の動きを繼承し、釋迦は、印度の六大哲學の中に生れ、孔子は、周の文化を背景として生れ出た。

しかし、英雄が社會の動きのみを反映するなら、決して英雄ではない。彼は、更にその上に、幅廣き歩みを社會に與へる。英雄は、身體に譬喩をとれば、目のやうなものである。他の部分は眠つてゐても、英雄だけは醒めてゐる。われわれが英雄から學ぶのは、その醒めてゐる部分である。

プラトン等が、賢人政治を考へて、大衆政治に信用を措かなかつたのは、彼自身が大衆の眠つてゐる状態に愛想をつかしたからであらう。しかし、私は英雄を考へる場合、必ずしもプラトンの式のみ考へる必要はないと思ふ。民衆につかへる氣持で、目が身體の光である如く、英雄が民族の光であり得て少しも差支へない。若し、プラトンの見方をギリシヤ的だとすれば、私のやうな考へは、キリスト的だと云ふことが出來よう。プルタークの『英雄傳』の如きは、プラトンの立場から書かれてゐる傳記學としては、實に優れたものである。そして、フォックスの書いた『殉教者傳』は、キリスト教に見た英雄傳である。それはとにかくとして、純人間的な立場から個性の可能性を完全に解剖した傳記としては、プルターク『英雄傳』に勝るものはない。プルタークの文章は實に簡潔であり、一刀彫りの感じがする。彼は、個性を解剖する場合に、少しも

遠慮をしてゐない。アレキササンダーの傳記を書く場合にしても、シーザーの傳記を書く時でも、感嘆詞を全く省略してゐる。そして、まるで二十世紀の新聞記者がするやうに、遺傳と、環境と、個性の天資と、その弱點を列べて書く事を決して忘れてはゐない。ジュリアス・シーザーを書く場合でも、彼の經濟的方面、また政治的方面をシーザーの性生活と並べて書く事を忘れてはゐない。しかし彼は病理學者のやうに、シーザーの癲癇を詳らかに記載はしてゐない。ただ數行書いてゐるだけである。然し、その簡潔な文章のうちに、全人的立體寫眞が浮び出してゐる。しかもその立體寫眞は、唯物史觀的な方面だけに止まらず、精神的な煩悶を記述してゐるところにプルタークの用意が窺はれる。プルタークの『英雄傳』は、決して個性を英雄として取扱はないで、個性の極大性を持つものとして、精神分析を行つてゐる。それに『英雄傳』とつけたのは、日本人であつて、プルタークではない。ただ『傳記』とだけなつてゐる。さればこそ、プルタークは、シーザーを書くと共に、その時のポンペイを書き、またシーザーを暗殺したブルタスまで記述することを忘れてゐない。そこにプルタークから學ぶべき、多くの教訓がある。即ち、多くの個性を正面だけから見ないで、その背後より、また側面より研究する爲には、英雄の敵手をも詳らかに研究する必要がある。プルタークが、個性の可能性を研究するに當つて、凡人の傳記をも綿密に書いてゐる事なども、吾々の參考になる。傳記學としては、プルタークの記述方法が、最も科學的だと云へる。カーライルは、『英雄崇拜論』を書くときに感嘆詞を連發したけれども、ブル

タークはむしろ科學的に、英雄の敵をも墓の中から引きずり出して、彼の云はうとするところを云はしめた。そこに、プルタークの正直さがある。

多くの歴史は嘘をつく。そして、支那の歴史の如きは、大抵の場合、主権者の力によつて編輯せられたために、主権者の敵に對しては、正當なる批判を誤つてゐる。これは支那に限らない。多くの歴史が、その時代の支配階級の思想によつて、歪められてゐる。徳川時代に於いては、楠木正成や正行の記録が、總て歪められてゐた如く、共產主義の統治下に於いても、反對者の記述については歪められる。然るに、プルタークが、正直にもジュリアス・シーザーを書いて、すぐその筆で彼の敵のポンペイを書き、ブルタスを書いてゐるところに、歴史家としての偉大さがある。吾々は、此の態度から大いに教へられる。

プルタークの『英雄傳』

プルタークの『英雄傳』を読んで私は、英雄たらんとする者が、日本流に考へる粗野な豪傑ではなく、精神的にも非常な修養を積まなければならぬと考へた。プルタークの書いたアレキサンダー傳を読むまで、私は、アレキサンダーが克己的な、つつましかかな人物であることを知らなかつた。そして私は、なるほど、英雄にならうと思へば、こんな點にまで注意しなければならぬのかと、感心してしまつた。アレキサンダー大王が死んだのは、全く神經衰弱からであつた。

世界を征服した大王は、ちよつとした酒の上の興奮で——平素飲まない酒を飲ませられて——彼の命を嘗て助けたことのある従兄のクリシスに、罵られた。それが癢にさはつたアレキサンダーは、クリシスを追つかけて、酒の劍幕でクリシスを殺してしまつた。その晩から酔ひが醒めると共に煩悶して、遂に死んでしまつた。

私は、かういふ所を読むと、それはアレキサンダー大王の事ではなく、自分の出來事であるやうな氣がしてならない。

シーザーに就いても、同じやうな事が云へる。プルタークは、それとなく、シーザーが殺されたのはポンペイの亡靈が蔭に動いてゐるかの如くに書いてゐる。若し、シーザーが、彼の先妻の貞操をけがさうとした戀敵に對する親切さをポンペイに向けることが出來たなら、あれほどの混亂はローマ國に起らなかつたかも知れない。シーザーは、部下に對しても、他人に對しても、すこぶる寛容であつた。然し、自分の政敵に對して寛容であり得なかつたところに、最後を全うし得なかつた憾みがある。アレキサンダー傳を読んでゐてはさう思はないが、シーザー傳を読んでゐると、キリスト前の個性につき纏うてゐる、醜い臭みの抜け切らない事を思はせられる。英雄は英雄だけれども、これでは、永久の國家が創れないのは當り前だといふ感じがする。

キリストの思想が、ローマ帝國に沁み込んだのちは、個性の生活が、ギリシヤ・ローマ的生活方式と全く變つてしまつた。それまであまり内觀的でなかつた個性が、一しほ内觀的となり、違

つた意味に於いての英雄が、歐洲に現れるやうになつた。アッシジのフランシスの如きは、そのうちの最も特徴ある、内面生活の英雄であるといふことが出来よう。ルーテルやカルヴウンの事は、勿論云ふまでもない事である。しかし、キリスト教的内面主義が加はらない、ギリシヤ、ローマの個性を研究する場合、プルタークほど明確な印象をわれわれに與へてくれるものが、外にあるだらうか。その點に於いて、プルタークは傳記學に於ける一つの頂上をなしてゐると云ふことが出来る。

人生案内記

われわれが内面的に轉心しない前の個性の可能性は、おそらく、プルタークのものした英雄範疇を全く出ないものであらう。即ち、我執と、自己防衛と、名譽心と、多少の讓歩と、他律的節制と、肉體的訓練は、ギリシヤ、ローマの英雄を作つた。そこには、何處となしに小乘的個性の喘ぎがうかがはれる。しかし、この個性の喘ぎこそ、おそらく最も人間的なものであらう。

こんなにかへてくると、プルタークの『英雄傳』を読む事は、一種の自己批判のために讀むやうなものである。個性としての可能性に、大小の差こそあれ、プルタークの描いてゐる英雄の、生理的、心理的、また道徳的の活動は、總て自分の裡に眠つてゐるやうに思はれる。英雄の成功は、我々の成功であり、英雄の失敗は我々の失敗であるやうに考へられる。即ち、英雄傳は、自

己の傳記の擴大したものと考へることが出来る。この意味に於いて、英雄傳は、完全な人生案内記として絶好の物である。私が、百の倫理學の書物より、一冊の『新約聖書』が價値あると思ふのは、それがキリストの傳記を記載してゐるからだと思ふ。同様に、プルタークの『英雄傳』の如きは、宗教を無視する者にとつても、完全な人生教程であることを否むことが出来ぬ。日本の文部省の編纂してゐるやうな斷片的な修身書では、決して優れた個性を造り出すことは出来ない。纏つた人間を造らうとすれば、どうしても纏つた傳記を青少年に讀ます必要がある。唯物史觀の夢から醒めかけて來た日本の讀者層は、もう一度傳記學から出直す必要がある。

青葉の感化

四月の花が散つて後、花より美しいものは森の青葉であつた。青葉が花より美しいといつても、人々は私を信用しないかも知れない。しかし、櫻の葉一枚を眺めると、さほど美しいとは思はないが、無花果、青木、八ツ手、樺、櫟、胡桃、檜、竹、やまにれ樞、楓などの、形も枝振りも葉序も異つてゐる様々の森の姿を眺めてゐると、その美しさに吸ひ込まれさうになる。

その下草には、心臟型のどくだみや、赤ん坊の涎懸のやうな落の葉、さては、レースのやうに透いて見える十二単衣の奥床しい姿や、また大きな幹の傍に立つてゐる茅、薄の葉、さては禾本科の細長い雀の鐵砲の葉が作る拋物線の美までが、私をこの上なく慰めてくれる。私は毒々しいアメリカ流の活動寫眞よりか、幾千萬年前から續いてゐる植物のこの靜かなるベーヂェントの方に氣を惹かれる。

植物に心がなくとも、あれだけにまで、千差萬別の粉飾をなし得るその心掛けに對して、私は、無心のその奥の神祕の世界に、つい釣り込まれてゆく。

ジョン・ラスキン

世界の魂を動かす力

嘗てラスキン大學を訪れたとき、私はこの貧相な建物のなかから、英國で最も多數の國會議員を送り出したといふ事實を顧みて、轉た感慨に堪へないのであつた。

名はラスキン大學であるけれども、實は英國勞働組合會議で幹部を養成する、半公共的な機關である。現にこの大學に學ぶ學生たちの大部分は、英國六百萬の勞働組合員のなかから選抜された人々である。そしてその當時、この大學の卒業生のうち二十七名が、國會議員であるといふことであつた。

私は狭い廊下の壁にかかつてゐる粗末な額の前に佇んだ。それはラスキンが生前、自ら七千磅（約七萬圓）の金を投じてつくつたセントジョーヂス土地組合の寫眞であつた。

私はその粗末な額の前に立つて、思はず深い感慨に耽つたのであつた。

何故に英國の労働者たちは、その幹部養成所に、ラスキンといふ名をつけたのであらうか。方々の工業都市に行つて見ると、たいていの労働者倶楽部は、ラスキン・ホールと呼ばれてゐる。ここで會合が開かれるばかりでなく、玉突が行はれ、ビールが飲まれる。——みんなラスキンの名において。

何故であるか。

彼の一生は、世俗的な意味においては、全く失敗の連続であつた。彼は二度戀愛をして、二度失戀した。二十九歳で結婚した彼は、六年後には妻君に逃げ出されてゐる。美術評論家としての名聲は得たけれども、その社會思想はつひに時代に容れられなかつた。父の遺産二百萬圓を投じてはじめた社會事業は、全くみじめな失敗に終り、僅かに博物館一つを形見として、死後には十數萬圓の借金さへのこした。

それにも拘らず、彼はまだ生きてゐる。英國の労働者の胸のなかに、懐しい記憶となつて生きてゐる。いや、全世界の人類の胸に、生々しい影響となつて現れてゐる。

何故であらうか。

私はそれを考へて見たい。

「生命は金錢をもつて買ふ能はず。」

ラスキンのその言葉は、當時の人々の嘲笑を買つたにも拘らず、今や全世界の人類の胸を動か

す、曉鐘のやうな大音聲となつたのではあるまいか。

失戀から自然研究へ

「まあ、よくいらつしやいました。」

さういつて、いそいそと玄關の戸を開いたのは、母親のマーガレットであつた。彼女は脊の高い、美しい五十四歳の婦人であつた。客は佛都巴里の酒商ドメックの一族であつた。あとから、三人の娘たちが續く。

これは息子のジョンにとつては、大事件であつた。

なぜなら、その瞬間、彼の眼と心とは、一番姉のアデルといふ、芳紀十五歳、黒眼がちな、スペイン型の美少女に、釘付けになつたからである。

率直に言へば、十七歳になる早熟な少年のジョンは、戀に捕はれたのだ。

その晩、ラスキン一家——その時五十歳であつた父、母、そしてジョン——は、應接室に集まつて、フランスの珍客を歓迎した。ジョンはアデルの傍につきつきりで、何とか彼女の歡心を得ようと、下手糞なフランス語で、スペインの海軍の話や、フランスの教會の話をした。これは内氣な彼にとつては、よほどの努力であつたにちがひない。しかしアデルは、つんと取りすましてゐた。ジョンが熱心になればなるほど、彼女は冷やかになるやうにさへ思はれた。

そして次の日も、また次の日も……

四日目に、アデルは、両親に連れられて、フランスに歸つて行つた。ジョンは凡てが失はれたやうに感じた。怖ろしい空虚だ。そして何といふ淋しさだ！

先方は何とも思つてゐないのに、ただ一人身と心を焼くこの懊惱。——ジョンは自分自身が、哀れにさへなつた。

彼は急にフランス語の勉強をはじめた。アデルに手紙を書くためだ。だが、彼の情熱をこめた、しかし夢のやうな手紙は、自惚れた美しい巴里娘の嘲笑を買ふだけであつた。

両親は、この一途に思ひつめた息子の心を、何とかして外に轉換させたいと思つた。そしてシヤロットといふ、十六歳の、優しい、美しい、薄いそばかすのある娘を連れて來た。が、それも無駄だつた。彼にはどうしても、アデルが忘れられなかつた。

これが彼の最初の、そして長い失戀であつた。

「彼女は四日で私を白儘にしてしまつた。そしてその祟りは四年の間つづいた。」

とラスキン自らが告白してゐる。そして四年後に來たものは、アデルが、金持で立派なスポーツマンの男爵と結婚するといふ報せだつた。

つひに來るべき日が來たのだ。戀人の結婚！これが最後の鐵鎚である。

そしてこの運命の鐵鎚で、があんと一つ腦天をやられたとき、ラスキンは一體どうしたか。

そこに人生の岐路がある。

およそ不運ほど、人を墮落させるものはないと同じく、不運ほど人を偉大にするものはない。

ラスキンはその後者の道をとつた。彼は運命の鐵鎚を受けたとき、びよこんと凹むかほりに、びいんと撥ねかへつた。

そこにラスキンの偉大さがある。

そして彼は、まつしぐらに、自己の使命へと突き進んだ。事實、彼が不朽の名著『近代畫家』の第一巻を公にしたのは、それからたつた四年の後、彼が二十四歳のときであつた。

若し彼がこのとき、失戀の深い傷手を負はなかつたならば、彼もまた父のあとをついで、文學趣味のある富んだ一酒商として終つたかも知れぬ。運命は彼に不幸を與へて、その天才に蹄を加へたのであつた。

自然美への指導者

「ジョンは何をするだらうか？」

これが牛津オックスフォード大學生徒たちの疑問であり期待であつた。

事實、彼は異常の天分に恵まれてゐた。五歳にしてすでに圖書館から書物を借り出して読み、九歳にしてポープ風の立派な詩を書き、新聞や雑誌に投書したり、論文を書いたりしてゐた。そ

れに、富家の一人息子に生れた彼は、富める両親に連れられて、英國を初めヨーロッパの各地を幾回となく遍歴し、個人教授を経て学校教育に入つても自由にその天分をのばすことができた。二十歳にして早くもニッポナイゲート賞を得、シェルドニアン劇場における當選詩の朗讀は、すばらしい評判を生んだ。

ただ彼は病身であつた。そしてまだ、自分は何をなすべきか、それを知らなかつた。天才にありがちな缺點だ。

しかるに、今や、この迷へる天才に、瞭然と目標を指し示す事件が起きた。それは失戀である。失戀の鐵鎚は、彼の人生と自然を觀る眼を、かつと見開かしめた。

その前から彼は、悶々の情をやるために、幾度も海外に旅行してゐる。アルプスの峰を攀ぢて、落日の偉觀に胸を打たれたこともある。ヴェニスに遊んで、油のやうに澱んだ水を愛したこともある。殊にアルプス登攀に於いて、山の姿をスケッチしたり、その地層を研究したり、かうした間に醗酵される山の感化力は、彼の精神生活を引き立てるのであつた。

そして今や、失戀の鐵鎚とともに、それらの記憶が、はつきりと甦つたのだ。

「人の情は美しい。しかし、それより深いのは自然の美だ。人間は偉大である。しかしそれより崇高なのは自然である。」

さうして彼の著したのが『近代畫家』五卷である。それを完成するのに、彼は十七年の日子をつひやした。

彼が牛津大學を卒業して、直ちに發表した『近代畫家』の第一卷は、大部分、自然畫家ターナーの擁護論であるといはれる。しかし當時の人々が、強く胸を打たれたのは、自然そのものに深く惹きつけられた彼の自然好愛の告白である。彼の自然研究は、卷を追ふに従つて、強く且つ深くなつていつた。

私は告白する。誰よりも深く私に自然研究を教へてくれたのは、ラスキンの『近代畫家』の第一卷と第四卷であつた。すべての山と山脈が、無限曲線によつて飾られてゐることを、私に教へてくれたのはラスキンであつた。それから、雲、水、港、光——いかにして、それらの自然美を研究するか。それに目を開けてくれたのもラスキンであつた。

沉んや當時の世界は、やうやく工場の雑音や、煙突の煤煙に惱まされ始めた時代であつたので、ラスキンの感化がどんなに大きかつたかは、想像の外である。沙漠の夕立のやうに、ラスキンの言葉は、當時の人々の胸に吸ひこまれた。

印度の指導者ガンディーも、ラスキンとトルストイに負ふところが最も多かつたと、自ら語つてゐる。ラスキンは確かに、東洋と西洋の多くの魂に、自然を見よ、と指差してくれたのであつた。

文明の精神的基礎

時雨がやつて来た。

ラスキンは雨を避けるため、急いで教會堂のポーチへ逃げこんだ。しかし、南国イタリアの時雨は相當に激しく、また長かつた。屋根に落ちた雨は、瀧のやうに軒を傳つて流れてゐた。

はつと氣がついて見ると、天井裏から落ちて来る雫の下には、百萬圓出しても買へない、文藝復興期の畫家チントレットの繪があるではないか。

「これは大變だ。折角の名畫が臺なしになつてしまふ。どうしたんだらう？ 屋根がどうかなつてゐるんだな——。」

ラスキンは、翌日その寺院を訪問して、詳細に理由を述べて、屋根裏を調べさせて貰つた。そしてそれは、この會堂をつくつた職工が、手間を省くために、誤魔化してゐたためであることを發見した。

その時彼は、一つの眞理に衝き當つた。

「建築はただ單に物質的材料だけで出来るものではない。そこに人格的要素を必要とする。」

ラスキンは、それを更に深く研究した結果、つひに「建築の七燈」といふ本を書いた。

「建築には七つの道德的要素を必要とする。第一は眞理だ。それから美だ。力だ。犠牲だ。服従だ。労働だ。そして記憶だ。」

『建築の七燈』には、この主張が、美しい文章で、力強く提唱されてゐる。

この思想をさらに大きく發展させ、もつと事實に基いて實證したものが、一八五一年に發表した『ヴェニスの石』である。そこで彼は、一種の唯心史觀ともいふべき思想を展開してゐる。

ヴェニスの建築物は、およそ三期に分つことができる。第一期は、十字軍の大輸送に關係してこたたま儲けたヴェニスの商人たちが、サン・トルコ寺院のやうな、ビザンチン建築を建てた時代。それから十三世紀にはひつて、統領ドイッチ官殿のやうな美しいゴシック建築を完成した時代。それが宗教心の衰へと共に次第に墮落して、快樂本位のルネッサンス建築時代となつた。

ラスキンはその著「ヴェニスの石」において、第一期のビザンチン建築が玉のやうに美しいことを激賞してゐる。しかしその様式は、結局、ギリシヤの模倣に過ぎない。ヴェニスの工人たちが、眞實の創作的な美しい建築をのこしたのは、第二期のゴシック建築時代に入つてからである。ゴシック時代の建築を観ると、名も知れない工人たちが、自由勝手に彫刻したり、柱を飾つたりして、めいめい勝手なことをしてゐる。それでゐる少しも全體の狂ひがなく、却つて全體としては、實に優美な典雅な趣きをそなへてゐる。そこにゴシック建築の面白味があつた。

何故であるか？

それは彼等が、めいめい勝手な工作をしてゐるやうであつて、その精神には、當時の民衆の胸のなかに澎湃として興りつつあつた強烈な信仰心が、一貫して流れてゐたからである。實に信仰なくしては、一つの建築さへ完成できない。

しかるにこの力強い民衆の信仰心は、ルネッサンス時代に入つて、漸く衰退して來た。そのためにこの時代の建築は、結局において模倣であり、奉仕的精神の籠らぬ、勞力を省いた、力の弱い、美に缺けた誤魔化しに墮してしまつたのである。

建築とは、決して石やセメントではない。その註文者、設計者、工作者の精神的態度が、そのまま石に刻みつけられたもの、それが建築なのである。アッシジの聖者フランシスのやうな愛と犠牲の精神から生れるのでなくては、いくら黄金の山を積んでも、決してヴェニスゴシック建築のやうな、美しい建物をつくり出すことはできないのである。

そこでラスキンは、一つの大きな社會思想に到着した。

たつた一つの建築でさへ、さうであるとするならば、立派な社會、立派な文化といふものが、どうして、民衆の宗教的、道德的基礎無しに、建設できようぞ。

マルクスは、「およそ文明と道德との基礎工事は、物質的生産の形式にある」と言つたが、ラスキンはそれと反對に「民衆の宗教的、道德的基礎工事ができて、はじめて健全な文化が築かれるのである」と主張した。

マルクスの唯物史觀に對して、私はこれを假にラスキンの唯心史觀と名づけよう。そしてこの唯心史觀は、後に英國の勞働組合に採用せられ、つひに組合幹部を養成するところの、いはば彼等の社會運動の士官學校に、ラスキン大學といふ名を附けられるに到つたのである。

不幸な結婚

美術評論家として出發したラスキンが、かうして次第に、社會思想家、それから社會改良家と、轉向してゆくやうになつたのは、一つは時代の壓力でもあつたが、も一つは彼の不幸なる結婚生活のせりでもあつた。

ラスキンの名聲が高まるにつれ、兩親は愛する一人息子が、何時までも獨身生活をつづけてゐることに、一種のもどかしさを感じはじめた。

「ね、ジョンや、お前、もうそろそろ身を固めてくれぬと困るね。」

母親は口癖のやうにかき口説いた。が、この失戀の子の返事は、何時も淋しかつた。

「だつて、お母さん、僕はまだ結婚する氣にはなれないんです。」

「ぢやア、私たちがいい人を探して來たら、どう？ 結婚してくれて？」

「それも人によりけりですね。」

すると傍にゐた父が口を挟んだ。

「しかし、ジョン、お父さんも、六十を越えると、初孫を抱きたくなるもんだよ。何とか考へてくれなくちや——。」

兩親から、かう頼むやうにせがまれると、元來心の優しいラスキンは、動かされないではゐな

かつた。父は一生の苦闘によつて、二十萬磅（約二百萬圓）からの財産をつくつてゐた。金錢に不自由はなし、息子の名聲はあがるし——あとはただ結婚しさへすれば、兩親を完全に幸福にさせられるのだ。

（戀人のアデルは人妻となつてしまつた。どうせ破れた戀に空虚な心を、みたすことができないならば、老いた兩親を喜ばすために、結婚してあげてもいいぢやないか。）

さう思ふやうになつた。

そして兩親のすすめにより、ユーフィミア・シャルマーズ・グレイといふ婦人と結婚したのは、一八四八年、彼の二十九歳のときであつた。

しかしこの結婚は、最初から呪はれてゐた。

その新婚旅行の日、はじめから肺病の氣味があつたラスキンは、ソリスベリー寺院をスケッチしてゐるうち、突然血を吐いて、結婚したばかりのユーフィミアを吃驚させた。

一方ラスキンも、その妻を心から抱擁する氣には、どうしてもなれなかつた。

一體彼女は、花のやうな美人ではあつたけれども、何時もお寺に行つてスケッチしたり、ちつと物を考へてゐるやうな、暗い氣分は好きになれなかつた。それよりも彼女の好きなのは、華やかな社交界であり、派手な舞踏會であつた。そしてヴェニスに滞在中でも、彼女は夫を放つといつて、一人で舞踏會に飛び出して行くやうな日が続いた。

「なアに、ラスキンさんは、建築物と結婚したんですよ。あんな人、放つときなさいよ。」

そんなことを言つて、彼女をけしかける人さへあつた。それに、社交界におけるラスキン夫人の評判は、とても素晴らしいものであつた。彼女はそれほど美しかつたのだ。彼女の行くところ、花を撒いて待つてゐる大勢の若者があつた。それなのに、肺患に苦しむラスキンは、何時も暗い心を抱いて、自然と建築の奥に潜める眞理を、ちつと眺め暮してゐる。

かうして二人の心は、次第に離れていつた。

それは世にも不自然な結婚生活であつたと言はねばならぬ。二人は同じ軒の下に住みながら、別々の生活をしてゐたのだ。

そして到頭、結婚してから六年の後に、最後の破綻が來た。或る朝彼は、妻の室の鏡臺の前に行つて見ると、頭髮ピンに、簡単な有り來りの書置きを突き差したまま、家出してゐる妻を見出したのである。

それから間もなく、二人は裁判を仰いで、正式の離婚をした。しかもこの別れた妻が、大急ぎで再婚した相手といふのが、人もあらうに、ラスキンの親友であり、またその擁護者となつてゐた、自然畫家のミレース（後に王室美術院長となり、今に不朽の名をのこしてゐるジョン・エヴァレット・ミレース）であらうとは！

慎しみ深いラスキンは、その間の消息について、少しも書いてゐない。しかし彼の柔かい心が、

少からず傷いたことは、想像にあまりある。そしてそこに彼が美術評論家から、次第に社會思想家へと轉向した心の動きを推察することができる。

實に、不幸によつてますます偉大となるのは、すべての巨人に共通する資格である。最初の失戀が、無二の美術評論家ラスキンを生めるごとく、不幸な結婚生活とその破綻が、偉大なる社會思想家ラスキンを生む母となつたのである。

新しき村の失敗

當時の歐洲は、山雨來らんと欲して風樓に滿つゝの概があつた。

彼が結婚した年（一八四八年）、すでに倫敦では、百萬人の労働者が、議會に請願書を持ちこむといつて、大騒ぎをしてゐた。フランスでは革命が起つて、その影響は電波のやうに、全世界に擴がつていつた。ドイツのマルクスは、共産黨宣言を書いて、資本主義文明を呪つてゐた。イギリスでは、普通選舉運動が暴壓されて、民衆が湧き立つてゐた。

しかしこの場合、ラスキンは、民衆の言ひ分がそのまま正義であるとは、即斷することができなかつた。

また、物質的生産の形式が、文明のすべてを決定するといふマルクス主義にも、直ぐには賛成できなかつた。

「人間の良心を變革しないで置いて、ただ社會制度だけの變革で、理想の社會は決して現出するものではない。」

かうした社會思想をもつラスキンが、セント・ジョーヂス土地組合といふ「新しい村」の運動に、手を染めるやうになつたのは、不思議でも何でもない。

彼はそれに私財全部を投げ出して悔いなかつた。

「こんな風にしてね、我々は、土と、労働と、自然と、美とを調和した理想の世界をつくるんだよ。」

彼は素晴らしい意気込みで、その仕事にとりかかつた。

だが、傷ましいかな、それは、醜い現世に實現すべく、あまりに美しい夢に過ぎなかつたのである。

機械生産を惡魔のやうに憎んだ彼は、現代をもう一度、中世の手工業時代に返さうとした。穀物を運ぶための動物の使用をさへ禁じた。そんな時代逆行が果して出来ることだらうか。それに彼は、かうした農業實行組合が、どうしても持たねばならぬところの消費組合及び消費市場との連絡を、完全に無視してゐた。

要するにラスキンは、藝術的に出發して、それを社會科學的に組織することを忘れてゐたのである。

さうして彼の「新しい村」は、完全に潰れてしまつたのである。

この頃から彼は、プラトンの理想國をイギリスに打ち建てようと夢みてゐた。彼の理想は、平等ではなかつた。むしろ反對に、賢人の治める賢人國であつた。彼は執政官を認め、王者を讚美した。しかし一方、資本主義の金儲中心の社會と、利子搾取の制度には極力反對した。

彼はかうした社會思想を、あらゆる機會に、講壇の上から獅子吼し、著書や論文によつて唱道した。しかし世界は、彼の思想に叛逆した。彼の思想の或る部分は、あまりに矯激だと言つて、讀書階級から爪弾きされた。そして他の部分は、あまりに時代おくれだと言つて、保守的なオックスフォードの大學生でさへ、茶番化するやうになつた。

ああ、彼が初めてオックスフォード大學に美術講座を設け、その最初の教壇に立つたときの、あの壓倒的な人氣はどこへ行つたのだ。そのときは聽講者が教室に溢れて、止むなく劇場で講義を進めなくてはならなかつたほどであつたのに！

美術評論家としてのラスキンは、まさに時代の寵兒であつた。しかし社會思想家としての彼は、世界の嘖ひ者となつた。

淋しき巨人の死

傷ましき巨人の晩年である。

その全財産と全精力を注いだ事業は失敗し、その社會思想は世に容れられず、旭日昇天の人氣は地に墜ちた。しかも彼はそのころ、第二の失戀によつて、悩まなければならなかつたのである。

それはローズ・ラ・トーションといふ、彼とは三十も年齢のちがふ美少女であつた。ラスキンは彼女を、十一歳のときから愛してゐた。しかも躍る心を抑へつつ、彼女が年頃になるのを待つて求婚して見ると、中年の男の戀愛に對して、彼女は冷淡であつた。それでも、彼は更に六年待つた。しかも六年後に、結局彼の得たものは――

拒絶！

ああ、十七歳にして最初の失戀をした彼が、中年を空虚な結婚とその破綻に過ごし、さらにもう一度、五十歳にして、同じ失戀の苦い經驗を嘗めなければならぬとは！

加ふるに彼はそのころ、ホイスラーとの訴訟事件に悩まされてゐた。印象派で有名なホイスラーの悪口を、あまり辛辣に書いたといふので、法廷に訴へられたのだ。この事件は、結局、賠償金を「一錢」支拂ふべしといふ判決で、結末を告げたのであるが、ホイスラーはこの一錢をとるために、約四千圓を費したといふことである。法廷で負けた方のラスキンも、辯護料として同じほどの額を費してゐる。

だが、それよりも悲しいのは、この訴訟事件が続いてゐる間、ラスキンが全く精神病を患つて、悶え続けなければならぬことであつた。

彼の社會思想に對する社會の迫害、晩年の戀愛のいたましい破滅、それから煩はしい訴訟事件——そんなものが、積り積つて、彼の優しい心を責めさいなんだのだ。彼はそれらのものとよく戦つた。が、到頭、それらすべてのものと訣別する日が來た。

一九〇〇年、長く病んでゐたラスキンは、ブラントウッドの湖畔において、最後の息をひきとつた。享年滿七十一歳。

かうして十九世紀は、つひに自然と美の豫言者を、次の世界に送りこんだのである。

そして見よ！ そのあとに如何なる世界が現出したか。

林立せる煙突から吐きだす煤煙である。牢獄のやうな工場から起る雑音である。それとともに、地球の表面からは、美しい森と美しい人間の顔が消え去つた。醜く肥えふとれる資本家と、憎惡にみちた労働者群の眼——失業者は路上に溢れ、自殺者は日に増し、赤旗と流血の騒ぎが、毎日の新聞記事を陰慘に彩る。

ああ、敗れたるものは果して誰ぞ。

物質と機械との文明は、完全にラスキンを地に叩きつけたやうに見えた。だが、今やこの偉大なる豫言者の言葉は、新しい響を以て、人類の胸を揺りはじめたではないか。

敗れたるものが、つひに起ち上る日が來たのだ。

静思斷片

私は次の世界に移つた時、先づ神に、自然があまりに不思議に造られてゐること、私がそれを見ていつも驚いたことを報告しようと思ふ。

放浪四年、私は日本の隅から隅まで歩いた。そして人間の住む世界が、自然に比べてあまりに平凡なのに驚いた。

慌てるな、靈よ、少し鎮まつて、神の可能性の方向に従つて進路を決定するがよい。慌てて戸口を間違へないやうにせよ。

今日も朝日の出る前に、曙の森を眺め、かすむ眼に大きな世界の開展を覗いた。もうこれだけ

で、私は宗教といふ言葉に盛れる以上のものを見た。

降より峰に私は飛ぶ。それは最も近い途である。低迷の世界に私は用事はない。

茶褐色に染まつた茅の根に、二三日前に降つた雪がまだ残つてゐる。雀が瓦屋根の軒先から地べたを覗いてゐる。樺が洋傘の骨ばかりをさしたやうに天空にひろがる。そんなことがあつて少しすると、霞が森に歸り、たんぼぼが野路に舞ひ戻る。その時だ、私が裏の小溝にめだかの群の遊びでゐるのを発見するのは。早速私もめだかになつて流れの中を遊びでみたくなる。

民衆藝術に就いて

勿論私は、トルストイの云ふやうに、民衆的のものでなければ藝術でないとは考へてゐません。しかし、ある藝術家のやうに、民衆の解しないものでなければ、藝術でないとは考へるやうな、一人よがりの議論も變だと思ひます。

民衆に解るから下等だと考へたり、民衆が悦ぶから淺薄だと考へることは、自我狂の藝術論です。

民衆藝術が喧しく云はれて來たのには、社會的に大きな原因があります。十九世紀の中頃までは、個人主義が跋扈してゐて、總ての社會に分解作用が行はれました。フランスの大革命すら、組合主義に反對しました。その精神を受けて、ナポレオン皇帝は、ギルド組合を解體させてしまつたからです。極端な自由主義は、民衆を一種の下等なものと考へました。これが藝術の上にも現れてゐます。

ところが、十九世紀の半頃から、再び協同組合が、その必要を感じられ、大都市に大群衆が群

がるやうになつて來ました。それで、中世紀の民衆藝術とは、異つた意味に於いて、民衆が藝術を要求するやうになつて來ました。中世紀には、文字の讀める人がなかつたものですから、説明的の意味に於いて、民衆藝術が利用せられたのですが、新しき民衆は、群集意識と、意志表現としての藝術を要求するやうになつてきました。

それですから、二十世紀の民衆藝術は、或る止むに止まれない群集の意志を表白する氣持から出發してゐます。中世紀の民衆藝術は、宣傳が中心でした。けれども、二十世紀の民衆藝術は生活が中心です。勿論、生活中心から離れて、中世紀式宣傳本位の民衆藝術を考へる連中も無いではありません。しかし、さうした藝術は、あまり氣持のいいものではありません。或る止むに止まらない氣持から出發した、民衆の意志の表白といふものは、フランスの國歌「マルセイユ」の行進曲のやうに、流行はやらすものがなくとも、自然と民衆的なものになります。民衆は自分の選ぶべきものをよく知つてゐます。眞正の民衆藝術は單なる宣傳で出來上るものではありません。その時代の精神とびつたりしなければ、決して民衆的なものになるものではありません。

この點に於いて、民衆は、言葉は少し悪いですが、非常に宗教的です。惡に向つても、善に向つても、民衆は宗教的です。破壊的な戦争に對しても、建設的な愛國運動に對しても、例外はありません。

民衆は、個人に比べて、常に神秘的です。懐古的です。情熱的です。ローマンチックです。ですから、群衆は、密室で讀む廢類文學などは、全然形の異つた講談趣味のやうなものや、劍劇的なものを愛する傾向を持つてゐますが、それには、民衆の昂奮性が常に加はつてゐるからです。民衆は衝動的で、しかも表白的です。民衆は感覺の全部が一致しなければ承知しません。民衆は、視て、聽いて、歌つて、飲んで、觸れて、踊つて、最後の石を投げなければ、承知するものではありません。

それですから、よく芝公園などで行はれる示威運動などを見ても、凡てが劇的に運びます。旗を立てて、太鼓を叩いて、演説し且つ拍手をして、四斗樽の鏡をぬいて、大勢で飲んだ上で、踊りつつ躍進を始め、警官と取組合ひをして、最後の石を投げなければ承知しません。この劇的な要素を、オペラ劇とページェントが持つてゐます。

それで昔から、民衆の最後の娛樂には、いつも演劇が最高の催し物として演出されてきました。古代ギリシヤのオリンピア時代から、今日武藏野の秋祭に見る神樂芝居の催し物に至るまで、全く同一の民衆心理が支配してゐると云つて、差支へないでせう。

この意味に於いて、民衆藝術を本位とする演劇の如きは、實に重要な使命を持つてゐます。澤正の新國劇が、或る堅實さを持つてゐるのは、この民衆の道を行かうとしてゐるからだと思つてゐます。澤正も天分を持つた人でせうが、大正及び昭和の民衆も、彼を創作するのに大きな役目を持つてゐたことを考へねばなりません。演劇は民衆意志の或る種の噴火口です。澤正は民

衆の持つてゐる意志と感情の噴火口の直径を示してゐます。それで、私は絶えず彼の行動に注意して、民衆の動き方を測量してゐる譯です。澤正を民衆感情の「ゲージ」に用ひては、誠に濟まないが、彼の役目はそんなに重要なものです。彼は、煽動家以上の大きな役割を務めてゐると云へませう。

現代人と信仰

神に孕まれたるもの

あんまり馴れ易いわれわれの心は、宇宙の驚異に驚かなくなつてしまふ。そして宇宙の可能性に對する信仰よりか、決定的の運命觀が人を支配する。彼等は貝殻にはひつて天が見えないといふ。天がないのではない。天を見ないのである。

ここに、母の胎に孕まれてゐる赤ん坊があるとす。その赤ん坊が、孕まれてからも間近く十ヶ月になるけれども、母の顔は一度も見たことがない。われわれが神を見ないといふのも、その赤ん坊と母の關係にひとしい。母の胎は赤ん坊にとつての宇宙であり、赤ん坊の不可知論を生む理由にもなる。しかしそれだけで、赤ん坊が母の存在を疑ふなら、その赤ん坊は妙な赤ん坊であるといはなければならぬ。

今日唯物論者が、人間の眼の感覺にうつる物だけを見て、神は存在せぬといふことは、母の胎

内の赤ん坊が、胎壁に觸れて母がないといふのにひとしい。母がないのではない。現在赤ん坊が生きてゐることは母のある證據ではないか。同様に宇宙に神がないのではない。われわれが生きてゐるのはその證據ではないか。胎内の赤ん坊は、その緒によつて母につながつてゐる如く、われわれ人間は生命によつて神につながつてゐる。生命を疑ふものは疑へ。それは人間以上の力がわれわれにそぞぎ込んで来る新しい力である。その力は感ずることによつてのみ認識せられるのであつて、概念によつて持ちきたらされるものではない。宇宙の神の場合においても同様である。神は直観によつて知り得るものであつて、概念によつて組み立てられたものは、その影に過ぎない。

私は不思議な生命を感ずるが故に宇宙に神があることを信ずる。

物質は神の言葉である

現代人には悪いくせがあつて、物質とエネルギーと、物質と生命と、物質と變化性と、物質と生長性と、物質と選擇性と、物質と法則性と、物質と目的性とを混同するくせがある。

近代物理学が、漸くこれらの點の區別をし出したことはうれしいことである。新物理学は物質がエネルギーから成り立つてゐて、人間の感覺に對して、物として映るのだと教へてくれる。宇宙の本體は物質ではない。それは力であり、生命であり、變化性を持つものであり、生長性と洵決性と、法則と目的をもつて力を動かしてゐるものである。

宇宙を物の集合體のやうにしか見ない不徹底な人間には、生命と、力と、變化と、生長と、選擇と、法則と、目的が統一なくしてばらばらに存在するものの如く見える。それはわれわれがあまりに限られた局部的な生活をしてゐるからである。しかし局部的な生活をしてゐるものでも、内に省みれば意識は一つしか持つてゐない。その意識のうちには、エネルギーと目的と、變化と法則と、選擇と生長性が、生命といふものの中に完全に統一體を組織してゐる。つまり一つの焦點を持つてゐる譯である。そしてこの統一的意識を我々は心と呼んでゐる。この心の出現が可能な世界には、必ず大宇宙に心の源があるに違ひないと私は思ふ。それを神と呼ぶに何の誤謬があらうぞ。

物質の世界を見る時に、私にとつてはそれは不思議な神の言葉であるとしか考へられない。自然は神の衣であり、神の衣裳に縫ひつけられた裾模様であると私がいふのは、かうした意味である。私はどうしてこんな不思議な世界に住んでゐるだらうか？ 私が感じるやうに、なぜ世界の人は感じないかと自分ながら不思議に思つてゐる。

宗教と道徳との差

人間は多くの場合、一日に三つの生活を繰返してゐる。八時間は眠つて無意識状態に陥り、八

時間は本能的に生活して半意識状態を続け、残りの八時間を目的ある勞作に消費してゐるのだ。

宗教とは、この無意識及び半意識の生活から全意識の生活にのみがへつて、宇宙の目的に添ふ生活をする事である。宇宙の目的は神のみしか知らない。それでわれわれは、神の目的を學んで自分の小さい生活を神にゆだねようとしてゐるのである。

この宇宙の目的を離れた人間の心の生活ほど悲惨なものはない。すべての倫理的惡は、この人間個々の我儘から起つてゐる。階級闘争本位の生活がしばしば社會を誤るのも、ここに原因がある。彼等は宇宙の目的を根本にせずして神を否定し、宇宙全體の幸福を忘れ、時には極端な利己的團體や自己の心から出發して、社會全體の幸福を忘れることがある。

この間違ひのために社會に混亂が起る。昔のローマの譬ではないけれども、人體において、足が階級意識から頭を排斥した場合どうなるだらうか。われわれは先づ全體意識に目覺める必要がある。全身をめぐる血は全體のために犠牲の生活を續けてゐる。キリストが指差した血の贖罪愛といふのは、全くかうした全體意識——否、宇宙意識から湧いたものであると考へてよい。かうした意味において、宇宙の神の意識にはひらなければ、最も高い贖罪愛の道德意識にわれわれはひれない譯である。

道德は、人間の世界だけしか考へない。敵をも愛し、罪人をも救ふ愛は道德から生れない。そこから先は宇宙全體の神意識から生れるのである。日本は今宇宙を忘れて日本だけしか考へない。

それで日本人には悲しいかな、この贖罪愛の祕密がわからない。

知識と信仰

知識があれば信仰はいらぬといふ人がある。これらの人々は、過去があれば未來はいらぬといふだらうか。決定があれば可能性はなくてもよいといふのだらうか。

人間の生活において知識は常に過去の經驗から與へられてゐる。そして未來はその過去の傾向の延長に加へて、新しい可能性が含まれてゐる。その傾向と可能性は、まだ知識の範圍内にはひつてゐない。「明日」はまだ無い。しかしまだない「明日」が、傾向と可能性によつて來る「だらう」との信仰を持ち得る。信仰の世界はこの可能性の世界を意味してゐる。それを宗教では奇蹟の可能性として信じて來た。奇蹟を笑つてはならない。それは人間を通しての可能性を意味してゐるのだ。いや、目的の世界と法則の世界が、決して衝突しないことを意味してゐるのだ。傾向と可能性が衝突してゐないことを意味してゐるのだ。いや、法則と決定すら、可能性の世界から見れば、宇宙にさういふ法則を作る可能性があつたから出來たと信するほかはない。

可能性の世界を見れば、世界は實に不思議である。物質の法則と信ぜられるものすら世界に可能になつたのだ。この事實を見ただけで、われわれは宇宙の神祕に昏倒する。私は次の世界に行つた時、宇宙の神に、私が地球の表面で見た不思議な物としての現象の世界と法則の世界を報告

しようと思つてゐる。

将棋の駒

運命と自由を、私は将棋の駒の使ひ方にたとへよう。歩は前方に一つしか行けない。香車は一
本道にしか行けない。桂馬は前方に一つ、そして斜に一つ、銀は兩脇と後へ真直ぐによれず、角
は斜にしか飛べない。これが定められた運命である。この變化性には階級があり、規則があり、
決定せられた範圍がある。玉といへども飛車のやうに飛ぶことは出来ない。しかし飛車は角のや
うに斜に動けぬ。

決定論者はかうした限定の世界だけを見る。しかし、歩でも前進する可能性を持ち、敵の陣地
にはひれば、金將と同じ變化の可能性を授けられるから、その使命たるや實に重大である。名人
は歩だけを持つて詰め手を知つてゐる。決定論的にのみ人生を見て、人生を機械視するものは將
棋の駒を見るがよい。駒は決定せられた領域を限定されつつも、なほ使命に生きて活躍するでは
ないか。動かぬ飛車より、動く歩の方がどれだけ多くの使命を持つてゐるか知れない。歩である
ことを悲觀してはならない。われわれは決定に泣く前に、われわれの使命に生きなければならぬ。
歩の力量しか與へられてゐない者も、歩だけの孤立した生活を考へないで、全體の局面と聯絡さ
して自分を考へられる。

使命といふものは、常に全體から割り出された言葉である。自己中心に考へる場合に、世界は
限界的に決定せられたものであり、全體的に見た場合に、その決定的個性も大きな使命を持つて
ゐることを忘れてはならぬ。将棋で桂馬ほど偏した決定を持つてゐるものはない。しかしまた桂
馬ほど重寶な駒もない。決定が使命であることを意識しようとするものは、桂馬を見るがよい。
近世に決定論が擡頭し、人類の使命を忘れるものが多いのは、宇宙全體の目的——即ち神の目的
を忘れたからである。

不思議な世界

神の意識が内に目醒める。気がついてみれば、私の存在も、宇宙の存在も、不思議で不思議で仕方がない。

私は第一に、自分の意識に制限のあることに気がつく。第二に、その意識が、だんだん廣く、高く、深くなることを意識する。さうやつて擴がつてゆく私の意識の限界に、理窟ではなく、私がいかに詰らないものであるかといふことを直覺させられる。蠟燭の先に焰が燃えてゐるやうに、「私」といふものは、肉體の先に、ちよつぱり點つた燈火である。その不思議な世界に私は住んでゐる。その意識の世界には、神と人間が兩側から覗き込んでゐる。その意識の世界に、過去と現在と未來が不思議に疊み込まれてゐる。意識ほど不思議なものはない。

宗教は意識の運動である。われわれが神を意識し、神と共に在り、神の使命を意識して活動するところに聖靈の生活が始まる。

どう考へても、限りある私が、限りなく永遠と絶對を意識し得ることが不思議でたまらない。

木も、草も、土も、雨も、太陽も、私の身體の一部分であることを私は意識する。それにも拘らず、私はそのすべてを親しく知ることが出来る。大宇宙は私の魂の内容を形作る。それがまた神祕である。なぜ私はこんな不思議な世界に生れ出たらうか？ 私は近頃そればかり考へてゐる。

「死線を越えて」を書いた動機

H様――

「死線を越えて」を書いた動機を話せとの御言葉ですが、困つてしまいました。明治四十年の五月だつたと思ひます――さうです、もう丁度二十年も前になりますね、私が肺病で明石の病院から三河蒲郡の漁師の離れに移つた頃、獨りぼつちであまり淋しいものですから、私は小説を毎日書き綴つたのでした。誰も訪ねてくれる人は無し、知つてゐる人と云ふのは村に誰も無いものですから、幻の中で過去の人間を小説として想ひ浮べてみたのです。さうでした、その前の年だつたと記憶します。私は小説が書きたかつたので、古雑誌の上に小説を書き綴つたことがありました。あまり貧乏で原稿用紙が買へなかつたものですから、古雑誌を原稿用紙代りに使用したのでした。そんなに私が小説を書きたかつた理由は、私の小さい胸に、過去の悲しい経験があまりに深刻に響いたことと、私が宗教的になつて行くことに依つて非常に氣持が變つて來たことを、どうしても小説體に書きたかつたからです。書き上げた小説を、私は島崎藤村先生に一度見て頂

いたことがありました。すると先生は、丁寧な手紙を添へて、數年間筐底に横へて自分がよく判るやうになつてから世間に發表せよと云はれたのでした。

その後肺病はだんだんよくなつて、私は貧民窟に入りました。それから十三年経ちました。十三年目に改造社の山本實彦氏が、貧民窟の私の事務所に来て、その小説を出さうぢやないか、と云はれたので、私は、「死線を越えて」上巻の後の三分の一を新しく書き加へたのでした。その時に、前の三分の二の文章があまりにごつごつしてゐて拙いと思つたのですが、妙なもので、一つ直さうと思へば、全部直さなければならなくなるし、十三年後の私の筆は、よほど昔よりは上手になつてゐるやうでしたけれども、何だか血を啗いた頃に書いた物は、ほんとに嚴肅で、その頃の私の氣持が最も眞面目に出てゐるものですから、私は文章よりか氣持を取りたいと思つて、文章の拙いことを全く見逃すことにして、嚴肅な血を啗いた時の氣持を全部保存することにしたのでした。そのため「死線を越えて」上巻の前半には實にごつごつした所もありますが、加筆を許さない強い調子が残つてゐることも、また事實であります。

モデルのことですか？ それは私の周囲の人々に聞いて下さい。私の心の生活をあれに書かうとした時に、モデルに就いては云へない多くの事情があるのです。

何時かも有島武郎氏が云つてゐたやうに、小説は小説であるけれども、事實以上の眞實さがあるものださうです。私も有島君の流儀で、このあたりは許して頂きませう。

私は、あの小説を必ずしも成功した小説だとは思ひません。それが雑誌『改造』に出た時に、あまり拙いので自分ながらはらはらしました。ですから、本になつた時にあんなによく賣れたのを、自分ながらも驚いたのでした。けれども、今になつて考へてみると、読者はやはり私が考へた通り、拙い文章を見逃してくれた、私が書かうと思つた心の歴史——つまり心持の變り方——を全體として読んでくれたのだと思つて感謝してゐるのです。私はあの本で、文章の拙いことを讀まないで、心持の變つて行く順序を讀んで下さる方は、私の最もよき友達であると愛讀者諸君にいつも感謝してゐるのです。それと共に私は、あの本を讀まれた人の前には頭が上らぬやうな氣がするのです。それと云ふのも、あの拙い文章を辛抱して讀んでくれ、その上私の心の生活を全部知り抜いた読者は、豫言者のやうに私を批判する力を持つてゐるのであると、いつも思ふからです。

『良人の自白』の感想

日本がロシアに勝つて後、青年の多くはロシアの思想に傾いた。しかしその頃、日本の土から生えた一種の郷土文學ともいふべきものが藤村やその他の人々によつて試みられた。その頃はまた、小栗風葉や眞山青果が女學生情緒を濃厚に描かうとしてゐる時であつた。

またその時であつた。木下尚江氏の『良人の自白』が『東京毎日新聞』に連載されて、青年子女の胸ををどらせたのは。

木下尚江氏は辯護士である。しかもその當時は、安部磯雄、堺枯川、幸徳傳次郎などと肩をならべて無産者解放の急先鋒を承つてゐた。この解放運動者が、それまでの専門家の遊戯的文學の氣持から解放せられ、解放への武器として文筆を手にしたことは、非常に意味が深かつた。しかし、木下尚江氏の小説は、單なる宣傳文學とは趣きを異にする。彼は深い人間愛から、社會生活の悲惨と魂の問題を觀照しようとした。『火の柱』ではまだ魂の髓まで食ひ込まなかつた尚江氏の筆は、『良人の自白』において魂の内側を描き出さうとした。そこに木下氏の勝利があり、プ

ロレタリア文學の行くべき道があつた。

今日のプロレタリア文學は、徒らに境遇と物質のみを描いて、魂の實在を忘れてしまふ。しかし主觀藝術としての小説は、魂の實在を忘れては何ものでもない。單なる宣傳小説に飽きが來るのはその爲である。尙江氏の『良人の自白』が永久性の價值を持つてゐるのは、主觀藝術としての要素を最大極量まで持つてゐるからである。『良人の自白』の主人公は日本において無産運動をせんとするインテリゲンチヤを永久に代表する。赤門出の銀時計、地方の素封家の入婿、戀人と正妻との三角關係、家族制度と個性主義への板挟み、これ等の渦卷はここ五十年や百年の間日本では解けさうにもない。尙江氏は、この解け難い日本の謎を主題として、『良人の自白』を書いたのであつた。

背景は、日本アルプスの秀でる信州の松本平、時は鐵道が漸く開通し始めた混沌期、都會には貧民が群がり、村には小作人が悩んでゐる時である。尙江氏は、その混沌たる社會を病理學者の如く丁寧に解剖せんと試みた。『良人の自白』は、だから二重の意味を持つてゐる。家族制度の良人として、家長政治の良人として、戀愛を虐殺せられた青年が、新しき時代を生み出し得ないで、封建制度の搾取生活を續けて行かなければならないといふ二つの悩みを持つてゐた。その二つの悩みが、恰もパノラマでも見てゐるかのやうに、最も美しく描かれてゐた。

實際、『良人の自白』が、無産者の諸問題を取扱つた手腕は敬服に價する。少しもわざとらし

くなく、貧乏な農村に囲まれた小さい都會に起りさうな社會苦のすべてを描き出してゐる作者の態度は、日露戰役以後稀に見る大きなコンポジションを我等の前に提供する。淫賣婦辨天お玉に對する主人公白井俊三の愛と同情は、ドストイェフスキーの小説にでも出て來さうな人道主義的の香があり、小作人野間與三郎一族の生活難を描いた處などは何ともいへない味がある。殊に、信州の自然と、土俗の方言を一致せしめて、農民の悶えを如實に描いてゐるところは、日本の農民文學の間に、尙江の名を永遠に記憶させる。しかしこれだけに止まるなら、『良人の自白』は單なるプロレタリア文學に終つてしまふのである。尙江氏の使命はもう少し高い處にあつた。封建家族と虐げられた農民や淫賣婦の間に挟まれて、あまり望ましくもない裁判事務に當つてゐる青年が、青春期にありがちな抑へ難い情熱に負けて行く本能を最も直截に描かねばならなかつた。本書の使命は全くここにある。作者は謹嚴な態度でこの問題を取扱つた。近頃の作者はこれを遊戯的に取扱ふ。單なる唯物史觀論者は、これを唯物論的に解剖する。しかし『良人の自白』の作者は、單なる唯物論者でもなければ、戀愛遊戯の讚美者でもない。彼は最も嚴肅な態度で、良心の崩れて行く姿を眺めた。そして最後に、眞の社會改造が、單なる外部的改造のみよらないで、内部的改造をも必要とする結論に達した。この結論は、『良人の自白』の著者自らを社會運動そのものより隔離したやうに私には考へられる。その後著者が書いた「飢渴」「乞食」「野人語」などを讀むと、これがよく窺はれる。

私は、十七八歳の頃から二十一二歳の頃まで、木下尚江氏の作品のほとんど總てを讀んだやうに記憶してゐる。哲學的であつたその頃の私には、思想的に多少満たされないものがあつたにしても、その感激と明るさと人間愛と、嚴肅な社會苦に對する題材の取扱ひ方に接して、いつも涙なしに尚江氏の作品を讀み切ることが出来なかつた。そして私が、木下尚江氏の最後の論文を讀んだのは、幸徳秋水の『キリスト抹殺論』に對する反駁論であつた。そして、この『キリスト抹殺論』に反對した理想主義者の木下尚江氏も、官憲の目には最も恐ろしい思想の持主として睨まれた。その爲に尚江氏の作品のほとんど全部は、焚書の刑に處せられた。そして、もうかれこれ十八九年も経ち、その頃夢想でもしなかつた大きな労働組合が日本各地に組織せられ、安部磯雄氏が代議士になり、堺枯川氏が東京市會の椅子に坐るやうになつた。そして多くのプロレタリア文學者も相當の地位を保つやうになつた。しかし私となつたのは、新紀元派として知られた理想主義者の作品である。尚江氏は、日本の社會主義史上に有名な赤旗事件の前後から、柏木派と呼ばれた唯物的社會主義者の一團と對立して、理想主義的一團を結成して來た。後者は、雑誌『新紀元』を發刊して、徳富蘆花や石川三四郎などと共に、理想主義的立場から新しき世界の創造を我等に指示した。そして『良人の自白』はその『新紀元』一派の代表的作品であると私は考へてゐる。今度新たに改訂版が出たのを見て、私は長く會はなかつた舊友に久振で會つたやうな氣がして嬉しくて堪らない。私は日本の社會文學の爲に此書の再現を心より喜ぶものである。

支那に於ける太平天國運動

洪秀全の夢

私は東洋に於けるキリストの使命を考へるにあつて、支那の太平天國運動とキリスト教との關係を少し檢べてみたい。

今から約百年前、支那に阿片戦争が起つた。支那はわれわれの知る如く、三つの河から成り立つてゐる。北から云つて、黄河、揚子江、珠江の三つで、珠江の流域が廣東の文明である。その珠江の附近にイギリスが根據を下して、印度の阿片を賣り出した。ところが、どうしても支那はイギリスの商賣人に負けて、つひに香港を分讓しなければならなくなつた。香港は河の近くにある島である。イギリスは極く最近、河に近い處を租借した。この附近は、東洋の宗教に關係のある處であり、ダルマが南方佛教を印度から運んで來たり、ポルトガル人がキリスト教を最初傳へた處である。フランシス・ザベリヨの墓もこの附近にある。太平天國運動もここから起つた。

太平天國の創始者は洪秀全といふ人であるが、この人は面白い因縁でキリスト教を知つた。元來が、廣東から少し離れた處にある小學校の先生であつた。或る時病んで發熱して夢を見た。天から使が來て、お前、上つて來いといはれて、天に吊り上げられ、天から地上を見せられた。すると、支那の政府の役人が賄賂をとつてゐることが判つた。その時、天子が「あの國をとつてしまへ、お前に太平天國をつくらしめる、お前は宇宙の神を信じて努力せよ。」といつた。それから數年経つた。その夢がいつ實現してくるかと思ひに思つてゐた。さうしてゐるうちに突然廣東に出て、バプテスト派の宣教師からリーフレットを貰つた。讀んでみると、それは、自分が數年前に夢で見た宗教と符合してゐる。これは疎かにしてはならないと思つた。そして、その話を弟に聞かせた。弟は自分の友達に話した。すると友達は、それは大變だ、神の命令通りにしなければならぬといふので、この三人が祕密に宗教運動を始めた。そこに實に支那人的な初心などがある。上帝を信ずる運動を、彼等三人はこつそり始めたのである。

その當時、馬賊の形をとつた、共產黨とも違ふが、一種の政府反對の運動が擴まつた。それにその友人が關係をつけた。が、洪秀全は自分の家にて、大きな運動に参加しなかつた。ところが、その匪賊の連中は必ずしも匪賊でありたくなく、どうしても民の政治を打破したい考へであつたから、友人を通して、是非洪秀全に來てくれといふ使が度々きた。が、洪秀全は行きたくなかつた。そして約一年経つてから、友人は成功して、えらい勢力を廣西省の方につくつた。この

最初の運動は廣西省から始まつたのである。洪秀全が行くや否や、この運動は熾烈な大運動に變つた。即ち、反政府熱と反歐主義と、そして今までの反傳統主義が一緒になつて、天からの宗教であるところのキリスト教ではあるが、十字架が全然ない、舊約聖書のキリスト運動が始まつたのである。そして、洪秀全はキリストを敬つてはゐるが、キリストと自分とは兄弟で、キリストは自分の兄さんであるといふ思想を持つやうになつた。

この面白い、十字架をぬかした宗教運動が大きな勢力を持ち、熾烈化したのは、ヨーロッパが革命化した眞最中であつた（共產黨宣言は一八四八年に發表された）。最初は三千人ほどの小さい團體であつたが、如何なる者も神を信ずればいいといつて、集まつてくるものに共產主義のやうな思想を宣傳した。この運動は、廣西省から始まつて、南京まで擴がり、そこを中心として太平天國といふ國家組織が生れたのである。この當時の報告書は、支那語で書かれたものより英語で書かれたものの方が非常に多い。宗教と社會生活とを一緒にするものは、これによつて非常に教へられる。

妥協した宗教運動

洪秀全は、北京にある支那政府と相對峙して二十五年間國を持つてゐた。彼は五つの國の王を作つた。自分がその中の一國の王となり、その外に四つの國の王をつくつて治めた。しかし、彼

は政治にうとい上に、南京に著いてからは、妙な神祕主義と、マホメット教にあるやうな妾制度に捉はれてしまつた。そして自分は神の子だといつて、南方の御殿の中に這入ると、決して人に顔を見せなかつた。さうなつてからはこの運動はだんだん衰へ始めて、曾國藩やゴルドン將軍などによつて四散され、太平天國は全くの夢と化してしまつた。だが、今なほ、この運動の勢力は相當支那にある。

彼等は『聖書』を讀まない。この運動は非聖書的であつて、彼等は主としてキリスト教の支那化にとめた。そして初めはキリスト教の運動であつたが、後には『禮記』、『易經』、『四書五經』の中にある天の思想と神とを一つにしようといふ考へを持つた。そこで、孔子の教へとキリストの教へとを全く調和さす運動がおこつた。そこに、パリサイ宗の如き信仰の階級制度が出来た。ゼズキットが階級を持つてゐるやうに、政治的階級が、信仰の階段と同じだと考へて、信仰によつて政治的發表をした。讀んでみると、馬鹿らしい事が書いてある。その出發點は例の夢である。この超自然的經驗は、彼を小學校の先生から二十五年間の王にした。ただ困つたことには、彼は十誡のキリスト教を信じてゐるので、モーゼの十誡を一々暗誦し、しかも強制的に信仰を命令する。一々参加の形式があつて、十誡を暗誦したり、お唱へをしたりする。日本でいふなら修養團の形式とよく似てゐて、政治だか宗教だか判らない。むしろ、説教より禮拜の部分が多く、詩や歌があるが、それも變なので、十字架がないから、犠牲獻身の歌がない。王に従ふことが一番い

いといふ、政治即ち宗教といふ妙な運動であつた。

従つて、個人の純潔は何處へ行つても見附からない。洪秀全自身は三十數人の妾を置いてゐたので、これがだんだん不平の原因になり、内部的に分裂しだし、彼の下にゐた四人の王も反對しだした。そして宗教教育といふものがなかつたので、次の時代には廢滅した。殊に、排他的だから、全部の宗教を排斥した。かういふ状態であつたから、支那政府は恐れをなした。そこへゴルドン將軍、曾國藩などが出てきたため、兵火に没したのである。

非倫理的な神祕主義の末路

かういふことは、われわれのやうな、宗教運動並に宗教的社會運動をする者にとつて非常な教訓になる。先づ第一に、非聖書の宗教運動が極端な形をとるといふこと、即ち歴史的發展を無視する宗教運動は感心しないといふことが判つた。

『聖書』に現れてゐる歴史的流れがあるのに、『聖書』を全然教へず、幻を受けたからその通りにしなければならぬといふやうな非宗教的神祕主義は脱線する。

アメリカで幻を受け、御神旗といふのを掲げて、私の處に來た人があつた。その御神旗を一針づつでも出来るだけ多くの女の手に縫つて貰つて歩いたといふのであるが、そのみを宗教の主体とすることは間違つてゐる。宗教が超自然的默示を持つことはあるが、ただ默示だけではいけ

ない。最近日本では、特別に神祕を高調する宗教もあるが、われわれはただ一つの幻のみで判断してはならない。(一)自然の中に、(二)藝術的なものの中に、(三)良心の中に、(四)歴史、即ち『聖書』の中に、(五)愛と(六)労作の中に、(七)人格生活の中に現れるものを見る必要がある。人間が目や耳や鼻や觸覺を通して、初めてここに友達があるに違ひないとたしかめる如く、默示を見る方法は幻一つによらない。神祕主義的に宗教を見ることはいいが、客觀的保證をうけなければほんとのものではない。あまりに主觀的に見ると間違ひをきたしやすい。グループ運動は、指導をうける時に間違ひがないといふ證據を與へなければならぬ。私がいふ七つの方面から見ても間違ひがないといふことが判つてからでない、幻は突飛なものになる。

一例を挙げれば、十數年前神戸に、Hといふ、神からの幻をうけたといふ人がゐたが、その豫言の力を相場の方面に使ひ出してからは、せつかくの豫言者が、たうとう駄目になつた。超自然的なものは、目で見ても手で觸つてみてもないことがあるから、七つの方面から見た上に、聖書に照らし合せて見て、間違ひがないといふことを確かめてから取りかからなければ、太平天國運動の如く失敗してしまふ。

キリスト教の日本化

最近、キリスト教の日本化を唱へる人がある。それは悪くはない。日本人としての宗教的體驗

が與へられるのは當りまへである。そこで考へなければならぬ。宇宙萬有の神がそれを通して考へられ、それがわれわれのものとなるならいいが、宇宙をぬかして神を日本化しようとなると間違ひがある。

一例を挙げれば、天の御中主命がエホバの神と同じだといひ出したことがあつた。死んだ石井十次氏の如きがやはりその思想を持つてゐた。徳川時代にもその傾向があつた。たとへば、日本に於ける農政學の泰斗佐藤信淵、或は平田篤胤の如きがさうであつた。渡邊崋山は耶蘇傳を書いてゐる。それは勿論幕府の忌憚にふれて、彼は自殺したが、それにしても三河の田原藩は一番進んでゐたと思ふ。彼等は報民倉といふ社會事業を始めた。その日本化したキリスト教が、佐藤信淵の古祇神道となり、それが最近の「神ながらの道」となつた。この「神ながらの道」は、キリスト教であるべきところが歪曲されてしまつて、妥協的な態度に出たことを私は悲しむものである。

天の御中主命はキリスト教から來たに違ひないと思ふが、宇宙のみいつからきた神が隠れてゐる。さうなるなら、キリストのあらはした十字架の信仰が隠れてしまふ。あまりに支那化したキリスト教の間違ひがそこにあつた。或る人々は、それは洪秀全が悪いのではなく、宣教師が悪いのだといふ。洪秀全のキリスト教はマホメット教と同じである。松村介石の「道」の如きは十字架のないキリスト教である。天理教では最近教師の數が倍になつたが、これは宇宙の神を日本化し

ようといふ焦慮からきてゐる。これらに對して、我々ははつきりした判断をとりたいものである。

階級化した信仰

支那の洪秀全の運動は、あまりに妥協した道であつたが、次の問題は信仰の階級化である。これは間違ひである。俗人と然らざるもの、牧師と然らざるものといふやうに、信仰に階段をつけることは誤りである。ルーテルが最も力を與へたものは信仰の民衆化であつた。キリストは最も信仰を民衆化した人であつた。キリストの教へは赤ん坊にも判るものであつた。洪秀全にはそれがなかつた。キリストは花嫁のきた時の花婿の態度のやうに明るい宗教を説いた。だが、支那のキリスト教の歪曲されたものは、支那化を本領としたために、儒教のやうになつてしまつた。儒教は信仰に階段をつけてゐる。苦難を喜んで、大乘的氣持で、神の胸にすぎるといふ點が少い。些細な點で信仰に區別をつける。これはほんとの意味のキリスト教ではない。ほんとのキリスト教は花婿の氣持である。つまり、中世紀のキリスト教の、フランスや、協同生活をした兄弟團のやうな民衆化したものでなく、法王のやうなものであつた。これは嘆かましい點である。十誠のキリスト教に止まつてゐて、まだ十字架がわからない。ごく幼稚な倫理宗教であつて、ほんとのキリスト教がわかかつてゐない。それだけ知つてゐれば、すぐに洗禮を授け、政府から命令をうけたものが司式をして、祝禱の代りに、神より遣はされた太平天國のつくり主萬歳といはせた。

終りは全然キリスト教でない。

十字架といふものを非常にいやがる時期がある。血なまぐさいとか、判らないとか云つて、十字架のわからない時がある。従つて聖靈がわからない。また聖靈のわからない人に十字架のわかる筈はない。聖靈と十字架とは裏表になつてゐる。無限の神の血がわからなければ、聖靈は判らない。従つて、宇宙全體の神の氣持になつて、宇宙のために働かうといふ氣持になれない。これがばらばらになつて、意識キリスト教が分解すると、教義キリスト教になる。すると、形式宗教、公式宗教になる。民衆は無意識だが、かうかうせよといつて引張る洪秀全の運動は無理矢理にキリスト教を強ひたのである。無理をして運動すると、さうなる。長くかかつて、ゆつくりやらうといふのでなければ駄目だ。愛が中心になり、團結本位で行きたいものである。公式によつて導いてはいけない。自分がキリスト教だから人にも『聖書』を読ますといふのでなく、愛の行動によつて解らせることが必要である。

今の神學者にもこの點が解らない。彼等のは公式キリスト教である。「げに信仰と希望と愛と、この三つのは限りなく残らん、而してそのうち最も大なるは愛なり」といふ意味が解つてゐない。

強制と純潔の無視

また彼等には強制があつた。支那では學問のある人は少く、廣東のやうな處でも、十九人に一人しか字の讀める人がないほどである。馮玉祥も何萬人かの部下を強制した。日本のキリスト教は今足ぶみしてゐるといはれてゐるが、それでも構はない。我々は決して無理をしてはならない。修養園では、伊勢神宮遙拜、皇室遙拜、國旗最敬禮をしてゐるが、三年前まではさういふことがなかつた。さういふことを無理強ひすると悪化しはせぬかと思ふ。洪秀全が太平天國をつくつて、家來に信仰を押しつけたことは間違つてゐる。殊に政治と宗教を混同したことは間違つてゐる。政治は秩序を中心とするものである。が、人間には秩序を破つて或る目的のために進まうといふ希望がある。だから無理をせず、凡ての人を尊敬してかからなければならぬ。

私は、キリスト運動が、強制を教へると、ほんとの宗教運動にならぬと思ふ。ドイツのキリスト教が生長しないのは國教だからで、そのために成功しないのだと私は思ふ。イギリスの國教も發達せず、寧ろスコットランドの方に眞のキリスト教徒が多い。ロシアがキリスト教を國教としてゐなかつたら、あれほどに反宗教運動は起らなかつたと思ふ。

次に考へなければならぬことは、個人の純潔を無視した點である。太平天國運動が反抗運動に始まり、形式的になり、遂に反革命運動のために亡びてしまつたが、洪秀全が三十何人かの妾を持つてゐたといふところに、支那としてはあたりまへかも知れないが、そこに誤謬がある。日本の共產運動がやはりさうである。個人の純潔を重んじないところに、共產運動失敗の原因がある。

五本の指を例にとつて考へても、連絡をとることが愛の運動であり、それを組織化してゆくのが組合運動である。コリント前書十二章で、われわれは組合運動の理論を教へられてゐる。それを忘つてゐるから失敗するのである。われわれは、個人の純潔と社會の純潔とを同じくらゐ重んじなければならぬ。太平天國運動が、あんなぶざまな終末を遂げたことは、今更ながら嘆かはいことである。

彼等はまた、非常に排他的であつた。自分の信するほかは全部を殺してしまつた。思想運動は思想運動にすればよいのに、自分に反對するものは皆殺しにした。それが既に敗北の原因であつた。キリスト教の愛の運動に誰が反對しよう。公式キリスト教には反對するが、愛には反對出来ない。そこに愛の勝利がある。キリスト運動は絶對的に愛の勝利だといふことを考へたい。日本の神の國運動は今年で終りだと考へられてゐるが、神の國運動は終つてゐるのではない。日本を全部キリストの愛によつて包まなければ、キリスト運動は止められない。ただ、太平天國のやうな突飛なやり方でやるか、十字架をはつきりさせてゆつくりやるかである。

十字架の運動をもう一度われわれは反省しよう。公式宗教の中にある人は、この際轉向しなければならぬ。十字架宗教は永遠の轉向を要求してゐる。神についての意識を受けてゐないなら、もう一度聖靈を受ける必要がある。まづわれわれは自らを反省しなければならぬ。「讀賣」の社

説欄に、クリスチャンの反省を促した文章が載つてゐたが、それだけわれわれクリスチャンは眠つてゐることになる。眠つてゐることは十字架を負つてゐないことを意味する。公式キリスト教ではなく、愛のキリスト教が村々に徹底しなければならぬ。そのためにわれわれは勵む必要がある。その道は遅いけれども必ず勝利を約束されてゐる。クリスチャンの一人一人が、十字架の道を歩むことを私は望んでやまない。

新天文学の方向

新しい天文学の立場からケムブリッジ大学の教授ジーンズ博士は、その著『我等をめぐる宇宙』の中で、宇宙は神によつて創造されたといふことを論じてゐる。彼は、凡ての恒星の年齢を研究しても、大體同一時刻から出發してゐると考へる。また恒星の運動の方向、距離、年齢、太陽系の構造等から考へても、どうしても天地宇宙は神が創つたものであることを、ジーンズ博士は主張してゐる。

不思議なのは、太陽系の諸遊星の間隔が、水素原子やその他の原子の中に軌道を持つ電子のそれに等しいことである。それは全く偶然ではない。そこに秩序整然たる約束のあることをわれわれは考へさせられる。殊に、地球の生れ出た時期と方法を考へても、ただぼんやり星雲から進化したのではない。不思議な運命があつて、幾十億年に一回しかない機會に地球は創出されたのだと、ジーンズ博士はいつてゐる。新しい科學が、もう一度『舊約聖書』の第一頁に還りつつあることを私は不思議に思ふ。

無人島の王者

「苦心三十年の結晶、癩の豫防注射愈々完成の途へ！」といふ標題で、過日新聞紙上に報ぜられた、国立癩療養所長光田健輔氏の偉業は、その信念の博大高邁の點に於いて、その研究心の不撓不屈な點に於いて、私が最も敬服するところ、私が世に絶賞推薦したいところである。

知る人も數多いことだらうが、この光田氏は前村山全生病院の院長であつた。その後、岡山縣邑久郡長島の国立癩療養所長に轉ぜられた。名をきいただけで世人は面を背ける、不幸な天刑病者に半生を捧げた光田氏の博愛心は、實に偉大な人類愛の求道者として、特筆大書さるべきものであるが、ここでは氏の絶大なる事業の一端を紹介するにとどめよう。

光田氏のゐられる岡山縣の長島といふ島は、周圍七里、實に風光明媚な瀬戸内海の一小島である。私の近著『東雲は瞬く』の中でも、氏の本名と共にその風景が描寫してあるが、氏がこの小島を發見するまでに拂つた苦心、更に發見後の苦心は並大抵のものではなかつた。

光田氏はどうにかして適當な癩療養地を發見せんものと、常々苦慮慘憤してゐられた。

ある時は、遠い小笠原の海まで探検にゆき、ある時は北海道、臺灣の涯まで探し求められた。そして遂に發見したのが、この長島である。

風光といひ位置といひ、申分のない島ではあるが、光田氏がこの島に癩病院を建設するといふ話をきくと、近海の住民の反對は凄じいものがあつた。氏は今までも幾度か、せつかく發見した島を、涙を吞んで放棄したことがあつた。

しかしこの度は斷乎として所信に邁進した。

氏が發見した當時の長島は、完全な無人島であつた。氏はそこへ千百人の患者を收容する計畫を立て、先づ十坪住宅を一户宛五百圓の見當で、多數建てることから著手した。

この住宅は、患者の財力によつて、無料又は有料（十五圓）で貸す計畫だつたが、著手匆々に資金の不足に悩んだ。

政府の補助金もあるにはあるが、これはあまりに小額である。そこで、氏は同志を募つて、資金集めに狂奔された。

この時にもよく氏の眞面目は發揮されたのであるが、理想家や信仰家の中には往々実行力や經濟觀念に乏しい人がある。いや、むしろそれが多過ぎて、立派な理想も空想に終ることが多い。しかるに、光田氏はさうでない。

氏は信念の人、研究の人であると同時に、實に稀なる事業經營家でもあつた。その事は、以後

設立された愛生園の經營などを見てもはつきり分るのであるが、實に敬服せざるを得ない。

氏が苦心の末設立したこの愛生園を少し紹介しよう。愛生園は、職業別の自治的部落制度によつて成り立つてゐる。

何しろ千餘人の患者だから、中には大工もあれば呉服屋もゐる。それらを職業別に統制し、園長自ら命令を出す。畠は勿論耕すし、牛馬の飼育、家屋の建築、すべて造作なく出来る制度になつてゐる。かういふ制度を作り、この統制がうまく行くやうになつたので、今度は、この部落内に氏は消費組合を作つて、労働切符を發行した。勿論、これは貨幣に附著した癩菌が、島の外に散布する危険を防ぐため、切符は銅で作られ、これが貨幣の代用をするのである。

研究人としての氏には、驚くべき問題が多々ある。さきには、アジエクトミー療法を患者に施して成功した。これは輸精管を切断する治療で、これによつて、患者は、病兒を生んで癩菌を次代へ傳へる憂ひがなく、自由に結婚しうることになつたのである。

最近の氏の偉大な研究は、癩ワクチンによる豫防注射の完成である。

最初、氏は、人間にはすべて癩に對する或る程度の抵抗力（即ち免疫性）があり、なほこの免疫性は、黴菌との適當な接觸によつて、一層強いものになるといふ醫學上の重大な事實を發見した。この發見はすでに遠い過去の事で、當時の學界を驚かせたものだが、爾來、三十年の長年月に亘つて、氏は懸命にこれが完成に没頭し盡した。いかなる學者が研究しても究めることの出来

なかつた癩ワクチンを、光田氏がこの度發見したのである。この大發見が人類にもたらす福音の偉大さは云ふに及ばないが、發見者光田氏はまだ博士にもならない。もとより氏は學位など眼中にないのであるが、氏の弟子の中から、もう三十人を超える醫博を出してゐるのは、ちよつと面白い話ではなからうか。

患者の施療に當る時の氏の慈愛、努力、眞摯、博愛は、正に神の姿である。氏が、全島民から慈父と仰がれてゐるのも、少しもふしぎな事ではない。

最後に、今一人私は世に推賞したい人がある。

それは光田氏の令閨である。令閨は前臺灣總督上山滿之進氏の令妹であるが、光田氏の偉業の半ばは、令閨の力に負ふといつても過言ではあるまい。

人類の悩みを悩みとし、全生涯を天刑病者の柱として投げ出された光田氏夫妻ほどの人は、滅多に見ることが出来まい。

海を故郷として

海はすべての動物の故郷である。ハーバード大学の教授カノン博士は、人類をも水棲動物の中に數へてゐる。人體は要するに八十パーセントまで水である。人間は水を盛つた水ぶくろに過ぎず、血管を流れるものは、鹽水に近いものである。かう考へると、海は生物の故郷であるといつてもよい。

地球の表面に、陸地の二倍の面積をもつものは海である。海の廣いことを歎いてはならない。かうしなければ地球の表面に生命が保てないのである。生命を保つためには、陸地を廣くしても、その上に水をふり注がせる必要がある。そんなら、海を廣くして、陸地をやや乾いた狭いところに造つたがよいではないか。結局、人類は海の世話にならなければ、一日も生命を保つことは出來ないのだ。

さうだ、生物の故郷は海であり、人間の生活も海に依存してゐるのだ。

私は、スイツランドやトランスパールの人々が、ひどく咽喉を腫らしてゐるのを見たことがあ

る。理由を尋ねると、海草を食べないために、咽喉が腫れるのだといふ。人類は海草に近いところにその出生地を持つてゐるのに違ひない。結局、海は吾々の故郷なのだ。

地中海を征服したものは、古代世界の覇權を握つた。大西洋の覇權を握つたものは、十九世紀を支配した。そして、太平洋を支配するものは、二十一世紀を支配するであらう。

何故に、日本の領土の狭いことをかこつのだ。陸地に境界線はあつても、海に境界線はないではないか。滿洲國の發展を萬里の長城が喰ひ止めても、太平洋上には萬里の長城は見當らない。海に金鑛のないことをかこち、海に畠の出來ないことを心配する必要はない。鯨の牧場を夢見、鮪、かじきかじきの養殖を思ふものは、狭い陸地の養豚事業や、養蠶業の衰退を少しも悲しまない。海には象の數十倍大きい鯨が跳ねてゐるではないか。

海に行かう！ 海に行かう！ 鯨のどてッ腹にくひついて、太平洋を北から南に馳けめぐらうではないか。

暴風がこはい？ 赤道の南北、各十度の間は無風帯ではないか。そして北太平洋の暴風の進路は陸地に沿うて進行し、アリューシャン列島に、そしてまたアラスカに北進することを知つてゐる私は、太平洋の眞中に、却つてわれわれの安息所のあることを知る。

何、波がこはい？ 波は表面にあるものであつて、水面下四十尺のところには波はない筈だ。魚さへ住んでゐるものを、人間が住めないといふ筈はないではないか。かじきかじきや鮪のやうな動物

でさへ、波に對する適應性を知つてゐるのに、人間が波に適應し得ないなどは不思議である。新しい海洋飛行場は、圓錐形の棒の上に平面を設けようとしてゐる。圓錐形の棒は、波動に對して安定性を持つてゐると考へられてゐるからである。

波が恐ろしければ、圓錐形の棒を船にして海に浮ぶがよい。たとへそんな方法をとらなくとも、海にもぐる工夫を知ればよい。その時暴風はわれわれの頭上を過ぎ去つて行くではないか。狭い窮屈な陸地を離れて、鮫や鱈の如く海上に勇躍するがよい。

ころ、鮫の勇ましい姿を見よ！ 鰭をはり、おびれを振つて、靜かに暖流に添うて遊弋する勇姿を見よ！ 幾萬の鰹はその後に従ひ、幾百の鷗は彼の偉容に辟易してゐるではないか。ころ、鮫が海に安息所を發見するなら、何故日本男子に太平洋が安息所であり得ないのだ。

伊豫向灘の漁夫は、うたせ船で日本からメキシコまでも平氣で往復する。五噸の帆掛船で、一水夫は太平洋を無造作に横切つて行くではないか。海は故郷だ。われわれの祖先はそこから來たのだ。

太平洋上に黒潮がある。黒潮は日本民族の搖籃だ。黒潮を忘れることは日本民族を忘れることに等しい。黒潮こそ日本民族の生命線であり、民族始源の發祥地である。

黒潮を忘れるな、海洋の子等よ！ 薰り高き南風に、黒潮が何を日本に運ぶかを知らねばならぬ。黒潮のわくところ、幾億萬の鰻が頭を並べて日本の島々に群がつて來る。大國生命は鰻の頭を踏んで瑞穂國に涉つて來たといふが、日本近海に鰻のゐない日はあつても、鰻の群のゐない日はない。鰻の集まるところに鯨が集まり、鯨の集まるところに限りなき魚群を見る。

日本人よ！ 米が食へないことを悲しむな。何時の日か鯨の乳を搾つて飲む時の來るを楽しむがよい。

ああ、私はもう蝸牛角上の争ひに飽いた。私は靜かに海に逃れて鯨の乳を吸ひたい。海ならばこそ巨大な鯨ものびのびと生活が出来るのだ。巨大な民族は、陸上にのみ生活は出来ない。

さうだ、海だ！ 海だ！ 海にのみわれわれは安息所を發見し、海にのみわれわれの故郷を求めることが出来る。海はわれわれを待つてゐる。日本の青年よ、海に歸らうではないか。

もう一度、このはなさくや、姫の故郷に歸らう。彼女の故郷は南の海にあつた。ああ、海だ、海だ！

神と永遠への思慕

ピラミッドの窓

ピラミッドの北に面した斜面に一つの窓がある。その窓は永久に變らぬ北斗星に向つて開いてゐる。つまり、屍になつたミイラが、永久に變らぬ北極光を見てゐたいといふ意味から、ミイラの爲に特にその窓を開いたのである。人間は永遠を離れては安住の地を發見出來ない。それを現代人は、ただ物質と性慾の、ごく變り易いものに變へてしまはうとしてゐる。殊に、永遠或ひは無限の神について考へることは、馬鹿らしい愚かな事であるとして、それを侮辱する人がある。けれどその人でも、最後の瞬間が來ると急に目醒める。

昭和四年の暮、私が、神戸で宗教講演をして出て來ると、一人の紳士が追つかけて來て、

「賀川さん、君に聞いて貰ひたいことがある。外でもないが、高島素之君のことを知つてゐるか。あの高島は死ぬ時一週間くらゐ續けて、涙を流して『聖書』を読み、大聲で讚美歌を歌つた。

彼は死ぬ時になつて急に神が戀しくなつたのだ。」

と話してくれた。われわれも、高島氏が日本に於けるマルクス學者の第一人者であつたことを知つてゐる。彼は、マルクスの資本論が今日のやうに讀まれない時から、『資本論』や『唯物史觀』を翻譯した。その人が永遠に就いて考へる前に、マルクスの『唯物史觀』を讀めといはずに、自ら、永年棄ててあつた『聖書』を開き、忘れて歌はなかつた讚美歌を、涙を流して歌つたといふ。これは一體何を意味してゐるだらうか。

福田徳三博士は、たしか大正九年一月の雑誌『解放』に宗教は無用だといふ論文を書いたことがあつた。たしか題は「神よりの解放」だつたと記憶してゐる。

その博士も、死の床で、マタイ傳第五章を讀んでくれと云つて、弟子が讀んでゐるうちに、安らかにこの世を去られたといふことである。人も知るやうに、福田博士は、日本ばかりでなく、フランス、獨逸に於ける經濟學界の名譽會員で、世界的の學者だつた。その人が、宗教に對して否定的の氣持を持つてゐるときもあつたが、永遠に就いて考へなければならぬといふ瞬間が來ると、やはりマタイ傳第五章に歸つたのである。

永遠は果して蹂躪し得るか？

ロシアは昭和四年五月から十二月迄にキリスト教會を五百四十も破壊した。宗教は阿片だ、そ

んな馬鹿なものを信ずるのは迷信だ、といふ態度をとつてゐる。しかし、果してそれが、永遠を考へるものにとつて、いくら効目があつたらうか。教會組織がなくても、永遠への思慕は、鹿が谿川の水を喘ぎ慕ふ如くに、われわれの本性であるから、破壊出来るものではない。いくらわれわれが麥の芽を踏み躪つても、眞直ぐに下から上に出て来る。踏みつけるほど、一本の莖であるものが、五つになり、十になり、二十になつて上に伸びる。永遠への思慕、それは恰も植物の莖が太陽に向つて伸び上る如く、人間の本能である。われわれは物質で満足し得ることは絶対にない。

十九世紀に於いて、永遠と神に屬^つく思想を蹂躪しようとした社會科學者が相當にあつた。英國のロバート・オーエン、フランスのオーグスト・コント等がさうであつて、彼等は世界の注目をひいた。オーグスト・コントの弟子は今日マルクスとなり、レニンとなり、クロポトキンとなつて宗教に反対してゐるが、オーグスト・コント自身は、最初こそ宗教に反対してゐたが、晩年になつて、宗教に反対出来ない事を發見した。而も後にはカトリックの形式を模倣した、宗教を作つて禮拜した彼はこれを人道教といつた。しかしコントの系統を繼いだものが今日の無神論的社會科學者となつた。コント自らが途中で悔い改めても、その後を繼いだ人たちは、悔い改めぬ前のコントの思想を繼承した。英國もさうである。ロバート・オーエンが一八二〇年代から社會主義の運動をした。彼は理窟一點張り、唯理論一點張りで通した。が、その運動は成功しなかつた。

彼が宗教反對の演説會を開くと、五千人、一萬人の人が、彼の演説を聞きに來た。だからオーエンは宗教反對の運動が必ず成功すると思つてゐた。そしてこの有様では、六ヶ月そこいらで、宗教も無用になり、機械文明のみが英國を蔽つてしまふと思つてゐた。しかし、それは瞬く間に敗北に歸した。オーエンは年老いてから、自分の宗教反對は間違つてゐた、自分の魂の中にはどうしても神が必要であると云つて、もう一度方向轉換して神に歸つた。さうして彼が貧民階級に奉仕しようとした協同組合運動は生長した。

彼の行つた社會運動は英國に残つてゐるが、英國で彼が考へた無神論、宗教無用論は、彼自らが悔い改めたことによつて、その後を繼ぐものが多くは出なかつた。

婦人參政權の先驅者パンカースト女史は、その出發點に於いては宗教に反対した。あの賢い女が宗教の無用を説いた。が、彼女が死ぬ時は有神論者になつてゐた。かういふ例は幾らもある。その最も著しい者は、パピニーであつた。パピニーはイタリアの無政府主義者であつた。彼はあらゆる努力を拂つて神と宗教に反対し、寺院に反対した。だが、社會哲學を研究し、社會運動に就いて内省をしてゐるうちに、神を中心にしなない、そして愛の社會性に就いて考へない運動は、人類を祝福しないことを知つて、斷然「山上の垂訓」にたち歸つた。

永遠性なき偶像の退却

神といつても永遠性を持たない神がある。日本にも神と呼ばれるものが相當にあるから、神にはつきりした意識をつける必要がある。で、私は永遠への思慕といひたい。ところが、近代の人はその永遠を破壊しようとする。「そんな馬鹿らしいことはない。われわれは嘘のやうな話ばかりきたくない、われわれは有限で結構だ。いや、有限なんかいはなくても、この瞬間でいい。瞬間瞬間に、本能を満足させればいい」といふ人がある。しかし、一體いつの時代に、さうした反宗教の運動が成功したか。人間は絶対に物質だけでは満足出来ない。歴史を見ても、それが成功したためしがなく、地理的に云つても、あらゆる民族が宗教を持つてゐる。何故ならば、宗教は人間が発明したものでなく、われわれの生命は人間の発明によつて出来たものではない。宗教は生命とともに生えたものである。われわれは生きてゐる間は、永久に無限への憧憬、神への憧れを持つてゐる。

曾て進化論の創始者チャールズ・ダーウキンが、宗教を持たない民族があることを報告した。ダーウキンはオックスフォードの二年生をやめて、ビーグルといふ海軍探検隊の船に乗り、南アフリカのテル・デル・フューゴ島に行つた。そこには動物と人間の間子あひのこに近い種族がゐた。彼は尾を持つてゐた。それで彼等には恐らく宗教がないだらうと彼は探検記の中に書いてゐる。彼のそのやうに或る民族に宗教があつて、或る民族にはないと思つてゐた。しかし何ぞ知らん、後に宣教師が行つてみると、最も進んだ形の、目に見えない宗教を彼等が信じてゐたことがわかつた。

この事を知つたチャールズ・ダーウキンは、宣教師に二百圓の献金をして、謝罪状を書いたといふことである。

宗教は、人間の生命とともに、われわれの生活に生えてゐるものである。ロシアが五百四十の教會堂をぶち壊しても、そんな事でロシア全體の生命が潰せる譯がない。宗教は生えて来る。宗教が暴壓されると迷信が出て来る。神を否定しても宗教はある。一例を挙げれば、佛教の如きは、出發點に於いて、珍しく神を持たなかつた。佛法だから、非人格的な法を認めるが、宇宙に神のあることを前提としなかつた。それでも日本にきた或る不滅性を持つ宗教は永遠に残る。人格的な神を信じないまでも、無限へと不滅に對する憧れは否定出来ない。だから、神を否定しても、不滅に就いての宗教は残る。皮肉にも、或る人は、ロシアのソヴィエットは佛教に似てゐる、神は認めないが信仰を持つてゐる、あれは唯物的マホメット教だといつた。最近ロシアではレニンが御神體のやうに祀られてゐる。私はレニンが宗教化されることを恐れるものであるが、生命が絶滅しない間は宗教は永久に残る。永遠への憧憬——單に物質に満足せず、より自由になり、より自在性を持ちたいといふ憧憬、宗教のあらゆる變化に接し靈に接したいといふ氣持は、人間の生命がある間否定出来ない。が、それを忘れて性慾と物質に走る人がある。或る人は物質が不滅だと思ふ。しかし、今日の科學では、物質が不滅でないことが判つて來た。

物質の崩壊

凡ての物質は電気で出来てゐるから、忽ち崩壊する。われわれはこの空間を占める物の幅は絶對だと思ふが、物のもつ幅は絶對ではない。それは速力をつけると收縮する。だから物は決して絶對ではない。それを間違へて、唯物論だけで人を導かうとするのは、大きな錯覺を與へるものである。地震がない範囲内に於いては安心してゐるが、われわれは天文学によつて地球の運行が一秒間に十九哩走つてゐることを知つてゐる。そんな事は嘘だらうと聞き直すほど、われわれは錯覺を持つてゐる。宇宙は大きく、宇宙の目的は大きいから、われわれのやうなものには理解出来ない。永遠といつても、その永遠は見當がつかない。

假に、人間をこの大宇宙に比べるなら、人間を蟻と比べることが出来る。人間の身體を蟻が這ひ上る場合に、蟻は頭まで来て、口を噴火口と見、眼を結氷した池と見、髪の毛の中に迷ひ込んで密林帯に來たと、云ふであらう。この蟻は唯物論者である。蟻は詩や小説を知らない。蟻は物のみを見るだらう。われわれが宇宙を見るのもこれに似てゐて、あまり大きいから見當がつかない。その奥に不滅の法があり、不滅の力があり、不滅の目的があることに氣附かない。蟻が人間を理解しないと同様に、われわれは近眼的である。しかしわれわれは物だけでは満足出来ない。

ギリシヤ宗教推移の跡

今日の唯物論は、紀元前四世紀のデモクリトスの哲學を見るとわかるが、その當時の唯物論とあまり變つてゐない。古代ギリシヤには無限の神をキリストがはつきり地上に示すまで、日本の神道とよく似た宗教があつた。そして永遠への生命を發見するまで、ギリシヤは宗教から宗教へ四度も變つた。ゼウスの神、アポロの神、オルヒアス、デオニソスといふ風に變つたが、最後にはキリストへの信仰に歸つた。永遠の愛、永遠の救ひ、永遠の人格を保證する永遠の宗教が、キリストによつて示された時に、古代ギリシヤの宗教的動搖は止つた。その後ギリシヤは十九世紀間變つてゐない。キリストを發見するまで、ソクラテスの運動、デモクリトスの思想を持つてゐたのである。これは今日考へると、驚くべきである。けれどデモクリトスでは人間の良心が満足しない。良心が人間の失敗を憶えてゐる。幾ら忘れようとしても、記憶が承知しない。そこで、外部を見てゐた物力が内側に向いてきた。即ち、聖人ソクラテスの良心運動が起つた。しかし良心運動だけでも満足出来ない。既に作つた罪や失敗や姦通は、それを償ふ方法がない。そこでゼウスやアポロの信仰を持つたが、それも駄目だつた。今度はオルフィアスの信仰に來て、山上で夜通し祈つたけれど、間に合はなかつた。それからデオニソスの信仰に入つて、赤ん坊のやうに生れ變りたい氣持になつたが、生れ變りたいばかりでは駄目だつた。再生宗教を教へられる

まで、彼等は満足しなかつた。

そこへキリストの尊い無限愛の運動が起つた。人間の中に無限が覗き込んだ爲に、ギリシヤ人は、ソクラテスやデモクリトスを忘れて、キリストに全部を捧げた。近代になつて或る人は、ギリシヤ主義の勝利、ヘブライ主義の敗北を説くが、人間の實驗室は歴史である。人類の試験管は歴史である。歴史に於いては、デモクリトス、ソクラテスの哲學も成功しなかつた。神と永遠がわれわれの心に覗き込んで来るまでは、人間の煩悶は止らなかつた。もし人間が神を蹴飛ばすなら、二十年や三十年は辛抱もしようが、長い間は辛抱出来ない。必ず煩悶が起つて来る。

神と永遠の潜伏

ローマでは、約二十人の王が、神の愛を地上に現さうといふ運動に反対して、キリスト教信者を獅子に食はせたり、松明のやうに燃やしたり、十字架にかけたり、酷い暴虐をして、三百年間迫害を繼續した。だが、武力や暴力では絶対の神は蹂躪出来なかつた。彼等は地下に、カタクムと云つて、四百哩のトンネルを掘り、神に憧れて死んだ約四百萬の屍を埋めた。彼等は教會も持たず、禮拜すべき場所もなかつたので、その地下の墓場に行つて、もぐらもちのやうに屍の傍で祈つたのであつた。ピラミッドの窓は北斗星に向つて開いてゐたが、彼等はカタクムの中で祈り續けた。そして、三二三年に、キリスト教の嚴禁が雪の如くに解かれ、クリスチアンの解放が叫

ばれた。もしもロシアが三百年も迫害を續ければ、クリスチアンは三百年間残るわけである。徳川幕府は二百五十年間クリスチアンを迫害したが、明治二年に禁制が解かれたとき、二萬五千人のクリスチアンが忽ち長崎に現れた。われわれは二百五十年間の潜勢力を持つてゐた。だから、神と永遠への思慕は生命とともに生えてゐると私はいふ。單なる唯物史觀ではない。物で生命は出来てゐない。われわれは、神への憧れを持たされて生れたのである。

赤ん坊は眼を持つて生れた。そして赤ん坊の眼は光の方へ向く。われわれの靈魂は神を見なければならぬやうに作られてゐる。それを壓迫するから迷信が起り、種々雑多な形式が現れて来る。しかしわれわれの靈魂は承知しない。歴史を見ても、純粹な良心宗教の續いたときはない。『舊約聖書』から『新約聖書』への二千年の歴史を見ても、ユダヤ人で眞の宗教を信じてゐた者は、僅かであつた。殊にイスラエル民族が三百年間、一つの獨立國を建ててゐた間、眞剣に宗教を信じてゐたのは四人か五人で、その他は、バールやアシタロテの神を祀つて、無限の宗教はいつも負けてゐた。バールやアシタロテは一つの宗教的迷信であつた。バールはパンを意味し、アシタロテは色慾を意味してゐる。だから禮拜のときは、いつも無限の神の反対側に立つてゐた。今でもこの三つが眞の宗教に反対してゐる。ロシアの唯物主義はバールの宗教を意味し、アメリカのエロチシズムはアシタロテ禮拜と等しい。そしてこのパンと色慾の禮拜は、いつも靈魂の無限への憧れを蹂躪する。だが、われわれは神を發見するまでそれに満足出来ない。

不變の道德と不變の良心

或る人は、良心は變る、不滅ではないといふ。そして道德可變論を説く。時によると、道德も不便だ、人を殺すのは當りまへだと主張する。フランスのパーフは、資本家が労働者から盗み取るなら、労働者も泥棒する権利があるといつた。神戸でストライキがあつた時、Iといふ青年が私の處に來た。そしていふには「われわれは負けた。實に慘めだ。きやつ等は搾取を續けてゐる。きやつ等が掠奪する権利があるならわれわれも盗む権利がある。」といつた。それから労働組合の神戸聯合會では帽子がなくなる、書物がなくなる、オーヴァがなくなるといふ譯で、盗む権利が流行した。そしてあまりみんなが盗むので、しまひに誰も寄りつかなくなつた。われわれが可變道德を考へると、結局そこまで墮ちるのである。われわれは變化の中に變らぬものがあることを見なければならぬ。本を落すことは上から下に變ることであるが、引力の法則は變らない。人間の道德も變るものと變らないものとある。變らないものは生命である。生命を尊重しない道德はない。戦争に行くと討死が尊重されるではないかと人はいふかも知れない。しかし、個人は死んでも民族の生命を尊重する。民族のために個人の生命を輕んずるだけのことである。また嘘をいふ場合もある。妻が身投げしようとする時には、嘘をいつても止める。その場合にも生命の尊重がある。

また人を愛して行かうといふ場合にも、變つて行くものの中に變らぬものがある。泥坊でも自分の子供は可愛い。愛は時と場所によつて違ふ。しかし愛は無くなることはない。妻が可愛くなければ、娼妓が可愛い。何處かに愛は現れてゐる。生蕃は、姦通するな、嘘をつくな、盗むな、貪るな、殺すなといふ約束を守つてゐる。だが、日本人は毎年何萬人かが姦通で訴へられてゐる。日本人が生蕃の間に行つてから姦通があるやうになつたといふことである。臺灣の生蕃には泥坊が殆んどなかつた。日本人が行つてから泥坊が始まつたといふことである。彼等の間では畑の傍に小舎を作つて穀物を入れて置くが、盗む人はゐなかつたといはれてゐる。生蕃は、十以上の數を知らない。二十歳くらゐの人に、年は幾つかと尋ねると、十といふ。四十くらゐの人も十と答へる。彼等には十が一番上である。彼等には十以上の數はないのである。タイヤール人を初め、八種類くらゐの野蠻人の大部分が、殺すな、姦通するな、博突うつな、盗むな、嘘をつくなといふことを完全に守つてゐる。殺すなといふことは生命の尊重を意味し、姦通するなは、生命の生長に混亂を起さぬこと、賭博するなは、人の財産を亂さぬこと、盗むなは、生命に必要な衣食住を荒さぬこと、嘘をつくなは、眞理を亂さぬことを意味する。(一)生命、(二)眞理、(三)愛に關しては、人間は大體に於いて變つて行かない。變るのは生長する時である。野蠻人と文明人との違ひはそこにある。可變は生長する爲の可變である。生命と眞理と愛の生長の軸に於いては變らない。だから、われわれは良心は變るといふことにだまされてはならない。「なかに、一夫

一婦なんて變へたらいい。好きな女があれば愛してもいい。友愛結婚も自由結婚もいいぢやないか。キリスト教のやうにいつて居れば窮屈で仕方がない。」といふ人があるが、これは間違つてゐる。

私が、キリスト・イエスの宗教を信する理由は、全く神と永遠に屬ける思想が不變であるためである。この思想がヨーロッパに入つて以來、ヨーロッパの宗教思想は變つてゐない。男女の愛に於いては變つてゐない。ここで、何故私が愛の宗教、キリストの信仰に入つたかを告白しなければならぬ。

私の懺悔

私は何故日本の宗教があるのに西洋から來た宗教を信じたか？ 私の父は阿波の人であつた。私の家は阿波の板野郡の十九ヶ村の大庄屋だつた。父の正妻には子がなかつた。私は妾の子で、私の母は藝者だつた。私は妾から貰はれて來て、父の正妻の子になつた。戸籍の表面はきれいで、私は公民権を持つてゐるが、私は小さい時から日陰者として育つた。私は母の事を聞かされると胸の中が疼いた。私は義理の母から、お前の母は藝者だよといはれた。

人間は不思議なもので、自分の子供に自分の長所も短所も現れる。不思議に、人間は子、孫、曾孫の系統に對して、魂のトンネルを掘つてゐる。自分の魂と子の魂に聯絡がある。私は母の系

圖を知らない。私はさういふ家庭に育つたから、純潔に就いては特別に感じた。私には、父の放蕩と母の藝者だつたことが遺傳してゐるだらう。だから自分もその道に行くだらうと思つてゐた。十一歳の時、禪宗の寺に毎日通はされて、『論語』と『孟子』の教へを聞かされた。そして聖人になれ、君子になれと教へられた。が、私の血の中には君子の血筋はない。これ等の書物は實に厭な感じを私に與へた。家は淋しいし、藏の中には文化文政時代の淫本が澤山ある。さういふ家庭にあつて、神聖な教育を受けなかつた。私には『論語』と『孟子』の教へは役に立たなかつた。これは駄目だと思つた。私の兄は十六の時から妾狂ひを始めた。兄は七人の妾を持つて多淫な生活をしてゐた。私は中學へ行くのに藝者の家から通つた。兄は放蕩だし、私も藝者の家から學校へ行つてゐたくらゐるだから、私もまた沈没するだらうと思つてゐた。藝者の家には佛壇もあり、神棚もあつて、朝々鹽をまき、盆には美しく飾るが、さういふことは別に魂に關係がなかつた。私の魂はいつも泣いてゐた。孔子は何千年か前に出たが、私には關係がないと思つてゐた。その時に『聖書』が私の手に入つた。「凡て勞する者、重荷を負ふ者われに來れ、われ汝らを休ません」とか、「健かなる者は醫者を要せず、ただ病める者これを要す」とか記されてゐた。私は醫者の救を要求してゐた。キリストは罪人の醫者だつた。神の力をもつて魂の中に傷いた者を癒してくれた。「女を見て心の中に色情を起すものは姦通したのと同じだ」と『聖書』に書かれてゐた。自分も罪人だ、どうしたらけがれざる者になれるかと考へた。日本の學校生活をどうしたら

きよめ得るか、今も私はそれを考へてゐる。

私に英語を勉強することを勧めた兄は、耶蘇教だけにはなるなよと注意した。そして兄はたうとう藝者を家に入れた。イブセンの『幽霊』といふ戯曲を讀むと、父が妻を棄て、女中と一緒になつた。息子もさういふ道を辿つて、罪惡が幽霊のやうになつて呪つてゐることが書いてあるが、私も、罪惡の幽霊が自分を惱ましてゐる、いつになつたら私は救はれるかと思つてゐた。

ところが、キリストの宗教は、何と高く、また廣いことだらう。私は『聖書』を讀んで、さうだ、野の百合のやうに天真爛漫にかへらなければならぬと思つた。私を生かしてくれてゐる生命の神を私は信じ、草木の花を生かし給ふ神を私は信じようと決心した。それから毎晩私は床の中に這入つてお祈りした。「私にきよい生活を送らして下さい。父や兄貴の道を踏ませないやうにして下さい。どうか日本を娼妓のない國にして下さい」と祈つた。今でもその時蒲團の中でこの祈り祈つた祈りを私は忘れてはゐない。そしてこの祈が私の一生を支配してゐる。日本の多くの青年にこれと同じ煩悶があるのを私は知つてゐる。『聖書』に出てゐるこの純潔さを忘れて何の人間であらう！ 私はこの宗教を一時だつて忘れることは出来ない。私がキリスト教になつたといへば家を追ひ出されるから、私は黙つて蒲團の中でお祈を續けた。明治三十七年一月三十一日に、私は西洋人の先生の處にキリスト教の本を借りに行つた。その先生は「賀川さん、あなた神があると思ひますか？」ときいた。「はい、あると思ひます。」「祈つてゐますか？」「祈つてゐ

ます。」「何處で祈つてゐますか？」「蒲團の中で祈つてゐます。」「ではあなたはキリストを信じてゐるんですね。」「はい、信じてゐます。」「では洗禮を受けませんか？」「洗禮を受けると家を追ひ出されます。」「卑怯ですね。」「卑怯？ それなら私は洗禮を受けます。」それから私は洗禮を受けた。父も祖父も歴代放蕩であつた私の家は、四代の間妾の子が家を繼いだが、私の代になつて初めて消えたのである。これはキリスト・イエスの力である。無限の神を地上に引き下して、神のやうに地上を歩いた、けがれないイエス・キリストの血によつて守られたのである。

物質革命と精神革命

いくら物質だけで富んでも、物質の富ほどつまらないものはない。百萬圓持つてゐる金持でも首くくつて死ぬ。アメリカあたり百萬長者の場合でも、富は一朝にして亡びる。そして性に對する満足はない。また性が満足しても良心が満足しない。われわれは生命につき、愛につき、真理について思想の安定が出来るまで魂は安定しない。精神の奥から解放されなければ、日本の改造運動は出来ない。

ローマは革命を四度した。グラッカスの革命、スピリアン、スラ・マリヤスの革命があつた。だが、暴力革命をやらす、精神革命をやつたキリストは、良心の運動として千九百年間不滅の真理を示してゐる。良心に關係しない外なるものは變る。良心の中に不滅なる神を彫り附けたもの

だけが勝利を得る。獨逸のコーエンがいつた。いろんな社會主義があり、社會運動もあらうが、神を中心としないものは駄目だと。あらゆる性質の運動も、絶對無限をあらはす神がなければ駄目である。何々といふ人間のみを基礎にする修養團も駄目である。不滅なるものは絶對無限の神を基礎にしたものでなければならぬ。

科學としての宗教

宗教は却つて退歩する傾向があるといふ人があるが、それは間違つてゐる。

人間に關する學問でも進むものと遅れるものとある。電氣學が一番早く進歩して居り、土に關する學問はまだ七十年くらゐしか経つてゐない。宗教の學問は最近二三十年のことで、まだよく發達しない。しかし宗教の力は絶大である。それがわれわれに關係があることを學問の上に發揮するには、大分かかるが、それは電氣の學問ほど大事だといふ人がある。電氣の發明、テレヴィジョンの發明も不思議だが、人間の腦髓の仕掛の方がまだ不思議である。人が物をいへば耳に聞こえる。これほど不思議な事はない。この力を更に進める必要がある。この精神力を人間は十分に應用してゐない。われわれは或る處で止まつてゐる。昔は、雷が鳴れば桑原桑原といつてゐたのであるが、今は雷を應用してわれわれの部屋に持つて來てゐる。それなのに、人間の精神力を馬鹿にする人がゐる。「生命？ 生命なんてものは、水素と窒素と、硫黄と何々で出來てゐるもの

だ」といつてしまふ。しかし進めば進むほど、人間の精神力を九十二の原素に還元するのみでなく、宇宙に於ける精神力を活躍させ、テレヴィジョン以上の精神力をもつ時が來るであらう。その時こそ良心宗教が確立するであらう。ロシアも支那も日本も貧乏人を愛するために、良心を破壊する必要がなくなるであらう。それで、われわれはもう少し宇宙全體に溢れてゐる宇宙精神力の力を握りたいと思ふあこがれ、それに就いて冥想し、その力を認めるやうに力めなければならぬ。

世界苦に打ち勝つ力

宗教といふものが解らぬ人があつても、宗教の事實は否定出來ない。その力は認め得る。宗教は他の凡てでなくとも、少くとも一つの力である。それは物を作り出す力、救はんとする力、惡に打ち勝つ力である。獨逸のルドルフ・オイケンは、「哲學的に見て何故世界に惡があるか、私はその理由を知らない。然し惡に勝つ力、それが宗教であることを知つてゐる」と云つた。

福岡にある九州大學の病院に内山君といふ人がゐる。内山君は天然痘にかかつてから、消毒藥の風呂の中に、かれこれ十四年間浸つて、龜のやうな生活を送つてゐる。彼はその生活があまり苦しいので、舌を噛みきつて死なうと思つたことが屢々あつた。數年前にキリスト教の傳道師から『聖書』を貰つて、ロマ書五章三節を讀んでから、神の愛に臨んでどんな患難も恐ろしくなくなつた。それからその人は全く生れ變り、消毒藥の中で龜のやうな生活をしてゐるが、嬉しくて

たまらないといつてゐる。その頃二十錢の『聖書』を買つて天井から絲で吊り下げ、手を拭いては『聖書』を読んだ。が、すぐぼろぼろになる。われわれから見れば呪はしい生活であるが、その劇薬に浸つてゐる人は却つて喜んでゐて、見舞ひに行く人を逆に慰めた。

神の愛を呪ふ人があり、神の愛を嘘だといふ人があると、手を叩いて喜ぶ人がある。しかし内山君は、神は愛だ、自分は呼吸してゐる、眼が見える、まだ耳が聞える、生きてゐる、神は愛だといつて喜んでゐる。それを宗教といふ。無限の神の愛が内側に覗き込むと、苦しい生活が喜びに變る。個人のみならず、社會がやはりさうである。

四十年前、岡山に醫學校の生徒がゐた。石井十次といつて、二人の乞食に感じて、大きな孤兒院を建てた人である。後に彼は神の愛が自分に宿つてゐる事を信じ、千百餘人の孤兒を世話するやうになつた。一人の人間が神と永遠を孕むと、孤兒を救ふ力が出て来る。私はここで岩谷小梅の話をしなければならぬ。岩谷小梅は、木戸孝允の友人中川横太郎の妾をしてゐる藝者であつた。が、開國主義の中川がキリスト教を輸入した時、彼女は眞先にキリスト教を信じた。小梅は中川の怒りに觸れて仕送りを断られたが、彼女はそれから神戸女學院に學んで、そこを卒業した。日本の淨瑠璃界の第一人者豊竹呂昇をキリストに導いたのはこの小梅だつた。この小梅の信仰傳道は花柳界の女を次から次に救つて行つた。この小梅に感化された者の一人に安部磯雄氏がある。安部氏自身がこのことを告白してゐられる。安部氏が二十歳の時岡山に傳道に行き、後に社民黨

の黨首となつても、愛と正義の運動を棄てないのは、一部分は小梅の感化のためであると告白してゐられる。神と永遠が覗き込むと、日本の無産者は救はれる。石井十次は、孤兒のために食べさせるものがなくなると、毎朝赤毛布を被つて山に祈をしに行つた。その姿を見るとすぐ岩谷小梅は街へ行つて金を集めて來たといふことである。かうして石井十次の事業は小梅から偉大なる後援をうけてゐた。

私がいふ神と永遠の運動は理窟ではない。それは力である。地上に於ける最も虐げられた醜い罪人をも、憐れな無産者をも救ふ力である。大工イエスは神の子として地上を歩いた。そして神が世界を創つたのだから、どんな醜いものも神のもの、それを救はなければならぬといふ意識を起した。神の救に入らなければ眞の生活はない。宇宙意識、更に神の意識、神の子の意識、絶對意識を持たなければ、決して眞の社會改造はあり得ない。この意識が常識になると國はよくなる。

社會改造の原動力

六十年前デンマークは世界の貧乏國であつた。それが今日最も富める國になつたのは、その根本に、神の永遠といふ意識がグルンドウキッヒといふ一青年の精神から流れ出たからであつた。そして、土を愛し、國を愛する運動がデンマークを富める國にした。

日本の現状は農村も都會もなげき、失業者が巷に溢れてゐる。その反面に十五億圓の酒を飲み、

十億圓の放蕩をし、到る處に不道德が行はれ、一部の特權階級が貪り、蹂躪された者は自暴になり、神を忘れた人間はさ迷ひ歩き、地獄に行く人の如く煩悶して行くべき道を知らない。この時に、まづわれわれは、神と永遠をはつきり體驗し、キリストのやうに永遠への道を行かなければならない。さうしなければ、眞の日本の行くべき道は發見出來ない。教育運動も經濟運動も速かに神と永遠への思慕を基礎としなければならぬ。

フランス流とイギリス流

フランスで革命が起る都度、英國は宗教運動によつて救はれて來た。ウエスレーや、キングスレーや、フレデリック・モリス、或ひはブリス大將の神と永遠への運動が英國を救つたのである。フランスはその間に革命を三度した。ロシアの革命は一八七一年のフランス革命の模倣であつた。日本は何れの道を選ぶべきか？ 革命か、神と永遠の運動か？ 物質革命か、精神革命か？ われわれは内側から永遠への道を歩まなければならぬ。その責任は若き青年の上に懸つてゐる。青年は氣が早いからぶち壊したが、永遠への道を決定する方法がある。ウエスレーが十六人の同志と一緒に、迫害、壓迫に耐へた如く、われわれの中にも十六人の者はゐないか？

私は日本の將來を思ふから、消費組合運動、無産者解放運動、共濟組合運動、あらゆる互助組合の運動をして、それを基礎として日本の精神運動を確立しなければならぬと考へてゐる。い

まだに無産政黨は合同出來ないでゐる。神のやうな太腹な精神がないからである。西洋ではキリストの精神的基礎があるから、これが出来る。日本にはさういふ精神的基礎がないから、小學校へ行けば先生と生徒との間に距離があり、役所へ行けば、上役と下役の間に冷たい感じがある。これでは日本に不景氣が來るのはあたりまへである。われわれはまづ自分の内を省み、神の前に恥しくない生活を送つてゐるか否かを考へる必要がある。そして神の前に恥しくないやうに、われわれの行くべき道を決定しなければならない。

私は日本の時代相に鑑みて、青年の奮起を促したい。獨逸がフランスのナポレオンに蹂躪されたときに、フリドリッヒ・フォン・ファイヒテが、「獨逸の青年に訴へる」といふパンフレットを出した。日本に神を孕む精神がある間、日本は不景氣を突破し得る。英國の強みは無産運動の基礎として精神運動があることである。英國は百七十萬の失業者を持つてゐても、その國策は揺がない。神を基礎にする民族は永遠への道を歩む。日本に於ける社會改造も、神と永遠の道を基礎として進んで行かねばならない。勿論われわれは自己の貪慾を辯護する爲に、精神主義に隠れたり、自己の地位を守る爲に、修養を用ひてはならぬ。大膽に神の前に懺悔し、赤裸々になつて自らを社會の前に投げ出し、日本を神と永遠の道に送り出さなければならぬ。

勝利の悲哀

ナポレオンは征服の悲哀をモスコウ城外雀が丘で味つた。今日本も勝利の悲哀を味ふ時が来た。剣による勝利は、人の魂を征服しない。愛による勝利が、永遠の平和を保證する。多年恐れてゐた支那の分割が始まつた。滿洲は獨立し、蒙古はロシアに奪はれ、西藏も英國の援助のもとに獨立するであらうと新聞が報じてゐる。かうなれば、四億の漢民族は、再び新しい植民地をどこかに發見しなければならぬ。漢民族を助けて、永遠への道を歩かしめるものは誰であるか？

秋が深くなつてゆく。八月のなかば頃に日蔭の下葉はもう赤くなつて、武藏野の道を黄色く染めてゐた。その時私は日本の悲哀をその盛夏の散りゆく葉に味つた。言ひ知れぬ憂愁が私の胸の底を流れる。貧乏だからではない。一人ぼつちだからではない。日本が今まで持つてゐた世界に誇るべき榮譽が、あまりにも表面的な勝利によつて傷つけられるからである。靜かに頭を垂れて、日本の更生と、勝利を超越した永遠への道が、再び湧き溢れるやうに祈らざるを得ない。

奮闘の人・繁榮の村

林檎で救はれた村

青森縣は去年も今年も饑饉と洪水の災害に見舞はれたが、幸ひに、林檎で村の會計をつけてゐる地方は比較的困つてゐない。これは、佐藤勝三郎氏の林檎栽培に對する偉大な貢獻の結果である。

今から約五十年前のこと、佐藤氏はクリスマスの際に、西洋人の宣教師から妙な果物を一つ貰つた。後で分つたことであるが、それは林檎であつた。彼は他の人が食つてゐるのに食はないで、そのまま自宅に持ち歸り、庭に埋めて置いた。ところが不思議にも、翌年の春、それが芽生えて生長して來た。そこで佐藤氏は、アップルと稱する西洋種の林檎が、日本に於いても栽培せられることを知り、種々研究の結果、岩木山の東側、主として岩木山によつて強い西風を防ぎ得る地方だけに、日本に於ける最も良き林檎が栽培出来ることを發見した。

この林檎は、毎年、宮中に差上げられる青森縣特産の林檎で、名をインドと呼ばれてゐる。それを最初にくれた宣教師が、北米合衆國インディヤナ州の出身であつたが故に、土地の人はこれを省略してインド、インドと呼びならして來たのである。それが青森縣に最も豊富にある林檎であつて、今日では年産額約五百萬圓に達するやうになつた。そのうちに、青森縣廳は林檎が青森縣に適することを知つて、縣自らが林檎の苗木を北米合衆國より輸入するやうになり、佐藤勝三郎氏も自分の庭を林檎畑に作り變へて、更に良き林檎の栽培に貢献したのであつた。

この貢献に依つて、氏は藍綬褒章を戴いたのであつた。それ以來、青森縣の津輕半島などでは饑饉の憂ひは非常に少くなつた。微細な點に努力しても、それが村を救ふ端緒になることがあるのである。

牛乳と信用組合で更生

北海道の石狩川方面は凶作と洪水で悩んでゐるが、不思議に北見方面の諸村は饑饉の憂ひから免れてゐる。その主な理由は、村が一致して乳牛の飼育と養鶏貯蓄組合に依つて信用組合を作つたことにある。

北見國遠輕町は北海道に於いても比較的氣候に恵まれない地方であるが、その方面の農村が饑饉に窮乏しなかつた一つの理由は、乳牛組合に依つて經濟的に餘裕があつたためである。その背

景には、北海道酪農組合長宇都宮仙太郎氏の隠れた努力があつた。

宇都宮仙太郎氏は、早くから北海道に適する乳牛の輸入に努力し、生産組合並に販賣組合の組織に努力した。そして、自分の家族の者をデンマークに送つて、デンマーク農業の經營方法を學んだ。そしてほとんど全財産を投げ出して酪農組合の組織に著手し、友人等に助けられて、日本に於ける最も大きな販賣組合を組織するに至つたのである。北海道の製酪の八九割までは、宇都宮氏を組合長とする酪農組合に依つて統制されてゐるのである。

資本家側の、營利を基礎とする牛乳の會社は、最近の恐慌と不景氣のために農民に迷惑を掛けて、農村から退却した。その後を受けて、宇都宮氏を中心とする酪農組合は献身的の努力を拂ひ、農産物の價格の暴落の際にも、農民の生活費を補ひ得る程度に價格を維持し、穀類の取れなかつた昭和六年の冬にさへ牛乳を生産し、これを北海道酪農組合に納めた者に對しては、冬期間の生活費を全部保障した。この爲に、北海道の農民はどんなに救はれたか知れない。遠輕附近の農民の一人が「乳牛組合のあつたお蔭で、私たちは饑饉から逃れた」と私に話してゐた。私は、日本の荒地を利用する方法を知り、これを共同組合の力に依つて維持するならば、饑饉或は凶作の場合にも農村は決して困憊しないことを知つたのである。

なほ、遠輕地方で私が感心したのは、同地の人々が、信用組合を作る資金が無かつたので、約一年間、鶏を飼ひ、その卵の代金を全部貯蓄し、一萬圓以上の貯蓄が出来たので、それを基金と

して信用組合を作つたことであつた。これによつて、農村の金融は非常に圓滑になり、その附近の農民の潤ひは非常なものであつたとのことである。

養鶏組合で繁榮した村

大阪府三島郡山田村には、二十七戸の小作農があつたが、或る横暴な地主の爲に五年ほど前全部土地を取り上げられてしまつた。

當時私に相談があつたので、私は養鶏組合を作つて生活を維持することを奨めたところ、彼等は直にその實行に移り、二里近くもある遠い所に荒地を買ひ入れ、鶏の飼料を作り、其處で協同耕作をし、良き種卵を買ひ入れ、棄てて置いてあつた養鶏場を復興し、二十七家族が一團となつて養鶏組合を始め、好成绩を擧げた。しかるに卵の値段が暴落したため、一時非常な困難に陥つた。そこで、二十七軒の人々が卵の卸問屋に卵を送らないで、自ら小賣りすることを思ひつき、毎日、その日その日の卵を持つて大阪京都方面へ出かけ、一々小賣りして廻つた。その爲に卸問屋に卸す倍くらゐの値段で卵が捌けるやうになつたのであつた。

やがて卵の品種が非常に良いことが知れ渡り、大阪方面の各村及びその附近の養鶏組合から、進んでこの種を取寄せるべく、この養鶏組合に申込みやうになつて來た。その爲に、今日二十七軒の小作農は愉快な生活が出來、なほ餘裕を生じてゐる。これなどは、小作農が土地を離れた場合、如何にすべきかの一つの良き暗示だらうと思ふ。

最初の組合診療所

今から十年前、島根縣八束郡秋鹿村に、加藤佳吉といふ青年がゐた。

彼は貧乏な農家に醫者の來てくれない事を憤慨し、斷然意を決して産業組合に依る組合診療所を經營することを思ひ立つた。郡の醫師會は猛烈に反對したが、知事が同情したので、小さいながらも、日本で最初の組合診療所を開設することに成功した。今は内科の醫者と齒科の醫者の二人に依頼して、約千二百戸の農家に、組合に依る診療を續行してゐるが、これに倣つて全国的に擴まつたのが、今日の醫療利用組合運動である。私はこの組合診療所を訪問して、平和の村から病氣に依る貧乏が掃されたことを見て喜んだのであつた。

この運動が鳥取縣倉吉に飛び火して、今日倉吉町を中心とする産業組合に、約五千戸の人々が、僅か一日二十五錢の入院料で診療を受けることが出來るやうになつたことは、實に嬉しい事である。約十三萬圓の費用を投じて、倉吉町に大きな組合病院を設立し、院長には有力な醫學博士を迎へ、病室に一等二等三等の區別を廢して、或ひは休養室、或は安靜室といふやうな美しい名前を付けて、數人雜居する部屋には部屋料として一日僅か二十五錢を課し、食事は全部自炊するやうになつてゐて、一ヶ月病氣しても僅か七圓五十錢位の金を拂ひさへすれば、手術料の外は何等

憂ふることなしに入院出来るやうになつてゐる。これなどは、一人の青年が一村を救ひ得る方法を案出した結果、更に他の村の救済の途が開かれた好模範である。

粃殻を焼く器具

宮城縣亙理町に近い農村に、森孫太郎といふ老人が住んでゐる。この人は、宮城縣の南部の農村が疲弊してゐるのは、土地の改良の出来ない爲であることを知つて、自ら粃殻を焚いて灰にする器具を考案し、粃殻を焼いてそれを土に混ぜ、多くの膠質を造り、これに依つてこの地方の米穀の収入を約倍加することに成功したのであつた。

今日、森老人は宮城縣に於いて有名な篤農家の一人になつてゐるが、土の性質を研究して、必ずしも西洋農法に依らず、日本従來の農耕法を用ひて村を改良し、貧しき村を救ふ一つの方法を編み出した。今日では、森氏の考案した、粃殻を燃焼せしめる器具は全國的に擴まつてゐるが、その器具を誰が發明したかを知つてゐる人は極く少いであらう。

琵琶湖畔の出來事

滋賀縣東淺井郡朝日村宇海老江は北陸本線の虎姫驛に近い農村であるが、琵琶湖との關係で、冬期にはこれまでほとんど裏作をしなかつた。

そこに酒井良次といふ一人の青年があつた。

彼は基督教的信仰に燃えた優秀な愛郷的青年であるが、斷然、濕氣の多い冬期間の田圃の隅に、一坪餘の深い池を作り、畝を高く積み上げて、そこに大麥を植ゑることに成功した。彼等の同志が村に二十七人くらゐあつたが、皆彼に見習つて、幾百年間棄てて顧みなかつた豐饒な琵琶湖畔の田圃に、冬期大麥栽培を始めることに成功した。これに依つて、たとへ夏期に洪水で稻が全部流れても、食物は絶対に不足しないやうな方法が講ぜられたのである。

なほ同君は、青年會の會長をしてゐた時、率先して奉仕的協同耕作方法を始め、ガソリン・エンジン二臺を買ひ入れて、農家の粃摺を全部青年團で奉仕的にすることにした。その外、彼は田の周圍を利用して樹木を植ゑ、或は琵琶湖畔の小溝を利用して雜鯉の養殖を始め、雜草を利用して山羊を飼育し、これまで使はなかつた牛を琵琶湖畔の農業に使用することを始めた。

更に彼は、嘗て考へられなかつた、農村の日用品を取扱ふ消費組合を、青年團の幹部達と相圖つて始め、同志と共に農繁期の託兒場を創設し、保健組合と稱する團體を組織して、青年の理髪を相互的にやつて理髪屋に拂ふ金を貯蓄し、それを村の衛生運動に使用することにした。

かうして、一つの小さい部落であるけれども、彼の指導に依つて、如何なる災厄があつても、村民が饑餓に苦しむといふことは絶対に無くなつた。彼は僅か二十六歳であるが、彼の如き青年が次々にあらはれるならば、農村の自力更生は容易であると私は信ずるのである。

忠犬パピー

關東の大震災のすぐ後、私は神戸から上京して、震災で不幸になつた人々を救ふために働きました。そのために疲れたのでせうか、翌年三月、病氣になつて、静養のため東京市内から少し離れた松澤村に住むことになり、四月の下旬、家族とともに移つたのであります。

その時、知人から小犬を一疋おくられました。白に茶のぶちのある可愛い小犬でありました。名前もそのままパピーと呼んでゐました。

その時分、私の長男は三歳でしたので、パピーは全くよい遊び友達でありました。

又パピーはよく家の番をしました。ある時は、鳥籠の文鳥を、大きな青大將がねらつてゐるのをパピーが見つけて、吠えて家人に注意したので、危く吞まれようとした小鳥が、助かることが出来たのであります。

鶏も四五羽飼つてゐたのですが、パピーがゐるので、鶏に捕られることもなかつたのでした。パピーは、その後度々、可愛い小犬を産みました。パピーに似た茶色や白黒のぶちなどの小犬

が、ころころ歩き出すのを見て、長男は大よろこびでありました。

二年目の十月、私たちは東京の救済事業も一まづすんだので、家族全部が東京を引き上げて神戸に歸ることになりました。今まで住んでゐた家へは、引き続き友人が來ることになつたので、パピーはその友人にあづけて行きました。

すると、パピーは、十人家族の私たちに別れて、非常なさびしさを感じたのでありませう。毎日二町ばかり隔つた京王電車の停留場へ、歸りもしない私たちを迎へに行くやうになりました。一日中待ち續けても、私たちの姿が見えませんが、打ちしほれながらパピーはとぼとぼと夕方歸つて來て、縁の下の自分の寢床に寝ます。けれども、迎へに行くことはやめず、來る日も、來る日も、パピーの日課は變りませんでした。

新しい飼主は、初めのうちは氣づかなかつたのでありますが、おひおひパピーの美しい毛並は艶がなくなり、元氣は衰へ、痛ましくやつれて行きました。そして私たちが戀しさに、食事もしないで、一日中停留場で私たちを待ちつづけるわけが友人にも明かになりました。

パピーはだんだん衰弱が増して行きました。そして、可哀さうに、再び私たちが松澤村に歸る日を待たないで死にました。

際立つた忠義をし、大きな手柄を立てたといふのではありませんが、これほどまでに主人をおもふパピーの美しく優しい愛情に對しては、私たちは心から感謝してゐます。

武藏野の魂の記録

武藏野の空は高い。そこを飾る樺、椋、檜の森は、青空を彩る自然の刺繍だ。黒土の底から、薄、女郎花、十二單衣、風蘭草が出てくる。火山灰の上に作り上げられた、日本で最も詩的なこの平野は、また多くの詩人を生んだ。そしてその詩人の中、『みみずのたはこと』の作者は、おそらく、彼みづからみみずであることを意識してゐただけに、最も深く武藏野の土壤の精を吸ひ込んでであらう。

私は、十數年前初めて『みみずのたはこと』が出た時に、一気にそれを讀みきつた。或る處は歡喜にひたりつつ、また或る處は、自然の慈愛に感激の涙を流しつつ、私は、武藏野の精が物語るままに讀んだ。

徳富蘆花は、武藏野のみみずである。彼は一旦武藏野に這入つてから、ほとんどそこを出なかつた。折々他處に出ることがあつても、再びその草葉の蔭に歸つて行つた。私は度々彼を誘ひ出

しに行つた。しかし、この土の精は武藏野の土のかをりを捨てようとはしなかつた。そしてたうとう武藏野の土となつてしまつた。武藏野の土は、蘆花をはらみ、蘆花として物語り、蘆花として死んだ。彼は武藏野の精である。

科學者は、武藏野の土を分析する。しかし、土の精には觸れない。

詩人蘆花は武藏野のみみずであつたがゆゑに、土の精を物語る。彼が土について報告する事は、全く顯微鏡的である。彼は、庭にのび上る一本の草花の歴史をよく知つてゐた。『みみずのたはこと』を讀む者は、如何に彼が丁寧に、何年何月何日に、何々の草が何々の地より武藏野に到着したかといふことを、詳しく報告してゐることに氣がつくだらう。彼は、一本の雜草の誕生日をもよく記憶してゐた。まことに彼は武藏野のみみずであつたがゆゑに、狭くはあり、窮屈ではあり、人に踏み附けられることに甘んじたけれども、そこに彼は、彼の運命を發見したのであつた。

彼はながい論文は書かなかつた。彼は、土から發散する蟬蛸のやうに、斷片的に「たはこと」を書き附けた。このみみずの日記帳が、みみずの魂の日記であり、武藏野の精の自叙傳であるのだ。ほんとの、よくまあ、こんなに眞剣な、そして深刻な土の記録がのこされたものだ。この作は、斷片的手記であるだけに、武藏野の生命の總てに觸れることが出來た。しかし、斷片的に書かれたこの「たはこと」は賢人の哲學よりも深い眞理をわれわれに教へてくれる。神の愚は人の

智慧よりも賢いと、昔の人はよくも云つたものだ。「みみずのたはこと」は、近代に書かれた日本の多くの哲學書にも勝つて深く宇宙の眞理を啓示してくれる。あの平凡に書かれた「草とり」や「不浄」の記事の如き、まあ何といふ深い眞理をわれわれに教へてくれることだらう。彼は自然淘汰の苦しい戦ひの中に、強い宇宙救済の意志が働いてゐることを決して見のがさなかつた。これを彼は、理論として記録しないで、不浄物の始末において見たのであつた。

彼、土から生れたものの中に、人の子をも數へる、武藏野のみみずは、彼の頭の上を踏んで通つた、多くの、土で製造された人間の消息についても、觀察を怠らなかつた。しかし、そこにも彼は、みみずとしての尺度を忘れない。彼の見た「土の子」はやはり土臭い香がしてゐる。このみみずは、七千三百マイルの直徑を持つ土のかたまりを基礎にして、土にわいた「人間蟲」の觀察を怠らなかつた。それが毛蟲に類するものであつても、それが乞食の安さんであつても、かれは見のがしはしなかつた。安さんは土の上を歩いた。そして歩き廻つただけでも、みみず自身よりも多く歩いたかも知れない。しかし、武藏野のみみずは、土で出來た乞食の安さんを、武藏野の産物の一つに數へてゐる。乞食のラザロをも天國に送り込んだ。天の親父の消息が見える。武藏野のみみず蘆花は、土の下から天の親父の氣持で總てを記録した。そのためであらう、彼の記載する總ての自然は、實に温かい自然であり、情の深い自然である。天空にかかる、直徑七千三

百マイルの土のかたまりは、宇宙の心臓であり、神の顔であつたのだ。
「みみずのたはこと」は、永遠の眞理を私に物語つてくれる。

天文學から見た新天地創造論

宇宙の突然變異

進化論と天地創造との比較論を少しばかり、主としてジーンズ博士の天文學の立場から考へてみたいと思ふ。今から約六十年ほど前のチャールス・ダーウキンなどの説によると、自然界は順序をたてて進化發展してきたといふ。カントやラプラスなどいふ人もさういふ考へを根本にしてゐた。つまり、宇宙は星雲からだんだん固まつて、しまひには太陽から地球が出来、地球から月が飛び出して出来たのだと考へてゐた。ところが、最近、突然變異があるといふ説を新しい地質學者、天文學者がいひ出した。

私はフィリップンへ行つてゐる間に、地質學の立場から、岩層の順序が進化論的になつてゐないことに気がついた。普通なら、地球上では古いものほど下にあり、新しいものが上になつてゐる筈なのに、ヨーロッパではさうなつてゐない。さういふ處が地球上に澤山ある。そこで、どう

も地球の表面が順序よく行つてゐない。われわれの想像もつかぬ激變的事件が起つたに違ひないといふことを研究發表した書物『我等をめぐる宇宙』をよんで、私は感心した。

それは實際驚くべきことである。普通の進化論からいへば順序よく重なつてゐる筈なのに、實際はさうなつてゐない。かういふことを最近地質學者がいひ出したのである。なぜ地球に皺がよつてゐるか？ おそらく、月や地球が出来た瞬間に何か激變があつたのであらう。その激變が確かに地球上に残つてゐるだらうと思ふ。

ジーンズ博士は、天地は神が創つたと主張する天文學者であるが、かうはつきり説明し得たのはジーンズ博士が初めてである。なぜかう云ふかといふと、まづ第一に地球の話から始めなければならぬ。地球は遊星であり、遊星は太陽系に屬してゐる。そしてこの太陽系は、最も珍しい星だといふ。太陽系は宇宙の眞中にあるのではない。それは銀河系統に屬するものである。何百萬といふ銀河系があるだらう。その一部分の隅つこに屬してゐる太陽系は、星の中でいふと、實に不思議な星で、あれだけの熱を持つてゐるものはほかにない。大抵のものは弱りつつある。しかし多くの星は太陽と同時刻に出来たので、決して進化的な徑路は見えない。人間の目にうつるだけでも三千の星があり、望遠鏡で見ると何億とある。その星の中で、特別古いとか新しいとかいふ星はない。大體に於いて、恒星は太陽と同じ頃に出来たらうと考へられてゐる。宇宙の外側から或る働きで宇宙に特別な力を注ぎ込んだと考へなければならぬ。そして 1.8×10^{18} の熱で

空間に注ぎ込んだほどの力で、物質のやうなものを造つたと考へなければならぬ。ジーンズ博士はさう思ひきつて書いてゐる。

ただ一度の機會

宇宙の星には必ず初めがあつた。そして終りもある。無限から無限に續くなどといふことは考へられないとも書いてある。物質の中から光が出て、物質がだんだん變つてゆくと考へるなら、ラヂウムの如きは消えてしまふ。凡ての物質はラヂウムのやうなものだから、太陽も消えてしまふ。丁度ラムプの油が絶えて、光が消えてしまふやうに、太陽の光も消えてしまふ。だが、最初ラムプの中に油が一度に注ぎ込まれたやうに、宇宙にもさうやつて何か特別なもの一度に注ぎ込まれた時があつたに違ひない。だから、終ひにはその油が切れて消えてしまふのだと、はつきり天文學的に説明してゐる。

ジーンズ博士は、引力の研究を二十數年間してゐるくらゐの人だから、その云ふ事が面白い。宇宙に太陽のやうな存在が稀なやうに、地球のやうな面白いものも珍しい。遊星といふものが大體少い。遊星のある星は太陽系以外に見つからない。あつたところで、地球のやうなものとは違ふ。星には光つてゐるものが多くて、光つてゐないものは少い。そして地球のやうな光つてゐないものは、何百億年も續くだらう。といふのは、地球はラヂウムのやうな原素を持つてゐること

は少くて、大抵の原素は固まつてゐるからである。

太陽は一分間に三千六百億噸に近い熱を出してゐるのだから、一分後には三千六百億噸の熱が減つてゐる譯である。地球は一分間に九十ポンドくらゐしか減つてゐないから、地球はなかなか收縮しない。收縮しても、目につかないくらゐである。だから、千萬年経つても、人間の住所に適しないといふことはないといふ計算してゐる。なほ面白いのは、この太陽系の構造が水素原子の構造と全く等しいことである。

遊星は、太陽に近いものからいふと、水星、金星、小遊星、地球、火星、木星、天王星、海王星、冥王星の順で、太陽と水星との距離は一、水星と金星との距離は二、金星と小遊星との距離は四、小遊星と地球との距離は八といふやうに、二倍づつにし、その各々を三倍し、更に四を加へると、遊星間の大體の距離が出てくる。さういふやうに計算して最近発見されたのが冥王星である。原子もやはりさうであつて、原子の構造は太陽系の組織と全く同じである。

そこで、太陽から地球が出てくるのは、自分の力ではねとばしたのでなく、一つの星がすぐ側を通過して、その引力にひかれ、引かれた部分がとび出してしまつたのである。だが、二萬三千年の週期で太陽が銀河を廻つてゐる。その銀河の中を或る星が何百萬年前に通過した瞬間があつた。その形跡があるのは大熊星やアンドロメダ星座等で、明かに銀河の中を一度通過したと思はれる點がある（が、その時に地球から月を離れたとは、云つてゐない）。かういふ機會は實に

珍しい。宇宙の星は宇宙全體からいふなら、全歐洲に六匹の蜂を放つたやうなもので、互に衝突するやうなことはない。

天地の創造

さういふ風に考へてみると、神が或る目的をもつて太陽から地球を引き出したやうに考へられる。世界が始まつてから、かういふ事があつたのは只一度である。何千人かの人間が、一生懸命星を覗いた結果、どうしてこんな地球が出来たかはわからないにしても、とにかく地球のやうな不思議な珍しいものは他にはなく、また地球上に住む生物のやうなものもなく、地球は結局生物をつくるために太陽系の中に造られたものだと思へるやうになつた。更に、この地球も永遠に亡びないのではない。何百億年かの後には、地球もばらばらになつてしまふ。丁度土星の輪のやうに。土星の輪は三重になつてゐるが、なぜあの輪が出来たか？ あれは瓦斯體であらうか？ いや、さうではなくて、初めあれは土星の衛星だつた。それが地球の半径の二倍半くらゐの近くになつた時に、ばらばらに碎けて、ああいふものになつたといふことである。月にひかれて地球上の水が干満を示してゐるが、しまひには、月が碎けて地球の輪になり、地球それ自身も太陽にひかれて、さういふものになると、ジーンズ博士は計算してゐる。彗星は星のばらばらになつたものが空間を飛んでゐるのだといふ。

かやうに考へると、ジーンズ博士の宇宙創造論は、必ずしも根據のない説ではないと思ふ。今から六十年も前の學者は天地は神がつくつたといふと嗤つたものであるが、今ではそれに反對する理由はなくなつた。新しい天文学では、宇宙は神が創つたものである。「神元始に天地を創り給へり」といふ創世記第一章の言葉はその儘事實であることを説明せんとしてゐる。地質學者チエンバレンが、宇宙は決して漸進的に進化しない、突然出来たと云つてゐるが、星も決して順序よく進化したものでなく、或る一定の時に、火花が爆發するやうに、一度に出来たものだといふ。さうすると、神は確かにあるのである。

この不思議な宇宙の存在を考へると、ますます不思議である。これを造つたのは神であり、神が太陽系をつくり、地球をつくり、生物の存在を可能ならしめたのであると私は信じてゐる。

西大阪は歎く

東半球の氷河中間時代

災厄が始まるとそれが続くものである。米國カリフォルニアにあるヨセミテ國立公園の博物館で、年輪の週期律的研究を見た時、私は冷氣が三十年くらの續いて、またその後で三十年くらのよき天候の季節のあることを教へて貰つた。そして、天災が續くと人心が動揺し、人心が動揺すると、戦争や暴動が頻發するものである。

最近日本では、大正十二年からほとんど毎年災厄がつづいてゐる。大正十四年には但馬の大地震があり、昭和二年には奥丹後の震災があり、次の年には伊豆の大震災、昭和八年には三陸の海嘯、昭和九年の三月には函館の大火、昭和九年九月廿一日には、關西の大風水害が起つた。

その上、北緯三十五度から北の日本は、冷害のために凶作であり、北緯三十五度以南の土地は、干害のために凶作で困つてゐる。私は最近北海道及び東北を旅行したので、各地の雨量の増加率

をきいて廻つたが、函館、小樽、札幌、旭川の各測候所は、四十年前と比べて二割以上降雨量が多くなつてゐる。

私がこの事に注意し出したのは、西半球に於ける氷河時代の到來を學者がみんな喧しくいひ出したので、東半球はその逆を示してゐはしないかと考へついたからであつた。哺乳動物の歴史からいふと、われわれは氷河の第四期と五期の間に挟まつてゐる譯なのである。そして西半球は第五期の氷河時代に這入らうとしてゐる。反對に、東半球はこれから暖流が北までさし込み、シベリアの氷が溶け、五萬年前の生物であつたマンモスの生肉が、そのまま松花江に流れ出るといふやうな奇妙な現象を示してきてゐる。

こんな事から、私は北緯三十五度以北の日本は、これから益々降雨量が増はり、洪水が週期的に起り、悪くゆくと、太陽熱の缺乏のために相當に長い期間凶作の來襲を見るのではないかと案じてゐる。そしてそれとは逆に、北緯三十五度以南は、降雨量に變化を生じ、それより北とは全く異つた状態を呈するのではないかと思つてゐる。こんなことに就いて、私はアマチュアであるから確かなことはいへないけれども、いつも旅行しがちな私は、各地の氣候を比較研究してみ、近頃、そんな事が頭に浮かんでゐるのである。

北太平洋低氣壓地圖

昭和九年二月、私はフィリピンに行く途中の船の中で、偶然にも、北太平洋低気圧の進路地圖が神戸海洋氣象臺の手で作成されてゐることを知った。それは實に貴重な資料であると思つたので、私はわざわざ神戸海洋氣象臺に貰ひに行つた。何でも北大西洋は米國が責任を持ち、北太平洋は日本が責任を持つてゐるのだと聞かされたが、私はその十年間の平均低気壓進路圖を見て、風にも道があるのだなと感心したのであつた。それによつて、私は三月に函館に大火が起る理由も知ることが出来た。その頃函館には漁夫仲間で「大西風」といはれてゐる風が必ず吹いてゐる。その地圖によつて、私は、八月九月に紀州から大阪方面が意地悪く苛められることを了解してゐたのであつた。九月二十日の晩の夕刊で、私は、暴風が沖繩に現れたことを讀んだ。そしてそれが、神戸氣象臺の低気壓進路圖によつて、九州の南から和歌山縣を掠めて、東京まで東海道を直線に北東に走ることをよく理解してゐた。それが八月であれば玄海灘に出て日本海を荒し、青森縣の上を西から東に横切つて、太平洋に出るべき性質のものだといふことも考へてゐた。しかし、九月であるので、必ず土佐沖から和歌山縣の田邊地方を荒して、東海道の五十三次を北上するだらうと豫測してゐた。

ところが、あとになると、そのコースはやや北に寄つて、大阪京都方面を襲うて、日本アルプスで三分したと聞いたが、私は、心構へしてゐただけに少しも慌てなかつた。だが、あんな大きな損害を大阪方面に與へるとも豫期してゐなかつた。

西大阪の津浪

白狀するが、私は、九月二十一日の災厄が甚だしいといつても、それは軍需品工場や粗悪な小學校建築に致命的な損害を與へただけであつて、西大阪が浸水したといつても、少しばかりの風水害であらうと思つてゐた。

その日、東京府北多摩郡千歳村上祖師谷の、私の關係してゐる農民福音學校の校舎の一部分が屋根を吹き飛ばされたので、大阪の被害もその程度であらうと思つてゐた。それが、大阪に歸つてみて、風害もひどかつたけれども、そのために起つた津浪の災厄の方が、更に深刻であつたことを聞いて全くびつくりした次第である。

一體、こんどの關西の風水害の記事は、大阪に關係のある新聞のほか、東京ではほとんど馬鹿にしてあまり書いてゐない。殊に、津浪の記事などは全く無視してゐるといふやうな傾きがあつた。それもその筈、大阪にゐる者でさへ津浪のあつたことに氣がつかなくつたといふことである。しかし、大阪で聞いてみると、この度の津浪はとても大きなものであつたらしい。自動車が二十分かかる距離の處を、大きな津浪が十七分くらゐで走つて來たので、運轉手などで自動車諸共溺れて死んだものが多數あつたとのことである。

私は、大阪此花區四貫島にセツルメントを持つてゐるので、電文を見ただけでは、ただ水害